

麗澤教育

第11号

平成17年（2005）4月

特集：麗澤大学の教養教育
～豊かな感性、広がる世界～



『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成7年より毎年1回発行しています。

麗澤教育 第十一号

目次

〈フォト・アルバム〉この一年①

〈特別寄稿〉

理想の華を咲かせよう……………	小松 雅雄……………	6
日本一小さな大学の大きな志……………	細川 幹夫……………	8

〈オピニオン〉

大学生時代の四季……………	井出 元……………	16
企業の社会的責任と麗澤大学に期待されること……………	高 巖……………	22

〈フォト・アルバム〉この一年②

〈特集〉麗澤大学の教養教育 ―豊かな感性、広がる世界―

① 麗澤大学における情報基礎教育と学生の動向	牧野 晋	30
② 教養としての歴史	櫻井 良樹	36
「不潔な学問」のすすめ	堀内 健司	38
「教養ゼミ」を受けて	柳 英 武	39
③ 比較思想―人生を考える―	竹内 啓二	42
④ 比較文明論とは何か？国際人たるための世界認識の構築	保坂 俊司	48
⑤ 現代人の基礎教養としての生命科学	立木 教夫	56
⑥ 心理学の基礎的研究から応用まで	北川 公路	62
新鮮で楽しい未知の世界	小二田美穂	67
⑦ スポーツ実習で何を学ぶか？ 体育実技の質の改善を求めて	豊嶋 建広	68
ダンベルで体づくりを学ぶ	深作 絵美	72
高校の授業にはないスポーツを体験	森田 早紀	72
⑧ 総合科目再開	大野 仁美	74
⑨ 論作文教育の軌跡	大竹 秀一	80
表現論を学んで	小川みずき	84

⑩ 多文化共存・共動を学ぶ愉しさ―学生がもつ力を引き出すために	正宗 鈴香	86
多文化共存・共動の授業を受けて	猪股 来未	91
⑪ 芸術文化論を学ぶ愉しさ	金光 陽子	92
美術との触れ方が変わった	青木 郁予	96
⑫ 麗澤大での四十五年間	多田 舜保	98

へコラム 温故知新・その三へ

厳なれども威ならず	池田 裕	104
-----------	------	-----

へ麗大の今へ

① パラリンピックへの挑戦	国枝 慎吾	108
② 第四十一回麗陵祭という新しい第一歩	水長 顕仁	112
③ テニス部の活動を通じて学んだこと	三浦 友子	116
④ 昨今の就職状況と麗大生の実態	三浦 有三	120
⑤ 情報処理支援ハブ(ISSH)について	千葉 庄寿	124

※寄稿して頂いた在学生の学年は、平成十六年度のものです。



朝青龍奨学生が入学 (2004・4・12)



中央広場で野外昼食会 (2004・5・12)



一日郵便局長を務めた院生の郭蕾さん (2004・4・21)



トリパティ駐日インド大使が来学 (2004・6・16)



留学生歓迎懇親会 (2004・4・23)



1泊2日の体験入学参加者を迎えるスタッフ
(2004・8・1)

理想の華を咲かせよう

名誉教授 小松 雅雄



大学の使命が教育と研究にあることは論をまたない。教育は、人びとの真の幸福を実現するために、また、国家・社会の発展と安定のために、必要とする人材を育成し、社会に送り出すことを意味している。それは極めて意義の深い、そして、それだけに崇高でさえあるものである。

だからこそ、そこに生きている人には、その自覚を深め、その活動に誇りと情熱をもつことが必然的に求められるのだ。

研究活動には、即現実的な内容のものもあれば、現実から遠く離れたところで、真理を求めることだ

けに集中して情熱を燃やしている人もいる。応用的・実学的なものと、非実学的なものと、分けることもできよう。

この教育と研究の両者は深く関わりあっており、教育にとって研究は不可欠である。教育内容の向上、教育方法の発展は、この研究活動の成果に待たねばならないからである。

大学の規模と存立理由によっては、大学人は、純粹に研究者でもありうるが、一般的な大学の大学人は、教育者であり同時に研究者であることが求められている。そうしてこそ、大学の教育が最高学

府のものとしての役割を果たすものとしての評価をうることが出来る。この教育に燃え研究に燃えている指導者・教授の姿は、陰に陽に、受講生に決定的な影響をもつことは、大学人が自ら経験していることであろう。

大学が教育と研究に燃え、この土壌から人材を世に送れることこそ、その大学の誇りである。理想である。

この情熱が実現するためには、大学人の個々の主体的意識の確立こそ、全てに先んじて大切であることはいまでもない。しかし今日のように、教育のハード面が技術的にも量的にも発展している状況下では、精神論だけでは対応できない。昔のように、豊の上に粗末な机一つで講釈を学ぶだけでは時代の進運に就いてはいけない。

その設備の整備は、本来はその大学の責任で遂行すべきものである。国立大学は、国の財政によって全てが賄われてきた。しかし私学は、基本的には自前の力によって対応すべきであり、過去においては

そうしてきた。けれども、今日私学が果たしている教育・研究の役割の大きさに比し、国立大学との格差が拡大してきたので、それを埋めるべく国の私学助成がなされてきたことも一理あるところである。

それにも拘らず敢えてこの問題に触れたのは、自らを固く持たないと、私学人の自主独立の精神が崩壊し、他力本願になりかねないからだ。私学人の中には、見識のないままに助成費獲得の下等政治に狂奔する事を誇る人もいる。

われわれは、誇りある大学を創るために、独立不羈きの精神を高く持し、教育と研究に燃えるに燃えよう。そして、大学人として美しい理想の華を咲かせよう。

国際経済学部を新設して、学祖の意思を一層発展させようとしてきた麗澤大学は、理想を実現して、美しい華を咲かせるべく、これからも燃え続けなければならぬのだ。

日本一小さな大学の大きな志

外国語学部教授

細川 幹夫



歳相応に視力が弱ってきたので、故廣池千太郎先生(第二代学長)一周忌の記念品としていただいた虫メガネ兼用の文鎮を取り出してみた。それには先生の「座右の銘」が刻印されている。

大きく、高く、清らかに 千太郎

この言葉はかつて拝聴した記憶がない。大学の入学式や卒業式の式辞でも、講演でも発言された言葉ではなさそうだ。モラロジの精神伝統を継承する廣池学長は、自ら実践躬まご行することに専念されて、生前、我々に教訓めいた言葉を吐露されることはなかった。いくら学長が公言しても教職員や学生に直

ちに浸透するわけではないし、また戦中時代の軍事体験や戦後の世相に対する自戒に基づいていたかもしれない。この銘に主語を入れると「志は大きく、高く、清らかに」となり、建学の理念を平易に表現したものであろう。

そう解釈すると、思い出すことがある。多くの私立学校には、かならず「建学の理念や精神」がある。それらはいずれも文句の付けようのない立派な文言であることが多い。本学の場合も「廣池千九郎創立者・法学博士」の教学の精神に基づき、大学教育を通じて世界の平和と人類の幸福の実現に貢献するため

に、研究教授補導を行い、円満な知徳と清深な学芸、特に世界的国際的識見を備えた有能な人材を育成する」とある。この理念の実現を本気で考えたら、尻込みしそうな崇高な理念であるが、「日本国憲法」の前文や「教育基本法」にも示されているように、理念は目指すべき理想であり目的を示すものである。

戦後、この憲法や教育基本法の根底にある思想や理論になじみが薄かった筆者にとつて、「道徳科学」はまだなじみややすく、国立の付属学校でも必要に迫られて活用もさせてもらっていた。そこで二年間ぐらい、もう少し本格的に研究してみたいと思ひ立ち、一九六五年の春、道徳科学研究所(現モラロジー研究所)に入所させてもらうことになった。

当時の麗澤大学の入学定員は一学年九十名であった。そこで初代学長の廣池千英^{ちぶさ}先生は、常々「日本一小さな大学」と公言されていたのである。教職員は廣池博士の教学に共鳴し、あるいは敬慕して集まった人ばかり。学生諸君に対しては親代わりや兄弟代わりになって、この学園の高い理想を「師弟同学

同行」の姿勢で共に学ぼうとする精神がみなぎっていた。したがって、大学生にも廣池博士の夢を少しでも実現しようとする志や勇気をもつ者がいた。その一例はこうである。イギリスからやってきた外国人講師が「学生の中に三人の聖者がいる」と教えてくれ、会いに行つた覚えがある。夢で廣池博士にお会いしたという純真な学生もいた。また、後に本学に係わるようになって女子寮の舎監を命ぜられ、新年度恒例の長滞遠足に出かけた時のこと。寮長が舎監の弁当までも用意してくれるという。それだけでもありがたいことだが、彼女はその弁当を現地まで持参して山に登り、昼食時になってから手渡してくれた。その行き届いた心遣いに驚くやら、感激するやら。さらに普段の講義の時にも、学生の有志が自発的に「お茶とお絞り」を用意して、教卓の上に置いてあることもしばしば。日本一小さな大学には、このような雰囲気^{ふんいき}が自然に備わっていたのである。学生たちは完全に大人であった。

それに反して筆者の心理状態はどうであったか。

郷里の高知県は自由民権運動の発祥地として知られる。戦後の教育界は日教組の御三家の一つといわれ、組合活動は旺盛で労働運動の激しさは、当時の県教育委員会委員長であった甲藤義治氏が『日本の教育』の「秋霜編」に余すところなく詳述している。当時、筆者は県立高校の教員になったばかり。学校では毎日のように「教育姿勢」をめぐるイデオロギー論争に明け暮れ、教育委員会との間では兵器のない激闘が繰り返されていたので、その混乱の渦中に投げ込まれた。さらに一九六九年に始まる大学紛争にも遭遇して、鉄拳や小石、角材や火炎瓶などがどこから飛んでくるか分からない、革命前夜のような「修羅・餓鬼の世界」を嫌というほど体験した。そのような環境の中に長らくいたので、この学園はしばしの休息と平安を与えてくれるオアシスであり、避難港であって、教職員や学生から学ぶことは多大であった。

この雰囲気を目撃した自民党本部で行われた「教育基本法改正」の研究会で少し紹介すると、日本大学総長を



留学生と故・廣池千太郎先生

はじめとする法学や教育学を専攻する参会者が関心を示され、見学を希望される国立大学の教授もいたほどである。そのことを千太郎先生に報告して相談したが、「宣伝することはないよ」と穏やかに言われた。千太郎先生はあくまで学生の自発的な「陰徳的行為」を大事にされた。だからご自分の銘についても公言されなかったのだろう。

このような創立当初の少人数・全寮制による「手造り」の教育体制を廃止して、現在のように大学間の生存競争の中に参入すると、その規模を拡大して経営効率を高めるようになる。そうなると、ますます時代思潮の推移に影響されやすく、また教職員の世代交代や学生のニーズの変化と相俟って、建学の理念や精神を実現しようとする機運は次第に忘れられるか、変質しやすくなる。戦後の科学主義の立場からみれば、理念は理想か空念仏に過ぎないと考えて「祭り上げ」られる。それは仏教でも教えられている通り。たとえば、鎌倉後期から室町初期にかけて活躍した臨済宗の禅僧・夢想国師（疎石）が足利

幕府の政治的中枢にいた足利直義（尊氏の弟）の現世利益的な質問に答えた『夢中問答集』にも出てくる。すなわち、ブッタの在世中やその弟子たちの感化・影響を受けた世代には仏教の真髄は伝承されるが、それ以後になると長い「末法の時代」に入ると。

わが国では、いま憲法や教育基本法を改正する機運がある。それが改正になるか、改悪になるか。世界初といわれる「崇高な平和主義の理念」も空念仏だとして捨て去られるかも。政権党の改正論の旗手は「教育基本法の内容は立派すぎる」と発言してはばからない。結果は後世の歴史にしか現れないが、再び世界大戦の惨禍に足を踏み入れるかもしれない。そういう時期に改めて昭和天皇が悲壮な覚悟で吐露された御前会議の発言や、戦前から廣池博士の信奉者であった鈴木貫太郎総理大臣と戦後にモラロジーの会員になられた迫水久常内閣書記官長とが起草した天皇の「終戦の勅語」を熟読玩味してみる必要があるだろう。

朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ、非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セント欲シ、ココニ忠良ナル汝臣民ニ告グ。(中略)

朕ハ帝国ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ、遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス。帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ、職域ニ殉シ、非命ニ斃レタル者、及ビソノ遺族ニ想ヲ致セハ、五内為ニ裂ク、カソ戦傷ヲ負ヒ、災禍ヲ蒙リ、家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ、朕ノ深ク軫念スル処ナリ。惟フニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハモトヨリ尋常ニアラス。汝臣民ノ表情モ朕善ク之ヲ知ル。然レトモ朕ハ時運ノ赴ク所、堪ヘ難キヲ堪ヘ、忍ヒ難キヲ忍ヒ、以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス。

朕ハココニ国体ヲ護持シ得テ、忠良ナル汝臣民ノ赤誠ニ信イシ、常ニ汝臣民ト共ニ在リ。(中略)宜シク拳国一家子孫相伝ヘ、カタク神州ノ不滅ヲ信シ、任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ、道義ヲ篤クシテ志操ヲツヨクシ、誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ、世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ。

汝臣民ソレ克ク朕カ意ヲ体セヨ。

この勅語の意を体して昭和二十二年に道徳科学研究所を再開し、さらに三十六年に麗澤大学を創設した初代学長千英先生の表情や苦心、さらに昭和天皇の終戦の勅語に至る苦衷を偲び深く敬慕してやまなかつた第二代学長千太郎先生が、晩年に至って「日本語学科」を設置し、昭和六十四年(平成元年)に崩御された昭和天皇を追慕するかのようにブータンで逝去されるまで持ち続けられた思いも、ここに取り上げておく必要がある。

本学は開学当初から建学の理念を具体的に実現するため、「外国語学部」を設置して全寮制の教育体制を敷いた。その一方で卒業生の世界的国際的識見を具体的に会得する場の一つとして、ラオス王国に「麗澤カンバイ模範農場」を開設し、将来の繊維産業の創始も見通した産業開発のために、本学の出身者を派遣して活動を開始したのである。その後、ラオスで社会主義革命が発生して王政が倒れた。革命に

つきものの大混乱の中で「先の見通し」も立たなくなり、また職員の身の安全も考慮して、やむなくオースの開発援助から撤退することになったが、この開発事業を支援し促進するために「財団法人麗澤海外開発協会」が、十分な資金もない時代に、大学とほぼ同時に設立されたのである。それには道徳科学研究所の会員であった故・長谷虎治氏らの企業経営者も参加していたのである。

このような本学の理念を実現する財団法人設立の経緯については、この事業に深く関与した中国語学科の故・奥平定世教授から聴いていた。また、外務省の青年海外協力隊第二代事務局長伴正一氏や協力隊を育てる会の理事水野富士夫氏からも、この財団が政府の発展途上国開発援助を実施に移す国際協力機構に比肩する重要な法人であると教えてもらった。

伴氏は、日中国交回復を実現した田中角栄首相が謝罪文をめぐる周恩来首相ら中国首脳と険悪な状態になった際に、中国公使として「重要な役割」を演じた情熱の人である。同氏は外務省を退職した後

にモラロジー研究所の講座を受講され、本学の背景にあるモラロジーを学ばれて、本学の開発教育研究会や講演会にも足を運んでくれた人である。

ここに見るように、本学の創立者たちは真摯に「建学の理念」の実現に具体的に取り組んできたのであり、麗澤海外開発協会は今でも活動を続けている。

そこで思い出すのは、千太郎先生が最晩年になぜ外国語学部にわざわざ「日本語学科」を開設したかということである。日本語学科設置の主眼は、周知のように、外国人に日本語を教え日本文化を伝えて、もって世界平和と人類の生存・発達・幸福の実現に貢献する人材を育成するためであろう。千太郎先生がブータンまで行かれたのは、日本語学科開設を記念してのようだが、同時に昭和天皇の崩御に対してブータン国王が長く喪に服されたことに感激されたためでもあろう。密かにブータン国王に謁見を希望しておられたようだ。

そのブータン第四代国王が一年後の平成の天皇・皇后即位式に民族衣装を着用してわざわざ列席され



TBS「世界ふしぎ発見」（毎週土曜夜9時より放送中）

た。その背景には何があるのか。これは長い間の疑問であったが、それにはコロンボ計画農業専門家としてJICA（独立行政法人国際協力機構）からブータンに派遣された西岡京治^{けいじ}氏の二十八年間にわたる農業・産業開発に献身されたことが関係しており、同氏を派遣した日本国王に深甚の謝意を捧げるためであったようだ。随行者に貴族名のダシヨー西岡の名がある。

この西岡氏はその後間もなくブータンの地で一九九二年に享年五十九歳で逝去した。その葬儀は国葬で行われ、僧侶はじめ八千名の国民が参列して行われたようだ。この国には西岡氏を記念した立派な白亜のチョンテル（仏塔）が建立されている。国民はそのチョンテルを見るたびに「神が人の姿をして、この国にやってきたのだ」と言っているようだ。

このようなすばらしい日本人がいたことを知ったのは、平成十六年九月四日に放送されたTBSの人氣番組「世界ふしぎ発見―神と呼ばれた日本人」によってである。この番組で美しいブータンの山岳地

帯や農村の風景、市場、ヒマラヤの貴重な花々を見たが、西岡氏が里子夫人と開発援助の合間に写した『ブータンの花』（一九八四年）には、国花のオリドウラ・メコノプシスも掲載されている。この花はヒマラヤの高山にひっそりと咲いており、人に見られることは少ない。この花の写真を見ると、千太郎先生の座右の銘であった「大きく、高く、清らかに」という言葉が心中深く沁みこんでくる。

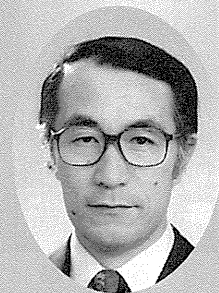
いま、廣池千太郎記念の留学資金で毎年ブータンからやってくる留学生に、新しい眼が開けるのである。彼らは梵天の国からやってきた大切な使節だからである。



大学生時代の四季

学生部長・外国語学部教授

井出 元 い で はじめ



一 古人の知恵

『学園の四季』という写真集が出版されている。廣池学園の自然環境を中心に四季の循環を見事に捉えている。私はこの写真集が好きである。四季の移り変わりが万物の限らない成長の過程を象徴しているように思えるからである。

古人は春・夏・秋・冬に、それぞれ青・朱・白・玄という色を配した。「青春」、「朱夏」、「白秋」、「玄冬」という熟語は実に当を得ている。

青春の「青」とは若葉が勢いよく伸びつつある時の爽やかさを示す色である。未熟ながらも輝きとか、

希望とかに溢れている過程を示している。

朱夏の「朱」とは、芯の赤い樹木を縦に割った状態を示す文字であり、燃えたぎるようなエネルギーを示す色である。力に満ち、自分の殻を破ろうとする過程である。

白秋の「白」とは、青、朱と拡大成長してきたものが、静かに収斂され、洗練された色を表している。拡大してきたものに深まりを増す過程である。

玄冬の「玄」とは、何度も染め重ねられた奥深さを表す色であり、いわゆる「黒」ではない。それは、やがて来る春のために、大きなエネルギーを内に秘

めた無限の広がり、さらなる深まりを増していく過程である。

そして、古人は人の一生を四季になぞらえることにより、人生に節目ふしめをもうけ、年齢に相応した生き方を示唆したのである。この古人の知恵を大学生時代に当てはめてみると、各学年の課題が見えてくるように思われる。

二 学生との語り

研究室で少人数の学生と長時間語り合う時がある。この時、彼らは異口同音に不確定な将来への不安と現状への焦燥しやうそうを語る。ある四年生が、「最近一年生の時に比べて元気がなくなってきたようだ」といい、また別の学生が「夢や希望といったものが以前に比べて小さくなってきたように思う」と述懐する。

そこで、私は「健全な悩みであると思う。一年生の時の元気が果たして四年生にとって必要なものだろうか。四年生には四年生の元気があるのであって、決して過去と比較するものではない」と言い返す。すると「希望や夢も同じことか」と問い返してくる。

「まったく同じであると思う。夢や希望が小さくなったのではなく、洗練され現実味を帯びてきたのではないだろうか」と応じる。このようなやり取りの中で、「大学生活にはそれぞれ学年相応の課題というものがあるように思う」と話題を展開する。

三 大学生時代の四季

青春 一年生には「青春」という言葉がびつたりする。彼らの眼前には高等学校時代に温めてきた学への期待や夢を実現する場が広がっている。

私は一年生に対して「麗澤大学に何をしに来ましたか」と問うことにしている。唐突とうとつな質問に対して学生は怪訝けげんな顔をしつつ、たてまえの名答で応じてくる。そこで上級生に同じ質問をする。すると一年生とはまったく別の答が返ってくる。「人生の大切な時期を大学生という立場で過ごすためである」と。さらに「では大学生としての立場とは何か」と問うと、「与えられた自由な時間を使って自分の可能性を真剣に考えることだ」と即答する。私の問いに正解があるわけではない。ぜひ一度考えてみてほしい問

7
題を示したに過ぎない。そして「大学生に与えられた自由」とは何かと話題を展開していく。

大学のイメージは何かと問うと、多くの学生が「自由」という意味の言葉を吐く。その感覚は正しいと思う。履修制度や授業の形態、また課外の活動や休日の過ごし方、すべてが初めての体験であり、そこで「自由」を味わうはずである。登校時間が自由、服装が自由、休みが多いなど、高校時代に比べて格段に拡大していく自由時間とそれに伴う行動の範囲。確かに大学時代は自由である。

しかし、登校時間が自由とは授業に遅刻してもよいということではない。履修した科目によって、登校時間が曜日ごとに異なるということである。そこで生活全般にわたる自己管理能力が問われるのである。また服装が自由といっても、着やすければ何でもよいということではない。むしろそこに常人の常識やファッションセンスが問われることはいうまでもない。さらに休みが多いのは確かである。長期の休暇や土日の休み、休校の日数を加えると、一年間

の半分近くは「休み時間」であり「自由時間」である。そこで休暇や休み時間を有効に使う能力が問われるであろう。

そして、拡大していく自由と行動の範囲が学生たちを未知の世界へと誘っていく。海外での生活や旅行に憧れを抱くのも自然である。しかし、そこには多くの落とし穴がある。十分な計画と下準備が必要であると同時に、さらに高度な自己管理能力が要請されることはいうまでもない。

このように自由な世界が広がれば広がるほど、大学生としての自覚や良識が問われ、責任も、それにつれて大きくなっていく。大学生としての自由の権利を主張するためには、それなりの「義務」を果たさなければならぬのである。

大学の一年生とは、確かに希望に満ちた時代であるが、その背後には不安や焦燥もある。爽やかであるが、落ち着きの無い危なっかしい時代である。また教室や研究室でおとなしく座っているだけで、与えられるのを待っていても大学という場では何も出

てこない。しかし、自分から求めるならば、教授陣は全力を尽くしてその要望に応えようとするであろう。「青春」の時として一年生時代を全うさせるためには、このような大学生活の基本を知ることが大前提となる。そして「大学生の義務」とは何かを、それぞれの立場で静かに考えてほしい。」

朱夏 二年生には「朱夏」という言葉がびったりしている。勉強の方法も大学生活の要領も分りかけ、語学ならば基礎的な段階を終え、人によっては留学の体験をする。そして後輩もでき、麗澤大学の学生としての自覚が芽生える時代である。

そのためには与えられた境遇や環境への順応ということが大切となる。入学当初ならばいたしかたないが、二年生にもなつて、いまだに本学へ入ったことに不満を抱いている学生がいる。麗澤大学に入学したということが、たとえ第一志望でなかったとしても、また現在所属している学科が第二志望であったとしても、いま置かれている境遇に順応していくことが重要である。転校、転科という方法もあるの

だが、その決断もせずに、漠然とした不満を抱きつつ学生生活を送るのはどうもいただけない。

また、この時代は先輩・後輩という関係が重要な意味をもってくる。一年生の時は同級生との繋がりによって自分の世界を広げてきた。そして、次の段階としてそれに厚みや深まりを加える時代である。後輩とかかわることによって麗澤大学生としての自覚に目覚め、さらに先輩によって引き立てられて存分に枝を張り、多くの花を咲かせる過程である。

私は二年生以上の学生に対しては「尊敬する先輩はいますか」と問う。「います」とはつきり言える学生に会うと、「ホッ」と心嬉しくなる。その先輩がどうあれ、身近に敬慕できる人がいるということが重要なのである。「師弟同学」という言葉はこのような先輩と後輩のかかわりをも意味している。

白秋 三年生には「白秋」という言葉が当てはまる。「青春」・「朱夏」と拡大してきたものを収斂させ、卒業後どのように活かしていくかを真剣に考え始める時期である。そのためには目的の設定が先決

なのだが、そう簡単に人生の目的などというものが確定できるはずはない。

「最近、大学に入った目的がはっきりしなくなつた」という学生が多い。あるいは「目的を見失つていようだ」とも言う。それに対して、私は「成長の証^{あかし}ではないか」と応じる。「なぜか」と問うので、次のように応える。「一年生のときの目的はすでに過去のものとなつていゝる。そして二年生の目的もすでに過去のものとなつていゝるはずであらう。しかし三年生の目的はそう簡単に見つかるものではない。なぜならば二年生で拡大した知識や経験が多ければ多いほど、それをひとつの目的に収斂し鮮明にしていくのは困難ではないかと思う」と。すると「収斂し鮮明にするとはどういうことか」と問いただしてくゝる。私は、「美しいものを見たいという漠然とした欲求が、美しいものならば何でもよいというつかみどころのない願望から、あの絵画を見たいとか、あの景色が見たいというように具体化していくようなものといったらどうだろうか。あるいは外国に対する

知識が増えてくると、誰でも自由に海外旅行がしてみたいと考える。その外国へ旅行したいという漠然とした夢が、どの国のどの都市へ行きたい、さらにどのルートを通つて行きたいというように具体化することといった方が分りやすいかもしれない」と応じる。そして、「漠然としたものでもよいから、将来のビジョンを脳裏に描いてはどうだろうか。そうすると、そのビジョンを実現するためには、今の自分に何が欠けているかを知ることができらるであらう。その不足を補つていくことが、今までに培つてきた体験や知識を収斂し、目的意識を鮮明にさせるための核となつていくように思う」と付け加える。

このような意味において、三年生の一年間をどのように過ごすかが大学時代を決定するといつても過言ではないのである。

玄冬 四年生には「玄冬」という言葉を当てはめてみたい。「玄」とは洗練されて後に到達する、言い知れない奥深い色である。それは静けさを醸^かしつゝ、煮えたぎるような燃えるものを秘めている。最高学

年としての風格といってもよいであろう。しかし、その風格を身につけるのには、さらに多くの時間が必要となる。

四年生になると週に一、二日の登校日となる。一年間の大半は自由時間となるのである。そこで何をするかを真剣に考えてほしい。その膨大な時間を就職活動にあてるのもよい、また何かやり残したものがあつたらばとりかえせばよいであろう。次にこのような長い自由時間を与えられるのは定年後かあるいは老後である。ただ漫然と時の過ぎていくのを待つのではあまりにももったいない。

四年生になると誰もが具体的に就職を考え、職場が決定していく。そこで大切なことは「働く」意欲の高さである。つまり内に秘めた情熱のレベルが問題なのである。「玄」という漢字の意味するところである。そのエネルギーが社会人としての第一歩に繋がっていくことはいくまでもない。

そのためにもう一つ大切な過程がある。それは古人が「有終」という二文字で表した知恵である。し

っかりと終止符を打てというのである。卒業して間もないOBと話をしていると「学生時代は自由だった」とつぶやく。彼はいまだに学生時代の余韻に浸っているのかと少々不安になり、「まだそんなレベルの自由に浸っていたのか」と一喝する。社会人としてやっていくためには、いつまでも学生時代を引きずってはならない。四年生は、そのために終止符をしつかりと打つ準備もしなければならないのである。

四 まとめ

四季の変化をあえて大学生時代に当てはめると、各学年の課題が見えてくるのではないだろうか。人によっては「朱夏」に二年かける人もあるし、もう一年多く「白秋」の時代を過ごし、さらに自分を洗練させたいという人もあるであろう。時間と経済的な許しがあるならば、しつかりと「青春」、「朱夏」、「白秋」、「玄冬」の段階を踏んでいただきたい。そして学年相応の課題を見据え、健全に悩んで欲しいと思う。

企業の社会的責任と

麗澤大学に期待されること

国際経済学部教授 高 巖



「企業の社会的責任」(CSR)という言葉が頻繁

に聞かれるようになっていくが、これは何も特別なことを企業に求めるものではない。本来、果たすべき責任を果たしてもらおう、ということに過ぎない。たとえば、産地を偽り農産物を販売するとか、欠陥を隠し商品を販売するとか、本来、真つ当な事業者であれば、決してやってはならないことだ。こうした悪質な行為が横行していたためであろう。今、社会や市場は「信頼に足る事業者になること」を企業に強く求め始めたわけである。

真面目に働くこと

日本人にとって「労働」は特別な意味を持っているように思われる。仕事に真面目に取り組むこと。どんなに些細なことでも取り組む姿勢次第で、その些細なことも自らを磨く大切な手段になり得ること。こんな考え方を日本人は、心のどこかに持っている。たとえば自分はそうした行動がとれないとしても、仕事に真剣に取り組む人を心の何処かで尊敬しているものだ。

一つ面白い調査結果がある。それは、親が子供に見せたい番組として一番にあげられるのが、NHK

の「プロジェクトX」ということである。なぜプロジェクトXなのか。プロジェクトXの結末は、水戸黄門のように誰にでも分かっている。にもかかわらず、多くの大人がプロジェクトXを推薦するのはなぜか。答えは明白だろう。自分の子供にも、やはり、物事に真剣かつ真面目に取り組み、事を成就してもらいたい、と多くの親が子供に期待しているのだ。しかも、それは誰もが注目するような偉業でなくてよい。それぞれの立場にあつて、自らに与えられた事を確実にこなし、間違いない仕事を成し遂げること。これが私たち日本人の労働観に一貫して見られる傾向ではなからうか。

麗澤大学は、建学以来、こうした考え方を基礎に置いて教育を行ってきた。道徳とか倫理と言われると、今の学生たちは、何か古くさいものを感じるかもしれないが、実は「道徳」とか「倫理」といったテーマが、今、ビジネスの分野でもっともホットな話題となっているのである。確かに、あまりに色々などころでこのテーマが取り上げられるため、CS

Rパブルではないかとさえ言われる。しかし、これははじけて消えてしまうような、単なる流行ではない。

理由は簡単だ。それは「所有には必ず責任が伴う」という昔ながらの考え方に帰着するからである。その説明を、最近出版した著書『CSR—企業価値をどう高めるか』（日本経済新聞社）の中で展開したが、ここでもその説明を紹介しておこう。

所有と責任の関係

企業という法人を所有する「株主」は、企業を取り巻く様々な利害関係者に対し責任を負うのである。具体例で考えてみたい。

今、複数の者が共同出資し「虎」を飼うとしよう。この飼い主たちは「虎が人によくなついており、しかも檻に入れて飼うので、また管理人もいるので、他人に危害を及ぼすことはない」と楽観視していた。一方、近隣住民は彼らが虎を飼おうとしている事実を知らなかったため、これに対し特に苦情を申し立

てることもなかった。しかし、虎を飼い始めてから数ヶ月経過した頃、近隣住民は虎が飼われている事実を知った。住民は生活に不安を感じたが、飼い主に對し虎の処分を求めることまではしなかった。数ヶ月経過したある日、不幸なことに、虎は檻から脱走し、近隣住民数人をかみ殺した。

これと類似した例をもう一つあげておこう。今、複数の者が共同出資し、ある化学会社を操業する。彼らは「同社の製造する商品が今後大量に売れる」と考えていた。これと併せ「同社が扱う化学物質は従業員によって合理的に管理されるため、環境汚染などのリスクも極めて低い」と楽観視していた。一方、近隣住民は同社がかなり危険な化学物質を使用することを知らなかったため、会社に対し苦情を申し立てることもなかった。しかし、操業から数ヶ月経過した頃、近隣住民は危険な化学物質が処理されている事実を知った。住民は生活に不安を感じたが、まさか事故が発生するとは思ってもいなかったため、操業停止などは求めなかった。数ヶ月経過したある

日、同社の工場で爆発事故が発生し、この時、近くを往来していた住民数名が事故に巻き込まれ犠牲者となった。

いずれのケースでも、犠牲者が出たわけだから、所有者は相当の責任を負わなければならない。ただし、制度論的に言えば、化学会社に出資した所有者たちは、自分たちの出資した金額分を上限として責任（有限責任）を負うだけで、それ以外の責任は負わない。問題は、これと同様の考え方を虎の所有者たちも主張できるか、ということである。すなわち「自分たちは、虎に出資した金額分を上限として責任を負うだけで、それ以外の責任は負わない」と主張できるか、ということである。言うまでもなく、所有していた虎が他人（第三者）を傷つければ、その所有者たちが虎の行動に関して全責任を負うことになる。

「企業の社会的責任は株主利益の最大化」か？

虎と企業のケースは非常によく似ているが、なぜ

両所有者の間で、責任に関しこれだけの大きな違いが出てくるのであろうか。根本的な理由は、虎には権利義務能力はないが、企業という法人にはそれがあると仮定されているからである。

よって、その能力の存在を社会が認めるとすれば、実は、企業は自然人に求められるものと同じような責任を求められることになる。虎の所有者たちには、犠牲者やその遺族に対する法的責任は言うまでもなく、虎を嚴重に管理する責任、嚴重に管理していることを近隣の住民に伝える説明責任、近隣への影響が大きいと思われる場合には、虎を飼う前に近隣住民の同意を得る責任などが求められるはずだ。またどのように嚴重に管理していても、住民の不安をすべて解消することはできない。不安を解消してもらうには、その飼い主自身が信頼に足る人物と、同地域で認められなければならない。そうした社会的責任を果たして初めて、地域に認められる「虎の所有者」となり得るのである。

企業の所有者たちは「自然人」に求められるよう

した法的・社会的責任を、すべて「法人」に転嫁してしまったわけだから、企業は必然的にこれらの責任を負わなければならないのである。化学会社の例で言えば、犠牲者やその遺族に対する補償責任、事業活動そのものを嚴格に管理する責任、合理的に管理していることを関係者に説明する責任、地域社会などへの影響が大きいと思われる活動に関しては、事前に地域の合意を得る責任、そして地域にとけ込み、地域にとつて無くてはならない存在となること、これらが社会的責任として求められるのである。

にもかかわらず、「株主の所有権は侵してはならない」という観点から、もし「企業に対する責任は株主利益の最大化であって、その他の人々に対する社会的責任など存在しない」と主張すれば、もっとも、明白な責任の空洞化が起こってしまう。本来の所有者は責任を法人に転嫁し、法人は所有者に対する責任だけを強調する。もし「法人が負うべき責任は株主利益の最大化」であるとの立場が社会的に支持されるとすれば、議論を元に戻し、株主に与えられた

有限責任というセーフガードを外さなければならなくなる。まさにそのゆえあって、社会および多くのステークホルダーに対する社会的責任が、企業に求められるのである。

社会の制度をどう造っていくか

C S Rが求められる必然性を整理したが、ただ現実の問題は「そんなことをやっていて、本当に事業者は報われるのか」ということだろう。たとえば、産地を偽らずに商品を仕入れ、適正な価格で売ろうとする事業者と、産地を偽り本物よりも少し安めに販売する事業者を比較した場合、後者の方が利益をあげているかもしれない。このため、われわれ研究者は、一方で事業者に誠実であることを求めながらも、他方で誠実な事業者がより明確な形で報われる「社会制度」を構想・提唱していかなければならない。そうした社会設計に関しここで言及しておきたいのが、社会責任投資（S R I）と「消費者支援のため基金」（消費者支援基金）である。

S R Iとは、社会的責任を果たす企業に優先的に投資し、市場の力を使って事業者の誠実さを市場競争力に変えようとするものだ。麗澤大学企業倫理研究センターは、こうした投資運動を促すため、二〇〇一年に、投資対象を絞り込むための基準を公表している。現在、この基準をベースにした投資信託が大和証券より販売されているが、今後、こうした金融商品がより多くの投資家の支持を得られるようになれば、事業者を取り巻く環境も大きく変わっていくことになるだろう。

消費者支援基金とは、今後、制度化されるであろう「団体訴権制度」を財政面から支援するファンドである。ここに言う団体訴権制度とは、消費者団体に訴訟提起の権利を与えるもので、具体的には、ある地域で消費者被害が発生すれば、それが全国に広まらないよう、消費者団体を介して問題事業者には正を求める制度である。こうした制度の必要性が謳われる背景には、年々増加し続ける消費者被害の実態がある。

訴権制度の詳細は、現在、内閣府の国民生活審議会で議論されているが、クリアしなければならぬ多くのハードルがあるため、団体訴権制度の導入までには後数年を要する。そのハードルの中でも特に難しい問題は、団体訴権の行使に必要な資金を、それぞれの消費者団体がいかに確保するかという点だ。消費者団体に与えられる訴権は差止請求だけで損害賠償請求を含まない。このため、差止請求だけを起こせば起こすほど、その団体は、訴訟費用と弁護士費用を負担しなければならず、財政的に細っていく。

そこで、団体訴権に要する費用を負担する「消費者支援基金」の創設が必要となってくるわけだ。同基金の創設は企業倫理研究センターが呼びかけ、二〇〇四年十一月二十六日、正式に創設された。日本ハム株式会社が一千万円の寄付を決定したことがきっかけとなった。さらに喜ばしいことに、麗澤大学も基金創設の社会的意義に賛同し、五百万円の寄付を表明した。本学で働く者として、これほど自分の

大学を誇りに感じたことはない。建学の精神に立ち返り、理念を現実すべく行動を起こしてくれたことに心から謝意を表したい。

本学の創立者、廣池千九郎は、経済は経済だけでは成り立たない、道徳があって初めて成り立つとの考えを説き続けた。その理念が社会よりあらためて注目されていることを強く感ずる毎日である。





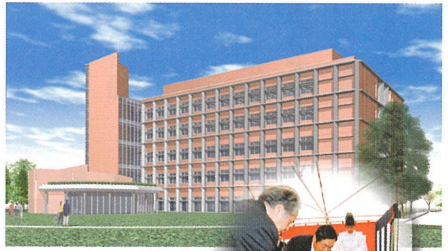
パラリンピックアテネ大会 車いすダブルスで金メダルの国枝慎吾君(左)と齋田悟司さん(2004・9)



盛況の留学フェア(2004・11・18)



手賀沼エコマラソンで優勝した伊藤文浩君(2004・10・31)



「麗澤大学生涯教育プラザ」の完成予想図

プラザの起工式で鋤入れする
廣池幹堂理事長(右)と梅田博之学長(2004・12・7)



麗陵祭で展示物を見学する梅田博之学長(2004・10・31)



冬の夜空に映えたツリー(2004・12～)

〈特集〉 麗澤大学の教養教育 〈豊かな感性、広がる世界〉

今号の特集は「麗澤大学の教養教育」である。教養教育は、専門教育と並び大学教育の根幹であることは言うまでもない。専門がメシの種だとしたら、教養は人生の糧といえる。様々な問題が輻輳する現代社会と向き合う上で、教養教育が果たすべき役割は大きい。

一方、教養教育という言葉からは、権威主義的で前時代的な押しつけがましさも想起させられる。それは、自称「教養人」たちが発するある種の胡散臭さや、「教養がない」という表現の裏に潜む救いようがない侮蔑の感覚にも通じる。当編集委員会では、テーマを決めるにあたり、この言葉の問題を端緒に、大学教育のあり方や国の行く末、そして国際化と多文化理解といった広範な視点から、かなり長い時間論議を重ねた。

委員会のもう一つの仕事である執筆候補者リストはすぐに埋まった。書いていただきたいと思う先生方の数は、紙幅（予算）の制限をはるかに超えていたのである。本学が「知の宝庫」であることは誇張ではない。

この特集を通じて再認識していただけたら幸いである。教養教育が持つ間口の広さと深遠さに比べ、当世の学生気質は、表層的で短絡的に思える。たとえば、授業に何を期待するかを尋ねると、大半の学生は「おもしろい授業」と答える。ただ、その「おもしろさ」とは、「へえー」といえるエピソードのことで、しかもその場限りのものである。基礎的な事項や、論理展開が試される場面にさしかかると、とたんに興味を失いがちになり、深く考えることができない。学生諸君には、精緻な論理展開やリベラルな議論を通じて、知的な愉しみを見出してもらいたい。

その意味で本特集は、ご執筆いただいた先生方および編集委員会からの挑戦状でもある。学問は、難しいけどおもしろい、もとい、難しいからこそおもしろいのである。さあ、大いに考え、かつ議論を戦わせようではないか。

（編集委員 土井 正）

麗澤大学における情報基礎教育と学生の動向

国際経済学部助教授 牧野 晋



周知のとおり、本学では情報教育にも力を注いでいる。国際経済学部では、一九九二年の学部開設当初より情報リテラシー科目を必修化した。その後、外国語学部とも協力して両学部間でのシラバス調整と統合を進め、現在では、両学部でほぼ統一した内容の「コンピュータ・リテラシー」が、新入生全員に必修化されている。

コンピュータ・リテラシーは、「コンピュータの基本操作（含タッチタイプ能力の完全習得）」、「文書処理（Word）」と「データ処理（Excel）」、「インターネットの活用と電子的コミュニケーション」などを柱に、情報リ

テラシー一般の習得を目的とする。同時に、「学内に設置された共同利用情報資源を使用するにあたっての利便用マナーを徹底させる」ことが授業目的の一つとなっている。コンピュータがネットワーク環境で用いられることが大半である昨今、例えば、アカウントの取り扱いなどに関した教育は、情報セキュリティにも関連する重要な項目ととらえている。後者は、職能としての情報倫理教育や、情報教育において、マナー、セキュリティまで含めて正しく指導できる人材を育成することを目的とした本学の情報倫理教育とも関連している。

一九九二年当時は、大学がインターネットに接続すること自体が先進的で、「学生全員に電子メールアドレスを配布している」ということが話題になった時期でもある。情報基礎教育についても必修化されている大学は少なく、開講していても選択科目であったり、昔ながらのプログラミング教育をもって情報基礎教育としていたりするところも多かった。大学におけるコンピュータ・リテラシーなどの一般情報教育のあり方については多くの議論がなされてきたが、その中には、

※脚注 例えは、情報処理教育研究会（主催：文部科学省）など



授業風景

「大学でコンピュータの操作を教えるのか」、「リテラシー教育などは大学の教育にふさわしくない」といった批判もあった。しかし、本学では、当初からコンピュータ・リテラシーを「ネットワークと融合した情報社会に向けて、大学生として必要不可欠な素養を身につ

ける場」と考えていた。その答えが、「リテラシー教育をばかにしない」という体制であり、一定の成果を上げてきたと考えている。

近年、初等中等教育場面での情報化推進により、情報基盤整備が進んでいる。二〇〇三年からは高等学校で教科「情報」が必修化され、情報に関する学校教育が本格的に開始された。今後、入学前の学生が持つ基礎知識・技能は大きく変わってくることが予想される。このような状況の中、大学における情報基礎科目のシラバスをどう構成し、教育方法をどう変えていくかは、考え続けていかねばならない課題である。情報科目の担当教員はなかなか楽をさせてもらえない。

コンピュータ・リテラシーをはじめとした情報基礎教育を行うにあたり、学生の持つ情報環境や入学前のスキルなどについて把握しておくことが重要である。筆者らは、リテラシー科目受講前（国際経済学部新入生オリエンテーション時）に、学生のPC所有率やインターネット利用状況等のコンピュータ利用環境、コンピュータ利用経験、文字入力（タッチタイプ）能力

に関する自己評価などについてのアンケート調査を複数年に渡って実施している。ここでは、二〇〇二年と二〇〇四年のデータについて簡単に紹介したい。

学生の持つ情報環境のうち、まずPC所有率についてまとめたものが図1である。新入生のPC所有率は年を追って確実に増加している。「所有していない」と回答したものは二三%から一三%に減少し、何らかの形で自宅にPCがある者は、全体の八七%に達している。個人用のPCを所有する者も一五%から二二%に増加した。学生が使えるPCが一台以上ある者は、全体の八六%となり、学生の九割近くは自宅でもPCを利用できる環境にあることがわかる。

次に、ネットワークの利用に関する四つの設問に対する回答をまとめたものが図2である。これについても学外での利用環境が向上しており、利用率も上がっていることが認められた。学生の約六五%はプロバイダーへ加入しており、自宅インターネットへの接続環境を持つ。学外のメールアドレス所有については伸びが著しく、八割以上の学生が外部アドレスを持って

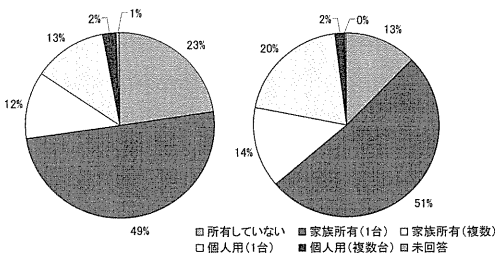


図1 新入生のPC所有率

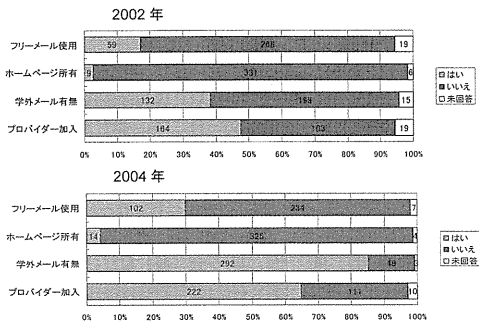


図2 新入生のインターネット利用環境

いる。フリーメールを使用する者もほぼ倍増したが、伸びの主要因は携帯電話のアドレスであろう。しかし、自分のWebページを持つ者はそれほど増えておらず、利用形態自体はあまり変化していないようだ。利用形態の現状は、「電子メールは使う」、「インターネットの利用はWeb参照が中心」、「ただし自分で情報発信するところまでは至らない」といったところであろうか。

ここで気になる回答結果がある。「日常的にWWWを利用している」という問いに対して、「分からない」という回答をした者が、現在でも二割程度存在することである（二〇〇二年・二〇％、二〇〇四年・一七％）。プロバイダー加入率から見て、もう少しWebの利用はあると思われるので、「利用はしていてもWWWという用語を知らない」という学生はむしろ増えている可能性がある。すなわち、利用はするが、それは単に「使う」という範囲であり、基本用語や動作の仕組みまで含めたコンピュータに関する基礎知識までは習得していないということである。利用方法に関する知識に比較して、情報科学に必要な体系的な知識が不足しているといった状況は他大学の報告にも見られるので、全体的な傾向のようだ。

多くのコンピュータユーザに、自分がやりたいこと（ハウツー）以外ではできるだけ覚えたくないという姿勢を見ることがある。大学生はこれでは困る。大学生として持つべき教養知識を身に付けてもらうためにも、これらの点は、コンピュータ・リテラシーを含めた情

報基礎科目の授業内で適切に補ってやる必要がある。

コンピュータを理解するには、まず専門用語を覚える（というか慣れる）ことが重要だ。聞いたこともないカタカナ語や独特の表現が出てくることが多い。説明を受ける際に用語の意味がわからないために、操作方法までわからなくなるといった場合もよくある。逆に言うと、それらの用語・用法を覚えることで、一歩先に進めることになる。

学生の利用環境の向上と共に、コンピュータの利用経験に関する調査結果にも変化があった。二〇〇二年の調査では、半数以上の学生がせいぜい「授業で利用した程度」までであり、「日常的に利用する」と回答した者はわずかに五％であった。それに対し、二〇〇四年には「日常的に使用する」と回答した者が二〇％まで増加している。また、「自分一人でPCをどの程度利用可能か」という問に対して、二〇〇二年には約四〇％の学生が自力では「使えない」または「ほとんど使えない」と回答していた。それらの学生は二五％にまで減少した。「使いこなせる」という自己評価をする

学生も一%から六%に増加している。

以上のように、学生の持つ情報環境は向上し、同時に利用経験も増えている。しかし、「利用したことがない」とする学生が依然として四%程度おり、この比率は両年度で変化がない。「ほとんど利用しない」ユーザーまで含めた利用経験の浅い者の比率は、経験者の増加に比較してそれほど減っていない。すなわち、入学前に使える者・使えない者の差異が広がっている。高等学校で教科「情報」が必修化されたとはいえ、現状での初等中等教育現場における情報教育への取り組みには、大きな学校間格差がある。留学生では、その格差はより大きい。特に、情報倫理や利用マナーの面に関しては、体系的な知識不足の利用者が増えていることから、教育場面での指導が一層重要になる。

ところで、コンピュータ・リテラシーの授業では、タッチタイプ能力の習得を、コンピュータ活用にあたっての重要な基礎技能ととらえている。タッチタイプについては、練習用教材の購入を義務づけ、ローマ字入力で「二八〜三〇WPM (word per minute) 程度以上

の入力速度、九〇%程度以上の正解率」がないと単位の取得ができない。学生の中には、このタッチタイプ練習をきっかけにコンピュータへの興味が高まると共に抵抗感がなくなり、利用意欲や学習意欲が向上するというケースも多い。

アンケートでは、タッチタイプ能力についての自己評価についても調査した。二〇〇二年と比較して、「キーボードを見なくても打てる」とした者が九%から一七%に増え、「できない」と評価した者は、九%から五%へと低下した。利用率の増加に伴い、タッチタイプ習得率もある程度上がっているとも考えられる。しかし、「習得済み」の評価をする者の割合はむしろ低下しており、「キーボードを見ながらなら可能」とする者は六一%と、両年で同じ割合で存在した。実は、「キーボードを見ながら」という自己評価は全くあてにならない。前述した評価基準には達しない。従って、授業内で学習機会を与え、評価を正しく行うことが必要である。ところが、これまでコンピュータは利用してきたがタッチタイプについて正式の教育を受けることがな

かったとか、家庭等において我流で利用してきたといった学生への教育がむしろ難しい。彼らは、目標達成までの興味を持続できず、タッチタイプライター練習用教材をプログラムに沿って継続的に練習することができない。一度ついてしまった癖をソフトの動作に合わせて矯正する段階であきらめてしまう者もいる。タッチタイプライターは、情報機器を「思考のツール」として使いこなす上で非常に重要な基本技能である。一度身に付けてしまえば、一生忘れることはない。是非、頑張ってもらいたい。

正直なところ、コンピュータ・リテラシーは、数年前に比べて教育しにくくなっている。前述したが、一般的にコンピュータに関連した知識習得に関する意欲は低下する傾向にある。例えば、アンケートの中で「自分でWebページを作ってみたいとは思わない」という問いに対する回答は、二五%から三五%に増加した。日常生活の中にコンピュータがあり、それを使うことはするが、それ以上の興味がない学生が増えている印象を持つ。ある程度使えるがゆえに、コンピュー

タに対して新たな興味がわかないのかもしれない。しかし、使えると思っている者も初心に返って授業に臨んでほしい。新しい発見が必ずあると思う。

大学における教養教育として情報基礎教育は依然として重要である。現状ではまだ、操作方法を含めた内容も扱う必要があるようだ。ただ、今回紹介したように、わずか二年間でも状況が大きく変化するのが情報基礎教育の分野である。コンピュータ・リテラシーの教育内容や教授方法は、学生の動向と合わせて柔軟に変えていく必要がある。この問題を考える上で、入学前の学生がどのような環境におり、どのような教育を受けてきたのかを知ることが重要になる。

本学のある千葉県柏地域では、NPO柏インターネットユニオンが主催する教育研究フォーラムにおいて「情報教育と学校種間連携」と題するパネルディスカッションを実施し、小中高等学校の教員を含めてこの問題を議論した。大学における情報教育を考える場合、初等中等教育現場を含めた密接な連携が、今後より重要になろう。

教養としての歴史

外国語学部教授 櫻井良樹



教養科目としては外国語学部の教養ゼミナールと両学部共通の日本史を担当している。本学に史学科はないので、これは教養科目としての歴史である。本学に入ってくる学生に限ることではないが、学生たちはたいてい高校時代に受験科目として世界史か日本史を選択し、歴史の勉強の経験を有している。もともと外国語学部のような英語・国語の二科目型入試で入学してくる場合は、歴史の勉強は中学以来ということもある。

いずれにしても大学に進んでくる学生たちのほとんどは、歴史という「学問」を学んだことがあり、またあったように思いこんでいる（これは留学生も同様で

ある）。ある学生がこういう感想を書いてきたことがある。「大学の日本史は、これまで以上に多くのことを暗記させられるものだと思っていた」と言うのである。つまり彼らにとつて、これまでの歴史の勉強とは、何百、場合によっては数千の事柄や人名・年号を覚えることであつたのである。

教養としての歴史は、まずそういった歴史に対する見方を覆すことから始まる。歴史を専攻にする人を対象にするわけではないから、日本史の授業では、実例は多く出すものの、話題はなるべく大きい歴史の流れにつながっていくようなものを取り上げているつも

りである。歴史の有する性格について三分の一くらいの時間を当てる。いわゆる歴史哲学である。

日本史と言っても、話は日本に限ることはなく、多くは東アジア（いわゆる東洋史）、たまには西洋史に越境する。そもそも日本史・東洋史・西洋史という枠組みで歴史を語る必然性はない。学生たちは、高校での教科の枠組そのまま、歴史は世界史と日本史によって構成されていると思いついでいる。世界史と日本史は、極端に言えば別のものであり、日本史は日本列島内だけで進むものだと捉えている。そのような枠を取り払うことが課題となる。ちなみに歴史は「進むものだ」と書いたが、そう思うようになったのも近代である。

歴史は、古典古代のギリシアや司馬遷の時代から存在していた。歴史を残す行為は、ある場合は国家が王朝の正当化のために、ある場合は個人が自分の過去を意義づけ確認するために行われる。そこには歴史を語るうとする人のさまざまな思いや見方が反映している。

歴史家は、その書き継ぐという行為が、どうしてなされるか、その内面的な理由を説明することによって、

客観的な過去の事実を確定することをめざす。しかしいつまでたっても完全なものにはなり得ない。それは歴史家も、ある特定の時代を生きる、一人の人間にすぎないからである。したがってその人の個性を反映して、新たな解釈が出てくる可能性があり、また解釈およびその解釈が広く受け入れられか否かは、そもそもある時代の常識を反映している。だから今常識だと思われていることが、明日も通じるとは限らない。歴史は多面的であり、歴史書が繰り返し書き直されるものである理由である。

日本史の講義は、古代から近代までをとりあげる。しかし古代の話でも、それを論争史として近代社会の展開と絡み合わせて紹介すれば近代史となる。きまってきた日本史や日本観を崩そうとする試みもしている。最初から日本という枠を疑わず紋切り型の日本論を期待していた人にとっては思ってもみなかった授業となろう。柔らかな思考力を養うことを歴史を題材にやっているのであって、歴史が嫌いという学生も多いが、講義を通じて、それは暗記するのが苦手だった

に過ぎないことがわかれば、それでいいのである。

教養ゼミの狙いは同じだが、特に鎖国の見直しと教科書記述の違いに焦点を絞り、報告形式によって授業を進めるという点で異なっている。以下、私の授業を聞いた学生の感想的な文章を掲げておく。

「不潔な学問」のすすめ

日本語学科三年 堀内健司

日本語のかきあらわしかた（表記法または表記方）やことばづくり（造語）をかんがえるために日本語学科へはいったものの、やるきがカラまわりしたりわだかまることがおこった。二年生の後期がはじまってまもなく、言語学者である田中克彦の『名前と人間』をよむ。そのまえがきがすこぶるおもしろい。

「日常生活から切りはなされた知識を身につけるには、労働から解放され、ばく大な時間をそれに注がねばならず、そのためには特権的な生活を享受できる条件をもたねばならない。特権的な知識をため込んで、その知識をひけらかすのを得意とする人々を私は軽蔑

してきた」。ゆえに少年のころから「固有名詞を連ねた学問をひどく軽蔑してきた」田中さんのなかには、「いつの間にか学問について二種類の区別ができあがっていた。一つは、固有名詞で埋めつくされた、風通しの悪い「不潔な学問」、もう一つは、ものごとのことわりだけを扱う、固有名詞のいらぬ「清潔な学問」、あるいは知識について「潔癖な学問」である」。

田中さんにとって「清潔な学問」とは、数学や生物学・論理学・哲学・言語学である。では、田中さんにとって「不潔な学問」はなにか。

「固有名詞がなければニッチもサッチもいかないうな、極端に言えば固有名詞だけでもとりあえずは何とかやっていけるような学問があつて、それは、人文科学の雄と言ってもいい歴史学である。少し乱暴な言い方をすると、歴史とは人の名前できているということになろう」。

おさないころから歴史がすきで、ガクジュツヨーゴをもてあそぶサーケツなガクモンは性にあっていないとこの学校でかんじていたおれは、このくだりをよみ、

(いまやりたいことをやるう)とあらためておもいたつとともに、高校の「世界史」をおもいだしておかしくなった。

高校二年の一学期の中間試験で世界史の勉強をまったくやらなかったところ、メソポタミアやエジプト・ギリシャ・ローマの人名や地名がしつかりとかけずに赤点すれすれとあいなった。世界史をおしえていたのは担任で、授業は高校三年間でもっともたのしかったのだが、世界史そのものには、だれからみた「世界史」なのかという点に疑問をいだいた。そのうち興味が文学へとうつついていったころ、担任から「歴史は創造的な学問だ」ときかされ、E・H・カーの『歴史とは何か』をすすめられた。ひもといてはみたものの、カナの固有名詞がやまほどのついていたのでよむきがなえた。

歴史がすぎだとあらためておもったきっかけは、櫻井良樹先生の「日本史」の授業である。歴史は、だれが「史実」をどうえらんでどうつなぐかによってつくられるということを、固有名詞があまたでてくる具体

例でまなんだ。また「解釈」とは、哲学や文学・演劇での経験から、原典や原作をよりむずかしくつまらなくするひとりよがりであるとかんがえていたのだが、歴史における「解釈」とは、説得力の問題であるとした。

なぜ歴史がすぎなのかはいまだによくわからない。このさきそのワケをかんがえるかどうかともわからない。しかしどのようなカタチであれ、これからも歴史にたずさわっていくだろう。

「教養ゼミ」を受けて

日本語学科四年 柳英武
歴史教科書問題は中国のニュースで聞いていたし、日本に来てみて、マスコミなども騒いでいて何か起きていることは分かっていたが、詳細はよく分からなかった。それが実際の授業で取り上げられるという話を聞いて、櫻井先生の教養ゼミを取ることにした。ゼミは先生が指定した本を読み、自分で理解しまとめて報告するという形で進めていった。

歴史教科書は日本は検定で中国や韓国は国定である。また、アメリカなどは国定・検定でもなくどうという歴史教科書をつかうのかは学校で決めるといふ。日本は検定なのでどういふ歴史教科書が使われているかいろいろ議論がなされているといふ。国定の教科書しか使ったことがない私にとつてそれは大変なショックであった。また、高校で「日本史」が必修でないといふ話を聞いてそれはよくないと思つた。実際に日本人学生と話してみると歴史知識が欠如して、議論を展開できない時もあったからである。

日本教科書に各国がどのように書かれているかは日本が世界の国々をどのように認識しているかのことであり、各国の歴史教科書に日本がどのように書かれているかは、各国が日本をどのように認識しているかといふことに他ならない。「歴史はある意味で教えられた歴史」なので歴史教科書の叙述内容や叙述方式に関してみんな神経を尖らせているわけだ。

しかし、歴史教科書問題に関して世界で一番問題になっているのは東アジア三国だけではないか。そういう

うふうに考えるとこの東アジア三国は世界では厄介で面白い国ではなからうか。別の角度からみるとああやって騒いでいるのも逆にいいことかもしれない。騒いでいるということはそれなりにコミュニケーションが行われているということだから。

教科書はあくまでも書かれたものであり、それが物事を全部説明してくれるものではないから鵜呑みすることは大間違いである。「教科書に対する迷信」から離れるべきだと思つた。過去の史実は無数であり、教科書は無数の過去の史実から重要だと思われているごく一部のことが書かれただけであり、教科書に書かれた歴史は選択された歴史であるから。

さらに過去の歴史は必ずしも現在をうまく説明してくれるものではない。例えば、中国にいる時、私が一番好きだった日本の芸能人は山口百恵であった（今もそうであるが）。日本に行ったら、山口百恵のような女の子に会うことを期待していたが、それは大きな間違いであった。第一、今の時代は山口百恵の時代と違う時代で今と昔は女の子に求められているものが違う。

第二に、私の山口百恵理解は映画というものを通じてのものであり、映画での日本人像をそのまま現実にあてはめるには無理がある。こういうものはだれも教えてくれないし、実際日本に来てみないと分からないものである。こうなると、やはり日本に来てよかったと思うようになる。

先生は授業で一段落発表が終わると、必ずみんなの感想を聞いていた。私もみんなの考えを知りたくて感想を聞きたかったが、日本人学生がなかなか喋ってくれないのが残念であった。しかし、二学期になり、だんだん喋ってくれるようになり、授業の他にも結構いろんなことについて話し合った。とうとう、「歴史サークル」を作りましょうという話まで持ち込んだ。結局、実現しなかったが、それなりに意義はあった。例えば、中国のことについて聞かれた時、うまく説明できない自分に気がついて、やはり歴史知識が欠如しているのは日本人学生だけではなく自分も同じではないかと恥ずかしく思った。

歴史の正解は場合によっては複数かもしれない。そ

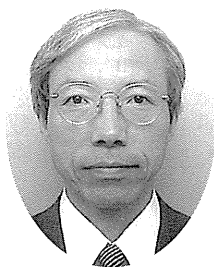
の意味で正解はなしとも言える。大事なのは他の人がどういうふうにか考えるか、つまり他者を理解しようとする努力の姿勢の有無である。他者に対しての理解は重要である。理解できなくても他者を受け入れることはもっと重要であるということが私が櫻井先生の授業を聞いて一番感じたことである。

日本と中国や韓国の付き合い方を考える時、特筆すべきものは何ひとつなく、ただ人間と人間の付き合いであったほうが一番理想的な付き合い方かもしれない。そこに強調されるのは人間としての普遍性あるのみ。それは、現実的に大変難しいことであるが。

私は何のために、日本に来て何を見て、何を聞いて、何をしているか。私にとつての日本は何であるのか。私は、偏見なしでありのままの日本を理解したいと思っているが実際それができているのか自問してみる。教養ゼミは私にいろんなことについて「気づき」を呼びおこしてくれる授業であった。

比較思想——人生を考える——

国際経済学部教授 竹内 啓二



私の比較思想の授業は、両学部の学生がそれぞれクラス約半数を構成している。数年前には、多いときには百五十名ほどの履修者がいたが、最近では、カリキュラムの変更によるためか、三十名から四十名くらいになっている。学年は一年生が半分近くで、その次に多いのは二、三年生で、四年生が少数いる。授業の後半三十分くらいで、学生に感想や意見を言ってもらって、それに応答することで一方向的な授業にならないようにしている。

死の準備教育

私の授業では、生・老・病・死といった人生の苦に直面した人がどのように感じ、どのように考えて、その苦を乗り越えたり、受容したりしていったのかを学ぶ。多くの人がこのような人生の苦に直面し、苦しむ中で、新しい生き方や人生の新たな見方を見出し、いく。とりわけ死に直面した人の生き方、考え方には、深い人生への洞察や命についての味わい深い感じ方などから、多くの気づきや学びが得られる。

私が、このような授業をやってみようと思ったのは、水野治太郎麗澤大学教授の『ケアの人間学』やその他

の著書、論文、講演などに触発されたからである。『ケアの人間学』の中で、「死を豊かに意味づける教育」という章で、水野教授は、死の準備教育のねらいは、「死を見つめることから、生きることの真の意味が顕わになり、人間自身に内在する死として自覚され、その結果として、生への澹刺^{はつら}たる感覚と主体的・実存的態度を招来することにあると考えられる」と述べている。

水野教授は、医師・看護師や介護の専門家、病気体験者、介護体験者、死別体験者が、共に生と死をめぐる諸問題を学び合うことを目的として、「千葉県東葛地区・生と死を考える会」を一九九三年に創設された。私は、創設期からこの会にかかわり、現在、事務局長を務め、会で招聘する講師や会にかかわる皆さんから多くの刺激を受け、生と死について学ばせていただいている。

二〇〇五年十二月二日～四日には、本学のキャンパスにおいて、「生と死を考える会」の全国大会を、モラロジー研究所と千葉県東葛地区・生と死を考える会の共同主催で開催する。そのテーマも、「すべての教育の

基礎にデス・エデュケーションを——生と死の教育の使命」である。全米で大学の死の準備教育のテキストとして使われている*Last Dance: Encountering Death and Dying*の著者であるリン・アン・デスペルダー氏と、家族を喪失した子供と家族を支援するダギー・センターの会長を長く務め、現在同会のナショナル・ディレクターであるドナ・シユールマン氏の講演が行われた。

死をみつめる心

青年は、「いかに生きるか」「人生の意味は何か」といった問題に一度は直面するのではないだろうか。私自身の麗澤大学での学生時代を振り返ってみても、このような問題について、おりに触れて考え、本を読み、また、先生方や先輩の生き方や考え方の中に何らかの答えを見つけ出そうとしたものであった。特に、本学の建学の理念であるモラロジーは、人生について考えるための大きな刺激となった。

私の学生時代は、一九七〇年代の後半であったので、現在のように、書店に生と死に関するコーナーができ

るほど死に関する書籍が多く出版されていなかったが、がんに罹^かつて、十年間の闘病の末に亡くなった宗教学者の岸本英夫氏の『死をみつめる心』を読んで、感銘したことは今も忘れない。

この本は、私の授業でも紹介している。岸本氏は、「一つの目標に向かって自分を打ち込んだ生活」をおくことで、人生を充実させ、死への不安、生命を失うことの恐怖を克服しようとした。そのために自分が、「打ち込んでゆくことに価値があるような目標」は何かを見つけたことが大切だと述べている。しかし、後年には、ただがむしゃらに仕事に打ち込んでいく生き方ではなく、死を「別れのとき」と見て、「静かにしていて、人生を味わってゆく」生き方を指向している。「今が最後かもしれないという心がまえを、始終もって」、大きな別れのときに備えて、毎日、毎時間を大切に生きていくことを勧めている。私が学生時代にこの本を読んだときには、目標に打ち込んでゆく生き方に共感を覚えたものであったが、現在では、静かに人生を味わってゆく生き方に現代人が見失っている重要な視点がある

ように思う。

岸本氏は、死後の世界があるかないかという問題で煩悶することはかえって悲惨であると考え、死後の世界はないのだと覚悟を決めて、生と死の問題に取り組みとうとした。しかし、死を別れのときと考え、この世に別れを告げた自分は、「宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入る」という考え方に至っている。

タゴールの死生観

私の授業では、インドの詩聖、ロビンドロナト・タゴールの死生観も紹介している。タゴールの詩集『ギタンジャリ』の最後の十数編の詩は、「死」をテーマにした作品である。彼は、命あるものは死ぬ定めにあるが、それは新たな無限の世界への旅立ちであると考えられている。すなわち、魂の永遠性を信じている。死において、魂は、「無限なもの」「至高の存在」「絶対者」に出会うと想像している。その至高存在との出会いである死は、人生の完成でもあり、収穫期でもある。人がその人生において蓄積してきたもの、収穫物を至高

存在に捧げるときなのである。われわれをこの世に生まれさせてくださった至高存在の腕の中に再び抱かれるときでもある。

現代日本人は、「死んだら何も無い」「死んだら無に帰す」という考え方を懐^{いだ}きがちのようにも見られるが、一方で、死後の魂とか、その魂が帰っていくところを信じたいという気持ちも強いのではないかと思う。

インドの死を待つ家

私の授業では、インドのヒンドゥー教の聖地ベナレスにある「死を待つ家」を描いたビデオを見せる。その家は、死が近づいた老いた父母や祖父母を家族が連れてきて、共に自炊生活をしながらその死を看取るための施設である。聖なるガンジス川の沐浴場の近くにもあり、毎日、ガンジス川の水を汲んできて、死んでゆく人の口に含ませることができる。また、毎日宗教者がヒンドゥー教聖典の一節を唱えてくれる。そのことによって、死後、魂は神とともに安らぎ、あるいは生まれ変わりを繰り返す輪廻から解脱できると信じら

れている。死を覚悟した老人は、全く医療的なケアを受けず、安らかな死と宗教的な救いを求めて、家族に囲まれて最後の日々を過ごす。ここには、延命のための手厚い医療には恵まれているが、魂のケアや家族とのコミュニケーションに欠けがちな日本の病院における終末期とは対極の姿がある。

生きる意味、生きがい

死を見つめることで、いかに生きるかを考えるという私の授業のねらいに関係して、私は、「生きる意味」「生きがい」といったテーマも取り上げている。「生きる意味」に関しては、ヴィクトール・フランクルへのインタビューのビデオと、彼の著書『夜と霧』を紹介している。フランクルによると、「わたしたちが生きることからなにを期待するのではなく、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題」なのであり、生きるとは、生きることが各人に課す課題を果たし要請に応える義務を引き受けることである。

生きがいに関しては、ハンセン病の患者の精神医学

的研究をした神谷美恵子の生涯とその著書『生きがいについて』に触れる。その中の一節、「人間の存在意義は、その利用価値や有用性によるものではない。……五体満足の私たちと病みおとろえた者との間に、どれだけのちがいがあるといえるのだろうか。私たちがやがて間もなく病みおとろえて行くのではなかったか」に見られる苦悩する者に寄り添い共感する感性は、彼女の生涯を貫いている。

また、私の授業では、スポーツコラムニストとして活躍するミッチ・アルボムが、難病ALS（筋萎縮性側索硬化症）に侵された大学時代の恩師モリー先生の死の床で、「生きること」「死ぬこと」や「愛」について教えてもらったことの報告書である『モリー先生との火曜日』も紹介する。モリー先生はつぎのように言う。「人生に意味を与える道は、人を愛すること、自分の周囲の社会のために尽くすこと、自分に目的と意味を与えてくれるものを創り出すこと」。

終末期のケア

また、NHK未来潮流「生老病死の現在」で、森岡正博氏が、淀川キリスト教病院名誉ホスピス長の柏木哲夫氏と対談しているビデオも見る。この番組のもとになった対談は、『現代文明は生命をどう変えるか』（森岡正博編著）という本になっているが、その中で、森岡氏は、「近代医学は、からだだけの存在としての人間をよりよく精密に解明してきましたが、人間はからだだけの存在じゃない。それに気がつくための手がかりは、やはり死を前にしたターミナルケアのようなところから開いていくような気がします」と述べている。そして、肉体的な「生命」が死んでも、まだ続いている。「いのち」について語りあっている。

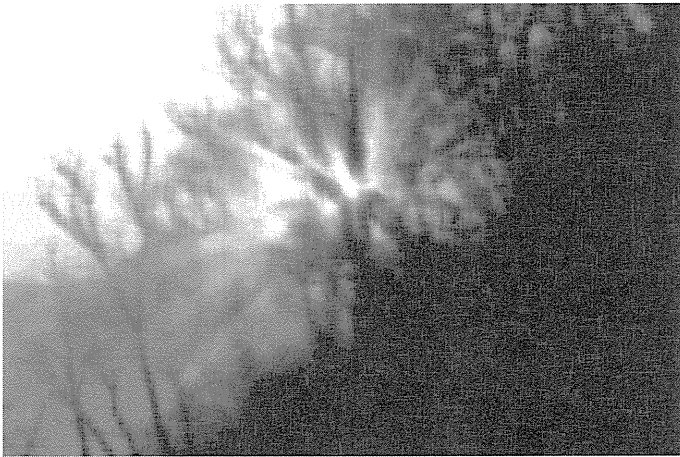
医療の現場で末期患者に対して延命医療より緩和医療を重視する動きが広まってきている。WHO（世界保健機関）では、この緩和医療において、人間の痛みを、身体的な痛み、精神的な痛み、社会的な痛み、そして「魂の（スピリチュアルな）痛み」をケアすることをうたっている。「スピリチュアルな痛み」には、自

分の人生の意味とか、肉体的な死を越えて続いていく「いのち」についてどうとらえるのかが関わっている。

授業のねらい

この他、私の授業では、脳死と臓器移植、仏教の葬式・死者儀礼、日本人の生老病死についての見方・考え方、死別とグリーフ・ワーク（悲嘆の仕事）、幸福論などを取り扱う。

私の授業で目指しているのは、学生がこれからの人生において、老病死に関わる体験はもちろん、さまざまな挫折を体験する中で、その挫折から自己を向上させたり、新たな人生を切り開いたり、さらには人生の豊かさや深みを味わっていけるようなヒントや考え方をつかんでもらうことである。また、豊かな感性や人間性を養うことにもつなげていきたいと考えている。



「比較文明論」とは何か？

— 国際人たるための世界認識の構築 —

国際経済学部教授 保坂俊司



麗澤大学の目指すところは、「高い教養と優れた人格を持ち、そのうえで高度な専門的知識を身に着け、かつ発揮できる国際人の養成にある」といわれています。だから麗澤大学では、語学教育が盛んであり、また恐らく日本でも一、二を争う国際色豊かなキャンパスを形成しているのです。皆さんも、学内に飛び交っている言葉の種類の多さに気付いているのではないでしょうか？ もっともこれは麗澤大学では当たり前の光景ですが、しかし他の大学では見られない現象である事を皆さんは自覚しているでしょうか？

この傾向は国際経済学部においても同様です。わざ

わざ経済学部の名前の前に「国際」が付いているのは、無意味に付けたわけではないのです。それは麗澤大学の建学の理念、つまり「世界に通用する優れた学生を世に送り出す」ということを使命にしている大学の経済学部である、ということの意味しているのです。

では、このような使命感は麗澤大学の教育にどのようにつながっているのでしょうか？ここで詳しい説明は、紙幅の都合で出来ませんが、私が属する一般教養に於ける特徴を論じることで、この問いに対する解答したいと思います。

麗澤大学のカリキュラムには、世界を客観的、かつ

公正に見ることの出来る幅広い教養を身につけてもらおうという意図で、一般教養において比較に関する学問が配置されています。つまり比較文明論・比較文化論・比較思想論などがそれです。これらの比較学を通じて、麗澤大学では学生諸君が、幅広い視野と教養を身につけられるようにしています。教養課程にこれだけ比較学が配置されているところは、他には余りありません。

特に、「比較文明論」は他の大学には余り例の無い講座なので、以下に於いて簡単に説明しておきましょう。

「比較文明論」とは

「比較文明論」というのは、どのようなことを学ぶ（あるいは教える）学問なのでしょうが？実は、この素朴な問いに明確に答えることは結構難しいのです。そもそも「比較文明」という名前は、一般には余り馴染みの無い言葉ではないでしょうか。

それもそのはずで、この学問は結構新しい学問です。ここで「比較文明論（学）」と取りあえず私は学も論もど

ちらもほぼ同じ意味で使っています）」の歴史をひもとも余り意味はありませんが、多少学問の起源や成り立ちを検討することで、この学問が何を目指しているかを知っていたことが出来るでしょうから、簡単に紹介しましょう。

さて、この「比較文明」という名称は、「比較」と「文明」という二つの言葉から成り立っています。ここでは先ずその意味から入ることにしましょう。というのも、言葉は対象を理解するうえで大変重要な道具ですが、この道具、意外にも普段余り厳密に吟味して用いることは希です。日常生活においては、多少曖昧なままでも意思の疎通が出来ないわけではありませんが、ちよつと混み入ってくるとそうはゆかなくなります。例えば法律の世界では、お互いに用いる言葉が厳密に定義され、用法が固定化されています。そうして初めて厳密な意味を言葉は、伝えられるわけです。

当たり前のことですが、これが「比較文明論」のよ

うな新しい学問には結構大切ですが、なぜなら、この学問は歴史が浅いために、この言葉に対する定義がまだ

定まっていない部分もあつて、人によつて意味内容に多少の相違があるからです。いずれにしても言葉という道具の曖昧さから来る誤解を避けるために、「比較」・「文明」について簡単に述べましょう。

まず、「文明」のほうから考えましょう。「文明」という言葉は、良く知られているように翻訳語です。ですから、その意味の源は、原語である civilization にあります。そして civilization は、ラテン語の *civilisatio* からきて、それは *civis* (市民) という言葉にたどり着く。そしてこの市民から形容詞の *civilis* (都市の) が生まれ、*civilisatio* が出来た、というわけです。これを本学の教授であり、国際的にも高名な比較文明論の泰斗伊東俊太郎博士は「文明は、既存の多くの文化のサブ・システムを包含し『文化』に対していつそう広域的なネットワークを形成し、より広い範囲に普遍的に拡がっている」ものとされています。ちよつと難しいですが、要するに文明とは「大規模で高度な組織化、制度化、統合化、精緻化」された社会の形体ということですから、勿論、これでも難しいですね。しかしこの問題は幾ら

やつてもきりがないので、「文明」とは、文化(人間の営みによつて生み出された生活様式)の発展形態で、都市という人間が作り上げた生活空間を前提としている、ということですから。この都市の出現を伊東先生は「都市革命」と命名されています。「詳しくは『比較文明を学ぶ人のために』(世界文化社)参照」

そして、「文明論」とは、都市という人間の新しい生き方―これが文明ですが―を研究対象としている学問です。従つて、その研究対象は都市という人間が生み出した新しい生活空間で生まれた一切のものをいうわけです。しかし、そのようにいわれても余りに漠然としていて理解が難しいですね。そこで、「文明構造」ということを「文明論」では重視します。文明という対象を、各要素つまり政治、経済：…というように各要素に還元し、細分化してゆくのではなく、むしろそれらの要素を総合化するのです。

そのため「比較文明論」では、文明という対象をダイナミックに捉えるために図式化して、シンプルな形に表現して考察することが有効とされています。

ですから「比較文明論」では、個々の研究対象分野の研究を深める、あるいは先鋭化するという方向ではなく、他の分野との有機的な関連を重視しながら大局的に考える、という方向です。そうすると、人間の営みという大きな対象が非常にシンプルな形で表現できるのです。私はこの点をよく地図にたとえます。つまり、地図には様々な形式が有りますね。そして其々目的にあった地図を用いる事で私達は目的地にすばやく到達できます。

ところで、見ず知らずの目的地に行く時に、私達はどうのような地図を用いるでしょうか？はじめから「町内会用の地図」のような縮尺の小さい地図を使うのでしょうか？やはり、大きな縮尺の地図で、全体像を把握し、それから徐々に対象を絞ってゆきますね。学問も同じことです。「文明論」というのは、対象を大局的に把握し、全体像を明確にすることを目指した学問です。しかも、文明論で扱う対象は、人類の文化の発展、特に都市というような純粹に人類の知的行為によって生まれ、現在もそして未来永劫、人類が存続する限り続

く知的営為を対象とする学問です。つまり「文明論」は、云わば人類史や人類の知の営みを見るための最大縮尺の地図である、ということです。

次に、ではなぜ「比較」という言葉が入るのか、ということの説明に入りましょう。先に説明したように「文明論」は、大局的に人類の知的な営みを捉えようとする学問ですから、必然的に時間・空間において広域な部分を扱います。勿論、地図においても地球全体を鳥瞰ちようかんできる大縮尺の地図だけでは、地図の用途としては不十分のように、つまり、各用途に応じて縮尺が小さくなってゆくように、「文明論」もテーマを絞り、研究対象やその時間・空間的な広がりによって限定を加えてゆきます。そしてある種のまとまりが出来るまでその縮尺を小さくしてゆきます。その結果、幾つかの独立したグループ、つまり文明が見出せます。

この幾つかの文明のグループを特定の視点から比較して、それぞれの特徴を明らかにしてゆこうというのが「比較文明論」というわけです。このような視点でものを見ると、従来の細分化され、特殊化した学問分

野では明らかにならなかった、見えなかったものが見えてくることもあるのです。

いずれにしても、「比較文明論」では、文明を長い時間、広い空間を対象とし、さらにそこに含まれる多様な構成要素を総合的に比較する、という方法をとるのです。しかも、「比較文明論」は、歴史学のように、過去の出来事のみを研究するだけでなく、現在を基点として、過去は当然ですが、人類の将来という未来まで視野に入れた研究をします。「比較文明論」は、未来志向の学問というわけです。

以上、簡単に「比較文明論」について、その言葉の意味から解説してみました。学生の皆さんには、少し面食らうことがあると思いますが、実は、この「比較文明論」こそは、二十一世紀の学問だと私は考えています。

というのも学問的に言いますと、現在の学問の多くは十九世紀前後から西欧において形成されたものです。ですから西欧を中心に書かれています。それは歴史学でも政治学でも経済学でも同じです。誤解を恐れずに

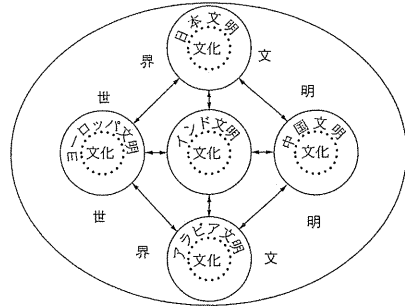
言えば、現在の学問の基本は、西欧人に都合よく出来ているのです。当時の西欧は世界に植民地を持ち、それを正当化するために様々な知恵を考え出したのですが、その一つが、われわれが学ぶ学問である、というわけです。

しかし、二十一世紀の現在、そのような状況に世界はありません。しかし、学問だけは相変わらず、という点があります。勿論、それは全否定されるべきものではないのですが、やはり特定の地域の文化や文明に偏った見方が基礎になる学問は、公平性を欠くでしょう。

何といっても現在は、飛行機を使えばわずか一〜二日で何処へでも行ける時代です。十九世紀の頃のように、何週間、何ヶ月もかけて世界を歩く時代ではありません。世界の片隅で起こった事件が、一瞬にして世界各地に伝達される時代です。もはや西欧のみが世界の中心という考え方は、世界を読み解くことではできません。

ですから、「比較文明論」は、西欧中心の世界観を修

正し、地球規模の世界観を構築する事を目指す新しい学問というわけです。そのために、「比較文明論」では、一元的な中心を作ることの無いように、幾つもの要素を組み合わせ、また多様な形態の文明を互いに比較することを目指します。(図1)



(これは例示で、中心は他の文明圏でもよい)

図1 世界文明と諸文明圏
(伊東俊太郎博士のモデルを参考としたもの)

授業の内容

以上のように「比較文明論」は、時間・空間的に広い領域をカバーしなければなりませんし、研究対象も多様となります。しかし、実際問題としては、なかな

かこれを一人で行うことは難しいのも事実です。そこで私は、専門である宗教学をベースとして、この「比較文明論」的な視点から講義を行っています。

というのも、二十一世紀の人類社会を考える時、宗教は決して軽んずることの出来ない重要な要素です。それはイスラム教やイスラム教徒(以下合わせてイスラムと略記します)の存在に注目すれば、一目瞭然です。いまや世界の動向は、イスラムを含めた宗教の存在を無視して語れません。

ところが日本人は、いわゆる「宗教」について非常に偏った認識しか持つておらず、その認識が日本人の精神世界をゆがめ、さらには宗教が重きを成す世界の動向を正確に捉える事を難しくしています。私はこの反省に立って、宗教を中心に文明を幾つかにグループ分け(宗教文明と呼ぶ)して、其々の宗教文明の歴史や特徴、さらには社会構造の比較を行うことにしています。

また、単に過去の出来事を解説するだけではなく、現在各地で起こっている各種の紛争についてもその背

景などを比較文明論の視点から解説するように努力しています。

特に、現在社会的にも、また学生諸君も注目しているイスラームについてはかなりの時間を費やしていません。というのもイスラームに対して、殆ど関係を持たなかった日本人がこれを理解することは容易なことではないからです。しかも、イスラームと国際社会の動向などということになればなおさらです。その理解はかなりの困難を伴います。

そうは言っても、世界の動きと無関係にわれわれは生きてゆくことは出来ません。特に、グローバル時代を生きてゆかねばならないこれからの人々にとつて、宗教とその宗教が形成する文明の理解は重要です。この点を私は学生諸君に理解してもらおうと色々な図を用いて説明しています。(図2)

この図から宗教が人間生活の全てに深く関わっていることがお分かりいただけると思います。しかも、この図式は単に、現在社会の構造認識ではなく、長い歴史の中で共有され社会形成に一貫性を与える最大の要

素とみなして、宗教の視点から文明を分析してゆくとするのが私の授業のスタイルです。

ですから私の授業は、仏教・キリスト教・イスラーム教に関する基礎的な知識を踏まえつつ、それらの宗教のもつ独自の思想や世界観が、現実世界の制度や行動様式(道徳などの)にどのように影響しているか、あるいは反映しているかについて主に解説をすることになっています。

というのも、古代社会や私たちの生活と殆ど無関係な領域を純粹に学問的に、検討することも大切ですが、

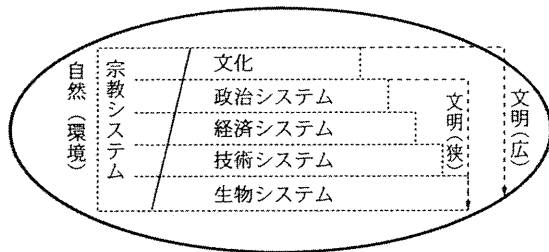


図2 新しいモデル

やはり麗澤大学の学風に照らし合わせても、現実社会に対して直接生かせる知識の習得が重要と私は、考えるからです。

いずれにしても私は、学生諸君が自ら生活する社会、生きる世界を、単に共時（同時代）的に考えるのみならず、それらを成り立たせている時間的繋がり（通時性）でも考えられるように、この「比較文明論」を講じています。

なぜなら真の国際人たるには、時間的にも空間的にも広い視野を持ち、その上で確かな思想、哲学、さらには世界観を身に着けていなければならない、と私は考えるからです。

学生への要望

最近の学生に対して、私は読書量の低下を痛感しております。それは麗澤大学の学生も例外ではありません。特に教養分野における知識の欠如、あるいはそれへの無関心、知的好奇心の欠如を、最近の学生に感じることが多くなりました。確かに、専門教育と異なり

一般教養科目、及びその知識は直接皆さんの就職活動などに益するものではないかもしれませんが。しかし、イエス・キリストの「人間はパン（主食、いわば生活費を生み出す職業的知識）のみに生きるにあらず」という言葉に象徴されるように、人間は様々な知識を身につける必要があります。なぜなら一般教養は、専門知識を支える基礎であり、専門知識を木の幹や枝とすれば、一般教養は根ということが出来ましょう。

つまり、立派な木を育てようとしたら、立派な根が必要ですが。ところが、この根は直接目に見えないということもあり、とかく疎かになりがちです。しかし、ひ弱な根では、それなりの木にしか成長できません。人間も同じです。つまり、専門知識を生かし、自らを巨木に成長させようと願うならば、この根の成長に心がけてください。そのためには、是非皆さんの書物を読み、古今の知恵を身につけていただきたい。

私も、学生諸君が、広い知識、高い見識、優れた知恵を身につけられるように、努力してゆきたいと考えます。

現代人の基礎教養としての生命科学

国際経済学部教授 立木 教夫



近年、クローニング、胚性幹細胞、生殖技術、脳死、遺伝子組み換え食品、ゲノム創薬等々の話題が、メディアで頻繁に取り上げられるようになってきた。生命科学は、われわれの日常生活に深く浸透してきたのである。また他方、生命科学は、さまざまな学問領域と手を結び、バイオテクノロジーやバイオエシックスだけでなく、バイオメディシン、バイオインフォーマティクス、バイオポリティクス、バイオエコノミー、バイオローなど、「バイオ」を冠した新学際領域を開拓してきた。

現在、生命科学の研究フィールドは大きく拡大し、

時間的には、生命出現以降の四十億年、さらに生命前史を含めるなら百五十億年の奥行きをもち、空間的には、地球、太陽系、天の川銀河、さらに宇宙全体へと広がっている。生命体の研究は、個体からはじまり、臓器、組織、細胞、分子、原子へとミクロに向かう探究と同時に、個体、集団、生態系とマクロへと向かう探究が同時進行している。

*

生命の問題は、人間が生命系の一員であるため、われわれ自身の問題である。特に、一九五三年にワトソン (James D. Watson, 1928-) とクリック (Francis H. C. Crick,

1916-2004) がDNAの二重らせん構造を解明して以来、遺伝暗号の共通性を基盤に、地球上の生命体は、人類も含めて、皆兄弟姉妹の関係にあることが判明している。

生命体としてのわれわれの存在構造を、詩的・情緒的にとらえるだけでなく、科学的・理性的に理解する知的訓練を得ておくことは、科学の「非」専門家にとつても十分意味のあることだと思われる。

なぜなら、今日、生命に対する科学技術の適用をめぐって、個人的にも、社会的にも、慎重な判断を要求されることが益々増えてきたからである。

例えば、医療では、医師はインフォームドコンセントを得てから治療に着手するのだが、もし患者が生命に関する知識を持っていなければ、十分な理解は得られず、他律的で場当たりのな対処しかできないことになる。これは、大きな危険を孕んでいる。

また、クローン羊ドリーが誕生した一九九六年当時と現在では、クローニングをめぐる世界的風潮は大きく変化している——ドリー誕生を手がけたイアン・ウィ

ルマット (Ian Wilmut, 1944-) は、「人間のクローニングなんて考えたこともなかったしやりたいとも思わなかった。誰もそんなことはしないほうがいいのだ」という立場から、「ヒトクローニングへの道徳的命令」と題して、「ヒト」クローニングは非常な利益を約束しており、それを行わないことは不道徳だと確信している」^(注1)と主張を転換している。日本でも二〇〇四年七月十三日に、総合科学技術会議の生命倫理専門調査会がヒトの受精卵やクローン胚を医療目的で作成することを認める最終報告書をまとめたが、このような社会の動向の変化を理解するにも、生命科学の知識は不可欠である。

生命に関する知識は、文系の知とか、理系の知といった区分を超えて、語学や社会科学を専門とする学生でも、しっかりと身につけておく必要がある。頭の柔軟な青年期に、生命に対する視座を獲得しておくことは、十年後、二十年後、今日よりも更に深く生命科学があらゆる局面に浸透した社会に生きなければならぬ現在の大学生にとって、決して無駄な努力とはなら

ないであろう。

注1 イアン・ウィルマット十キース・キャンベル十コリン・タッジ著／牧野俊一訳『第二の創造——クローン羊ドリーと生命操作の時代——』岩波書店、二〇〇二年、二二ページ。
注2 Ian Wilmut, "The moral imperative for human cloning," *New Scientist*, 21 February 2004, p. 16.

*

広大な内容を備え、急速に展開している生命科学を、前期後期合せて二十六・七回の講義で伝え、将来的にも有効なバイオリテラシーを身につけてもらうには、しっかりとした基礎がある程度体系的に教授する必要がある——講義題目は「遺伝子の生命科学」としている。生命科学を学んで、「分かる」「面白い」「重要なんだ」という実感を得ることが大切と考え、一コマの講義を次のように構成している。

講義の最初の十分間は、その日のテーマと関連するエッセー題目を掲げ、自由に書いてもらう。これは、自分の手持ちの知識で課題と取り組み、授業に対するレディネスをつくりあげることが目的としている。と同時に、これは、積極的に自分なりの自由発想をする訓練も兼ねている。答えは講義の中で得られるので、

学生の集中度は自ずと高まる。

次の六十分間は講義である。前期は、「DNAとRNA」「DNAの複製」「遺伝子の発現（一〜六）」といったテーマで、生命体がいかに精密・正確な機能を獲得しているかを学ぶ。後期は、「遺伝子突然変異」「分子進化と中立説」「イントロンの起源と進化」「偽遺伝子」「トランスポゾンとレトロポゾン」「遺伝子操作」といったテーマを取り上げる。もし生命体が、突然変異を起こさずに百パーセント完璧な複製を行うなら、進化は起こらず、われわれも存在し得なかつたであろう。突然変異こそ、進化を推進してきた原動力なのである。

実験ができないので、その代わりとして、三、四回に一回程度の割合でビデオを上映し、正確なイメージと疑似体験を得てもらふことにしている。映像で情報が得られることにより、講義で得ていた知識に具体的イメージが与えられ、知識が身に付きやすくなる。ビデオのときは必ず、メモを取ることを要求している。

最後の二十分程度を使って、クイズを受け、感想をまとめてもらう。

クイズは、英米の科学雑誌から最新の関連記事を抽出し、一週間前に配布しておき、自分で下調べをしてきたものを持ち込んで、受けてもらう。英文記事は、内容的にやや専門性が高くテクニカルな用語も出てくるので、私の方で日本語に翻訳し、その中の十箇所を虫食いにしておき、英文を併読しながら解答するという形式をとっている。ここでは、講義で学んだテーマに関係する最新ニュースを取り上げ、学生の関心を掘り起こすと共に、正確な理解力の獲得を目的としている。

感想は、受動的に知識を獲得するだけでなく、その知識に対する自分自身の受け止め方を意見として表明できるようにすること、また、二十歳前後の年齢段階でこのような知識を学んだことの意義を、自分自身に対するメッセージとして書き残しておくことを、目標としている。

最初のエッセーで自由に発想し、講義で「遺伝子の生命科学」を基礎から体系的に学び、クイズで正確な理解力を試され、感想で自分自身の意見を形成する、

という構成である。エッセー、クイズ、感想は、毎回採点し返却する。ビデオの時は、これにメモに対する採点が加わる。

また、学期の終わりには、授業評価をしてもらっている。次に、学生の授業評価を二つ、紹介してみよう。

*

「徐々に難しくなってきた。生命の話は身近でありながらも、微の世界で理解するのに時間がかかる。だが、先生の話のあとにビデオを見ると、パズルがなくなったように楽しいです。これからもそのような授業形式にしてほしい。あと思ったのが、DNA系の模型があればさらに分かりやすくなるのではないかと思う。／今日の熱ショック遺伝子がリアルに再現できたらしいなあと思った。／この授業を受けてから多くの感動を得た。そのことは私の中で大きな変化になっている。その感動を家族などに話し、生命のすごさを実感している。」(二〇〇二年度「生命科学」、五木田美華)

「授業全体を通して考えますと、すごく楽しく参加

できたのですが、難しい分野で理解をしきれない所もありました。ですが、よくよく考えたと私たち人間はただ生きていくだけで、自分たちの体の中、脳の中で何が起きているのか、どのようにして動いたり、考えたりすることができているのかと言うことを全く知らない。知ろうとしなさ過ぎる気がします。人間というすばらしい生き物として生まれたのに、これではもつたないです。人間というものを知るのは大変重大な大切なことだと思えました。」(二〇〇三年度「生命科学A」、高橋裕次)

「生命というのが、エネルギー、物質、情報によって成り立っているのだと思います。DNAやRNAなどから入り最終的に生命とは何だということに入ってきたことには、大きな興味と感動を覚えました。なるほどとすぐ思いましたし、何か世の中の見方が変わったとも思います。生命とは何かという問いは我々が生命体である以上、一生考えていかなければならない問題だと思いました。／これから生命を倫理的にあつか

う機会などもっともつとふえてくると思いますが、そのためにもこの問題意識はますます大きな意味と意義をもつようになると思います。」(二〇〇四年度「生命科学A」、郷田英俊)

*

学生には、できるだけ速やかに大学受験時に課せられた文系理系の区分を乗り越えて、広い全体的視野を獲得してほしいと願っている。生命科学は理科的起源を持つ学問であるが、今日では、人文科学、社会科学、そしてその他の自然科学・工学と手を結ぶ、広域総合科学へと変貌しようとしている。外国語学部で言語を学んでいようと、また、国際経済学部で、経済学、経営学、産業情報学などを学んでいようと、生命の問題に目を開き、独自の接点を見出すことは可能であるし、また、必要とされている。

生命科学の専門家だけが生命の問題を考えるのではなく、多様な背景をもった人たちが正しく、批判的に、生命の問題に関わることが大切なのである。アメリカの主要大学では、すでに生命科学は必修とされ、法律

学専攻でも、経済学専攻でも、政治学専攻でも、皆、生命科学を学ばなければならない。このようにして、いろいろな学問分野の中に生命科学を修得した人たちが進出していくと、さまざまな政策決定や意思決定に生命を考慮した観点が現出してくることになる。

生命系が四十億年かけて進化発展してきた秘密を解き明かし、その本質を捉えようとする生命科学は、あらゆる人が思考の前提に踏まえるべき現代の基礎教養といつてよいであろう。なぜなら、現在、地球環境問題を引き起こし、生命系全体の存続の危機をもたらしているのは生命系の一員である人類であるのだが、しかし人類には正しい知識を探求し、それをもって自らの行動を軌道修正することのできる可能性が残されていると思われるからである。



心理学の基礎的研究から応用まで

国際経済学部非常勤講師 北川 公路



麗澤大学における教育に関わらせて頂くようになって二年目になる。日頃は、群馬で看護師・保健師・理学療法士の養成をする医療系の短期大学で心理学の担当教員をしている。

麗澤大学で担当する一般教養科目「心理学」は外国語学部、国際経済学部の両学部の学生が履修できる選択科目であり、履修者の大半は二年次生で三年次、四年次は少数派になる。

履修学生に対して最初の講義時に学習目標として二つのことを示している。一つは、「心理学」という学問

を説明できるようにすること、二つ目は、「心理学」の知識を日常生活にいかすことを示している。

たとえば、一つ目の説明できるようにするということは、高校生から「心理学って何？」と質問されたら答えられるような水準の知識を身につけることである。二つ目の日常生活にいかすということは、何気ない生活の中に「心理学」が浸透していることに気がついてもらうこと、また、自分で使うことのできる「心理学」が生活の中にあることを学んでもらう。

学生が学習目標を達成するために心理学の教育をする上で気をつけていることがある。それは、大学で心

心理学を専門として勉強をする学生ではなく、一般教養科目として心理学を教わる学生にとって、場合によっては私が教えた心理学の講義が人生において最初で最後になる可能性が非常に高いことが予想される。つまり、「北川の心理学」だけではなく、「一般的な心理学」を学んでもらえるようになることを考えている。そのため講義内容は心理学の基礎的研究から応用まで幅広く盛り込むようにしている。講義には、動物実験のビデオを写したり、性格検査を学んだり、事例を通じて心理臨床を学んだりしている。しかしながら、幅広く教えることによって浅くなってしまう危険性もはらんでいるため工夫をしながら講義は進めている。

それでは「心理学」とは何でしょうか？ 心理学は「ところ」を科学的に探求する学問である。しかし、目に見えない「ところ」をどのように科学的に探求するのだろうか。心理学の研究の長い歴史の中で、さまざまな方法を工夫し、その結果到達したのが、「ところ」のあらわれとしての「行動」を心理学の研究対象とするということである。この「行動」には、日常私たちが

が考える狭い意味での行動だけでなく、人間の発言、態度や表情、さらには生理的な手がかりも含まれる。「行動」を研究対象とすることによって、純粹に客観的な観察や測定を行うことができ科学的、実証的な方法によって「ところ」のメカニズムや原理、法則を明らかにしようとする学問だということが出来る。「ところ」のメカニズムを解明することができれば、人間の行動を予測し、問題を引き起こすと思われる原因を事前に取り除いて問題の発生を予防したり、行動自体を変化させることも可能である。残念ながら「心理学」は「読心術」ではないということを最初の講義で話している。目に見えないところを扱うのではなく、目に見える行動を扱っている。

さて、ここで心理学を用いて学生の行動を予測し、問題を引き起こすと思われる原因を事前に取り除いて問題の発生を予防したり、行動自体を変化させることの例を示してみよう。具体的には、学生を講義に出席させ、講義を静かに受講させるためのスキルを紹介する。あくまでも講義は講義内容で学生を引きつけるのは当

たり前のことであるが、人間の行動を制御するという例で紹介させてもらう。

はじめに、今時の大学の講義の様子をあらわした良い書籍がある。その書籍は、世界思想社から出版されている『大学生入門』である。その中でも「出席」の内容が興味深かったので掲載させて頂く。念のためここで紹介されていることが麗澤大学の学生をあらわしているのではないことをお断りしておく。

『大学の授業についてのさまざまな問題のなかでも、教員が最も頭を痛めるのが、「出席」についてどう考えるかということです。

小・中・高時代、あるいは予備校時代、皆さんは授業に出席するのはあたりまえだと思っていたはずです。大学だって同じことです。ところが、最初は受講生で満員だった教室がいつのまにかガラガラになることはよくありますし、学生は出席はしているものの、私語をかわしていたり、携帯電話で通信していたり、ひどいときには教室の後ろで寝そべっていたりということもめずらしくありません。どうしてこういうことにな

るのでしょうか。

学生側の事情と教員側の事情とわけて考えてみましょう。

まず、社会的常識やマナーが欠如しているうえに、自分で判断し行動できない若者が増えたことがあげられます。マナーの悪い学生にかぎって「授業がおもしろくないからだ」などと言いますが、それが言い訳にならないことがわからないのです。つまらなかつたら出席しなければいいのです。それが大学だと思います。

もし、出席を重視する大学があつて、あるいは出席にこだわる教員がいて、出席しないと試験を受けさせない（授業の三分の一欠席すると受験資格を失う大学もあります）、単位をくれないというのなら、あきらめて出席するか、単位をあきらめるかのどちらかです。そして、出席したのなら私語はしない、それがあたりまえのことです。

自分の意志でさぼることもできない、そして出席して私語する、これこそひ弱な精神以外のなにもありません。

もちろん、大学や教員に責任がないわけではありませんが。授業のやり方や授業内容を反省する必要があることは言うまでもないでしょう。多くの教員が、そうした考えをもっています。ですから、出席にこだわった教員のすべてが、学生諸君にたいしていはりたいとか、意地悪しようとか思っているのではないことを理解してください。外国語の授業や実習・実技は出席しなかつたら意味がないとか、授業というものは、つまらなしいと思いつながらでも出席していれば、なにか一つくらい自分にとって役立つことがあるはずだとか、期末試験のできが悪かったとき、助けてやる材料になるかもしれないとか、出席をとる多くの教員は考えているのです』と紹介されている。（『大学生入門』世界思想社）

この書籍の例の通り、出席をとるといっことは大変、教員としては頭を悩ますところである。出席をいっさいとらないとどうなるか。単位認定試験とレポート課題による方法でしか成績評価ができなくなる。もちろん、それでも問題はないのだが、意欲的に講義は受けたいものの試験であまり良い結果が得られなかった学生

に良い成績評価ができなくなる。そこで、出席をとることになるのだが、毎回出席をとってしまつと、意欲的ではない学生が出席目当てで受講することができなくなる。これは私の学生時代の経験からも裏付けることができる。この講義を履修しておけば週休二日になる、あるいは週休三日になると考えて講義を履修した経験が多々ある。私と同様な考えを持っている学生がいなくても考えられないのである。私のような意欲の学生が講義に紛れ込んでいると、講義中に私語をしてみたり、携帯電話でメールのやりとりをしたり（私の学生時代は携帯電話がない）、眠ってみたりすることが考えられ、講義の邪魔、あるいは熱心に聞いている学生への迷惑を考えて、私のような意欲の低い学生が出席目当てで講義には出ないような環境をつくるために、講義では「たまに出席をとる」ことにしている。

これは、スキナー (Skinner, B.F.) のオペラント条件づけの原理から「たまに出席をとる」ことにしている。スキナーはレバーを押すとエサが提示される装置を制作し、ラットやハトが偶然にレバーを押したときにエ

サを与えることを繰り返すことで、レバーを押してエサを食べるという行動を学習させた。このレバーを押す反応のように、ある刺激場面で個体が環境に働きかける反応をオペラント反応といい、オペラント反応がもたらす結果によって生じる行動の変容をオペラント条件づけと呼んでいる。エサがもらえるという結果は、その刺激場面と反応の結合を強め、オペラント反応の生起頻度を高める作用がある。このようなオペラント反応の生起頻度を高める働きをもつ結果は、正の強化子、と呼んでいる。また、オペラント反応の後に強化子を随伴させ、その生起頻度を操作する手続きを強化と呼んでいる。その強化の与え方を規定したものを強化スケジュールと呼び、オペラント反応の出現に対して、毎回強化子を随伴させる連続強化と、時々だけ与える部分強化がある。スキナーは人間の行動のほとんどが、このオペラント条件づけで形成された行動であるといっている。たとえば、パソコンや携帯電話からメールを送るとき、皆さんは何を期待してメールを送るでしょうか？ 恐らく、自分が送信したメー

ルへの返信を期待しているのではないのでしょうか。つまり、メール送信する行動がオペラント行動で、そのメールへの返信が強化になる。皆さんは返信のくる友人・知人には、メール送信する行動は増加し、返信のない友人・知人に対するメール送信する行動は減少するのではないのでしょうか。また、パチンコや競馬、競輪などばくちごとが、なぜ、やめられないのでしょうか。負ける確率のほうが高いのに、その行動がやむことはありません。これは「たまたま当たる」からその行動が維持されるのである。「たまたま当たる」のが「部分強化」となり、「いつも当たる」のが「連続強化」となる。

つまり、形成したい人間の行動を生起させるには、形成したい行動のあとに「強化」を提示し、「いつも当たる強化」よりも、「たまたま当たる強化」を提示して形成したい行動の生起頻度を増加させ、いつまでも維持することができるのである。そのため、講義時に、「たまに出席」をとるようにして学生の講義への出席行動の頻度を増加させ、維持させている。もちろん、出

席をとる、ことだけが強化ではないのだが：一つの例にはなると考えている。

講義では、スキナーのオペラント条件づけの原理を用いてハトが行動形成されることをビデオにより見せている。また、「出席行動」についてもオペラント条件づけの原理によって「たまに出席をとる」ことにしている説明をしている。そして、日常生活に心理学を用いることができる一例として、オペラント条件づけを用いて人間の行動を形成することができることを話している。

新鮮で楽しい未知の世界

中国語学科四年 小二田美穂

私は教職課程をとっており、人を客観的に見ることに興味があったので、北川先生の心理学の授業を受講させていただいています。私も含めて皆さんが心理学と聞いて想像するような、相手の気持ちを透視したりするような内容ではありません。この授業では人間を精神的な立場から、一方で医学的な立場から考える内

容だと思っています。たとえば、人間の人格形成には幼少の頃からの育った環境や体験したことが大きく影響することを心理学の立場から展開していきます。最近よく耳にする青少年の犯罪問題と密接な関係がある内容であり興味深く思います。また、自分に置きかえて考えられ、就職活動での自己分析へのヒントとなり、自分を見つめなおす機会になる授業です。

北川先生の幅広く教養のあるお話が、私には未知の世界であり新鮮であり楽しいです。その内容には履修する教科や実際の生活と関連しているものが多く、考えを深めることにとっても役立つ授業だと思っています。

スポーツ実習で何を学ぶか？

体育実技の質の改善を求めて

国際経済学部教授 豊嶋 建広



私は平成四年、麗澤大学に国際経済学部が創設されたときに、体育の専任教員として赴任しました。この年は外国語学部と国際経済学部の両学部の新入生は七百人で、彼らは一年間に体育実技の半期授業を三つ履修することになっており、それに対して専任教員二人と非常勤講師一人でそれぞれ六コマを担当して、対応していました。計算すると $700 \times 1.5 \div 3 \times 6$ で、一人の教員に対して五十八名のクラスとなります。人数が多いうえ、授業も半期のため、内容も画一的にならざるを得ませんでした。

そんな中で授業の最初と最後に体力測定を平成八年

まで実施し、一年間の体育実技による体力の向上を紀要等に発表し、学生達には個人個人の体力の変動を体力シートに書き込ませて、その変化を認識させました。上述の体力測定は、当時体育実技の質を高めるためには何ができるかを、三人の体育のスタッフで話し合った結果実施することになったものです。その他にも他大学での体験を生かして、改善を行っていききました。まず学生たちができるだけ好きな種目を選択できるように、各教員が異なった種目を複数教えるようにしました。また、技術を身につけるだけでなく、身につけた技術を、さらに上達させるために、半期でなく通年

とすることや、各教員が専門としている種目あるいは応用技術や戦術まで指導できる種目を担当することになりました。学生が好きな種目を選択して、その技術を自分のものにできれば、社会人になって、会社や地域でそのスポーツのサークルがあれば、積極的に参加することが出来ます。このように「技術の上達」は、生涯体育につながっていきます。球技で難しい戦術を教えるよりも、ゲームをさせた方が学生は喜ぶとの意見もありましたが、私は、大学教育の一環として、単に体を動かして楽しむというのではなく、頭脳も使ってゲームの質を高めていくことが必要であり、ゲームばかりでは、学生たちが数人集まって行うレクリエーションと同じになるという考えでした。

平成八年に両学部とも体育は選択になり、名前もスポーツとなりました。しかし、スポーツという名前では実際行っていることと隔たりがあるため、平成十四年にスポーツ実習に変更しました。名称に関しては、どちらでも同じではないかと思うかもしれませんが、もともとは体育とスポーツの意味は異なります。スポ

ーツは「遊戯・競争を含む身体活動（広辞苑）」であり、体育は「健康増進や体力向上という身体の教育」、あるいは運動・スポーツを通して人間形成を図る教育といえます。

好きな種目を選択し、技術を伸ばす

私の考える大学の体育実技（スポーツ実習）は、高校の体育の延長ではなく、学生たちが、今までの運動・スポーツ体験の中から、好きな種目を選び、技術を伸ばしていくというものです。技術が上達すれば、そのスポーツがより面白くなり、続けたくなるものです。体力はトレーニングをしなければ低下しますが、技術は一度身に付けると低下しにくい傾向にあります。社会に出て体力の低下や運動不足を感じて、スポーツをやってみたくらいと思ったときに、好きなスポーツの技術が保持されていれば、容易にそのスポーツを再開することが出来ます。

大学で鍛えることの必要性

体力は十八歳から二十歳にかけて加齢とともに一年に1%ずつ低下しますが、これを食い止めるには運

動・スポーツを行うことが必要です。「たった1%なら、たいしたことない」あるいは「体力の必要性を感じたら、やればいいじゃないか」と思うかもしれませんが、一年1%も、十年で10%です。それに、体力の必要性を感じてからでは遅いのです。体力の伸び（トレーナビリティ）は、十代後半や二十代と、四十代、五十代では全く違います。ここに大学体育の意義があります。健康のときや体力がある方が勉強も仕事もはかどります。それを考えると、健康や体力は自己実現の手段としても重要です。

技術上達のための原理・原則

大学生には、運動・スポーツの技術を身につけるだけでなく、上達の原則、即ち「いかに効果的に技術を上達させるか」も学んで欲しいものです。技術の上達のためには、反復練習・技の自動化・フィードバック・転移・イメージトレーニング・リラクセスなどが重要です。これらはスポーツだけでなくあらゆる技術を身につけるのに共通しています。

そこで私が担当する空手道や太極拳の授業で、これ

らを意識して学んでもらうために考えたのが、左右の手で名前を書くというものです。その方法を簡単に説明すると、まず左右の手で名前を書いてもらい、利き手と逆手で書いたときの違いを考えてもらいます。利き手で書いたときは、書くという目的と、書き上げた字を見て、上手くかけたとか、上手く書けなかったという結果が本人に意識されます。一方、逆の手の場合は、それらに加えて、字がうまく書けないために、書いている間その動作に意識が向きます。このように本人（動作者）に結果や動作中の経過が意識され、それらの情報が与えられます（フィードバック）。また利き手では動作の過程（字を書くこと）が特に意識されませんでしたが、このような状態になつてはじめて書く技術が身についたといえます。つまり技術が自動化したということです。

次に自動化の重要性を考えてもらうために、今度は左右の手で書きながら、逆手で頭、鼻、耳の順に搔いてもらいます。利き手で書けても、逆手では難しいはずですが。これは、技が自動化しないと、一つのことを

実施しながら他のことに意識を向けることが難しいためです。さらに、利き手の逆では一度も名前を書いたことが無いのに、結構うまく書けたのは、なぜかを考えてもらいます。これは両側転移といい、片側の手足で身につけた技術が反対側の手足へ転移することを言います。

正しい身体の使い方

「身体の正しい使い方」もぜひ学んで欲しい一つです。具体的には、正しい力の発揮、つまり適切なタイミングで、適切な筋肉に適切な力を入れることです。どのスポーツにおいても、これがある程度できるようなになると「上手^{うまい}」と言われます。そこで日常生活の身体活動を、必要最小限の力で、つまり必要な筋肉（適切な筋肉）を、必要な量（適切な力）だけ使つて行うことをホームワークにしています。すべてを実行するのは大変ですから、歯磨きと洗髪の二つを実践させます。具体的には、肘、手首の力を抜いてゆったりと動かすだけです。実は、日常生活のあらゆる動作において、余分な力が入っています。特に腕を上げる動作で

は、肩全体を上げてしまうために力みが生じやすいこと、物を持ったときも、それが軽くても肩に余分な力が入りやすいこと、脚を使う動作では特に（脚力が弱いと）上半身に余分な力が入りやすいこと、その他、筆記やタイピングでさえ余分な力が入っています。私は、一日中何をするにも余分な力を入れており、適切な力で物事をすることに慣れていません。

その他に、大学体育の醍醐味といえは、全学部、全学年の学生達の交流が可能になることです。そこでペアで行うエンカウンタのためのストレッチやエクササイズを作つて授業に取り入れています。それらのストレッチやエクササイズは相手と呼吸（気）を合わせないとうまくできないものばかりですから、一緒に行うことで相手と呼吸を合わせることがうまくなっています。

以上が、私が考える「スポーツ実習」を通して学んで欲しいことですが、現実には毎年時間が足りなく、消化不良に終わってしまいます。二〇〇五年度こそはと、今から計画を練っている最中です。

ダンベルで体づくりを学ぶ

英語学科四年 深作絵美



私は半年間、ウェイトトレーニングの授業を受けていました。授業は主にダンベルを利用してトレーニングをしていくものです。ダンベルを使うことは初めてだったので、予想以上に重く感じ、片手二Kgのダンベルを使ってトレーニングを開始しました。ウェイトトレーニングは効率よく全身の筋肉をつけることができるそうです。それゆえに様々な種類のトレーニングがあり、初めのうちはどこの筋肉を鍛えているのかを覚えることが大変でした。トレーニング自体は辛くてきついイメージがあったのですが、実際は自分のペースで無理なく続けることができるのでとても楽しく感じるようになりました。

様々な種類のトレーニングがあったということも楽しく感じる理由の一因だったと思います。授業は週に一度しかないので、毎回出ていると少しずつですが確実に筋力がつき、ダンベルの重さが変わっていき

ます。実際に成果が数字となって現われるので、力がついているのが一目瞭然でした。自分のトレーニングの内容や感想をノートに書く時間があったので、自分の変化がよくわかりました。途中力がついているのか不安になることもありましたが、積み重ねることで確実に力はついていました。最後の授業では片手五Kgのダンベルを持てるようになりました。この授業では実際のトレーニングの仕方は勿論、体の仕組みも学べたのでとても勉強になりました。この授業で学んだことを生かして健康的な体づくりをしていきたいと思えます。

高校の授業にはないスポーツを体験

日本語学科二年 森田早紀



私は大学一年生の時、スポーツ実習で空手の授業を履修しました。まさか大学の授業で空手を履修できるとは思いませんでしたが、以前から空手に興味があった私にとって、とても良い機会

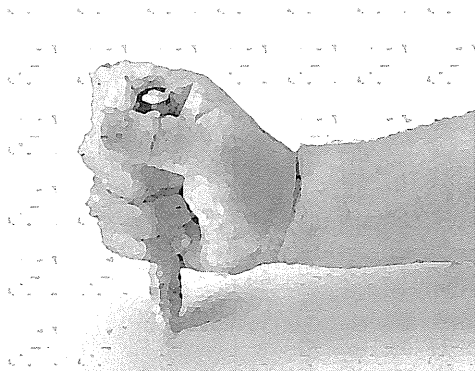
います。

となりました。履修者は、意外にも女子が多く、男子は数名しかいませんでした。空手というと、恐いとか、男性がやるスポーツだとかイメージしがちですが、女性も気軽にやれるスポーツです。私以外にも空手をやってみたいと思うて履修した女子が多かったのではないかと思います。授業内容は護身術も兼ねていましたので、みんな真剣に取り組んでいました。

授業では全員が未経験者だったので、なかなか簡単にできるものではありませんでしたが、楽しそうに練習していました。

授業の始めには、二人組になつてのストレッチをやりましたが、これで学科の違う友達が何人かできました。大学における体育の授業の魅力は、第一に経験のないスポーツも気軽に始められることだと思います。空手の他に、太極拳やゴルフの授業もあり、高校の授業にはないスポーツを大学で体験できます。

そして第二の魅力は、運動不足を解消できる点だと思います。大学では、定期的に体を動かす機会が少なくなります。ですから授業を有効活用したらいいと思



総合科目再開

外国語学部助教授 大野 仁美



今年度（平成十六年度）外国語学部では、しばらくお休みとなっていた総合科目が、学部と言語研究センターとの連携のもとに「ことばに関わる学際分野」として装いも新たに再開された。履修者数約二百五十名、アンケート（無記名式）の結果も良好と、幸いまずまずの成功をおさめ、今後も継続してゆく運びとなった。今回『麗澤教育』が「麗澤大学の教養教育」という特集を組むということで総合科目再開の経緯を報告する機会をいただいたので、来年度以降の展望も含め以下述べてゆくことにする。

まず、二〇〇三年十月一日に設立された新しい機関

である麗澤大学言語研究センター (Linguistic Research Center, 通称LInC) について簡単に紹介させていただきたい。このセンターは、学際化・グローバル化の時代において、語学教育に伝統と実績を有する麗澤大学の研究水準のさらなる高度化と、個別言語の枠を超えた横の連携および学部と大学院の縦の連携を推進する研究・教育拠点として設立されたものである。大きく下記の二つを設立目的として掲げており、「教育」と「研究」とを、「大学院」と「学部」とを、さらに言語に関わる様々な研究に従事している異なった部署に所属する教員を、それぞれつなぐ(Link)ことをめざしている

ところに大きな特徴がある。

(一) 言語学を軸とした理論的・実証的研究を通して、個々の語学研究成果を言語の普遍性と多様性にかかわる知の一環として集約し、広く学内外に発信する。

(二) 大学・大学院に還元できるような教育支援活動を行い、研究と教育の一体化を担う。

(センターについて詳しい情報はセンターホームページを御覧下さい <http://www.fl.reitaku-u.ac.jp/LINCO/>)

この目的を果たすため、学部への具体的な貢献の可能性について設立準備にあたっていた初期のメンバー——その専門領域と関心は実に多様性に富んでいた——がアイデアを交換し合ううち、センター主催の講演会を毎年一〜二回行うのと同時に、「ことば」の関連領域の最新・学際的知見を提供できるような授業を開講できなにかということになった。ちょうど外国語学部では、従来の「学科別」枠組みに加えて、「専門別」のような新たな枠組みが導入できないかと模索しているところであった。また「学際」的分野といえれば総合科目が既にカリキュラム上その枠を提供しているのだが、

諸般の事情によりしばらく開講されていない状況にあった。これらの背景・状況が組み合わさって、言語研究センターが企画を担うという形式で総合科目が再開することとなった。

センターが考えた総合科目のコンセプトは、ことばが関わる領域の広さ・深さを知り関心をもってもらうことをめざす、語学を専門に学ぶ学生が卒業までに触れておいた方が望ましいと思われる言語および情報処理関連の学際的知識を提供する、複数の教員がオムニバス形式で講義を行う、扱う領域が常に *up to date* なものになっているよう担当教員間で見直しを行う、であった。また既設の開講科目——各学科で開かれている言語関連の授業や一般教育科目としての「言語学」——とくらべ、言語学プロパーとしてはより導入的であるが、一方で従来の言語学の枠では扱えない幅広いトピックも扱う（たとえば手話など）こととした。

さて、再開第一回目の総合科目は以下のような個別テーマで行われた。

テーマ	担当
オリエンテーション	大野
言語と脳(1)ヒトの言葉を科学する	渡辺信助教授
言語と脳(2)言葉のできない天才たち	瀬川真由美助教授
意味をコンピュータで科学する	千葉庄寿助教授
消滅の危機に瀕した言語たち	坂本比奈子言語教育研究科長
世界の言語(1)世界で一番発音の難しい言語:コイサン諸語(アフリカ)	大野
世界の言語(2)語形変化の多い言語:フィンランド語	千葉庄寿助教授
学長特別授業「日本語と韓国語」	梅田博之学長
日本語で詩をつくること:詩人谷川俊太郎の言語学(1・2)	滝浦真人助教授
映画に見る英語の方言差(1・2)	杉浦滋子言語研究センター長
まとめ、レポート提出、アンケート実施	大野

企画が前年度後期に行われたということもあって、メンバーは言語研究センターの初期の構成員のみという形となったが、現在では学部生がその授業に触れる機会のない梅田学長・坂本言語教育研究科長が総合科目再開に華を添えて下さったのは特筆すべきことである。

さて再開一回目で閑古鳥という事態はさけるべく、タイトルも「ことばのワンダーランドへようこそ!」と銘打ち、できるだけ多くの学生に来てもらおうと意気込んだのではあるが、ふたをあけてみると履修者数約二百五十名という予想以上の大所帯となることになった。これはたいへん嬉しいことである、と同時に出席表の管理や期末レポートの採点はその分労力を必要とするものとなった。教室も最大教室一五〇三に移動し、多くの講師が張り切って映像資料を駆使するなどentertainingな授業を展開した(一五〇三教室の音響とスクリーンの調子がいまひとつ良いとはいえないところが残念である)。

が、その大教室での授業はだんだん私語の問題に悩

まされることになった。これは、一回ないしは二回完結式で、相互の連関が必ずしも明らかではない授業が続くという形式にも問題があった。ちよつと欲張って個別テーマにはありとあらゆる内容を盛り込んでしまったので、その全ての内容に関心が持てない学生がそうもないのと同様、ある学生が全てのテーマに等しく関心を持つ、ということもそうはあり得ないような状況であった。結果として、どのテーマの時もなんとなく気が乗らない層を含むこととなってしまった。この「関心のない人たちの私語がいや」というのは、アンケートの記述式回答で最も多かった「苦情」でもある。この反省もあって、来年以降は、毎回新しい別のテーマの情報が入ってくる、というよりは、統一テーマを設定し知識が深まり積みあがっていくような授業を展開しようということになった。

さて期末にはレポートが課された。この課題に取り組むに当たり必要十分な説明をおこなったつもりであったのだが、二年生には少しむずかしかったかもしれない（下記アンケート問い（3）参照）。また、評価は

出席点とレポート点の合計によるものであり、レポートは提出したからといって必ずしも点数がとれるものではなく、課題を取り違えていたり「必ず実施せよ」と指示されている作業をしていなければ0点もあろう。その結果、欠席が一―二回に過ぎずレポートを提出していても単位をとれないケースが数件あった。これは多くの学生側の「常識」とは合致せず、評価に対する公式な問い合わせも四件いただいた。出席点が充分でない場合は、レポートの出来次第では単位が出ないこともあるということを示的に伝えておくべきだったようで、申し訳なく思う。がんばったのに単位がとれなかった学生のみなさんは、来年以降ぜひ再挑戦してください。期待しています。

さてここまで既に何回か触れたアンケートは最終授業で実施した。その質問内容と結果とを以下に示す。結果はおおむね好評であり、講師陣の不安はひとまず一掃された。記述式質問（1）の回答にはいくつか有意義なコメントが書かれており、なかでも「もっと深くひと固まりの知識が身につく授業に」というのは講

師側の意見とも一致し、早速来年は一人の講師が原則二回担当する、という基本線をたてることになった。

また質問(2)には今後総合科目として期待するテーマを書いてもらったのだが、その中には必ずしも「ことは」に関係のないものもあつた。これは言語研究センターとしては対象外にせざるをえないが、麗澤大学には言語学に限らず様々な分野の専門家がそろつているので、その専門を切り口にした総合科目というのは当然あり得ると期待する。また「環境」や「エネルギー」といった現代社会を生きる上で無関心ではいられない問題について各国事情をレクチャーする、などということもできる。外部講師を依頼することと、総合科目を複数(回)履修できるように変更することとを考えると可能性は無限だ(現システムでは一回分(半期)のみ卒業単位として認められる)。また個人的には、「総合科目」で他の学科の先生の授業が受けられるのが楽しいのと同時に「自分の所属する学科の先生が他の学科の学生たちに授業するのを見て誇りに思う」というコメントをかなり耳にした。これは麗大生と学科教

員との間の良い関係を示唆しているようで、こちらもなんだか嬉しい気分になった。

この外国語学部と言語研究センターの連携のもとに実施する総合科目は今後も引き続き開催されるが、内容や形式は当初の想定どおり常にバージョンアップしていく予定である。来年度(平成十七年度)は「多言語多文化社会を生きる(仮)」というタイトルで、コイディネーターの瀬川助教が中心になって企画を進めている。これは、外国語学部の現カリキュラム「多言語多文化総合プログラム」を受けて立案されたもので、言語と社会の学際分野を扱い、講師陣も社会・文化研究を専門になさっている先生方に御登場いただくことになる。乞う御期待。

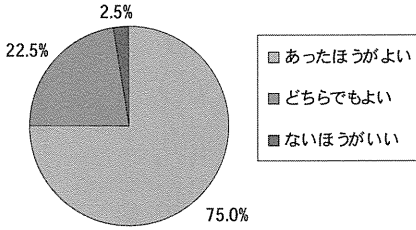
〔総合科目授業アンケート〕

総合科目は、外国語学部で学ぶみなさんに専門知識を身につける上で必要と思われる基礎的の教養を提供し、さらにことばの研究の関連領域に広く関心をもってもらうことを目標として今回授業を企画しました。この授業に関するみなさんの意見をお聞きます。

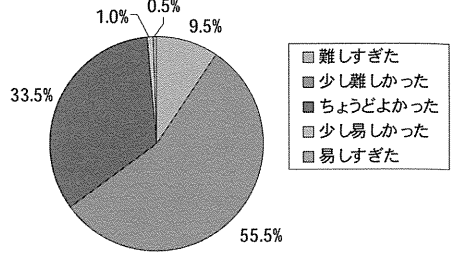
・以下の質問については、あてはまるものを○で囲んで下さい。

- (1) このようなリレー形式の授業は今後もあった方がいいか？
 あったほうがいい／どちらでもいい／ないほうがいい
- (2) 全体的に授業の内容は
 難しすぎた／少し難しかった／ちょうどよい／少し易しかった／易しすぎた

問い1:このようなりレー形式の授業は今後もあった方がいいか？

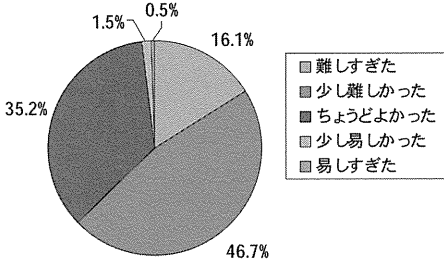


問い2:全体的に授業の内容は

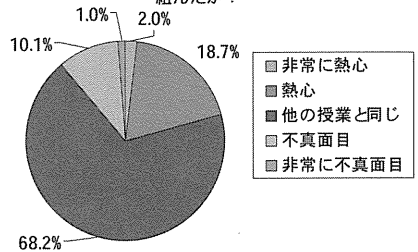


- (3) レポート課題は
 難しすぎた／少し難しかった／ちょうどよい／少し易しかった／易しすぎた
- (4) 自分自身はこの授業にどのように取り組んだか？
 非常に熱心／熱心／他の授業と同じ／不真面目／非常に不真面目
- (5) ことばにかかわる研究や関連領域に興味がありましたか？
 非常に関心を持った／関心を持った／どちらでもない／あまり関心を持たなかった
 ／まったく関心を持たなかった

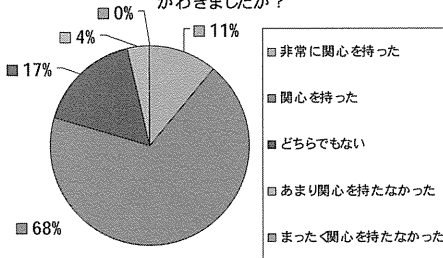
問い3:レポート課題は



問い4:自分自身はこの授業にどのように取り組んだか？



問い5:ことばにかかわる研究や関連領域に興味がありましたか？



・以下については自由に書いて下さい。

- (1) 全体的な感想をどうぞ。
- (2) 今後総合科目で扱ったら良いと思うテーマがあったら教えて下さい。

グラフ作成：千葉庄寿外国語学部助教授

論作文教育の軌跡

外国語学部教授 大竹 秀一



教室の内と外

私が麗澤大学外国語学部で作文の授業を受け持つ十四年になる。

最初の年は「論述作文」という科目名で、一年生の必修だった。一教室三十人足らずの編成で、多くの先生が手分けして担当しておられた。次の年から選択科目の「表現論」と変わり、担当は私一人だけになった。以来十三年続いて、今春ピリオドを打つ。

作文の授業時間は、天国である。教師は学生に書く要領を説明し、課題を与えてしまえば、あとはするこ

とがない。ひと時のざわめきが静まると、教室は入学試験の会場のようにシーンとなる。いつもこうならいいのだが、などどつぶやきながら、あとは椅子に体を沈めてうたた寝気分でごす。時間が来ると、学生から集めた原稿を持参の大袋に入れて、「はい、さよなら」。しかし、このあとが大変である。

集めた原稿は、一枚残さず目を通さなくてはならない。赤ペン片手に誤字脱字を正し、筋の通らない文章をどう直そうかと頭を悩ませる。挙句、「わかりやすく書き換えを」で済ませてしまうこともある。学生数は平均九十人程度。学期によってばらつきがあり、少な

いときは十人以下のこともあったが、国際経済学部との合同授業で、二百五十人を超えたこともあり、階段教室が満杯になった。そんなときは全部読むのに数日かかる。一日四、五時間、鉛筆書きの文字を読み続けてみると、首根っこがガチガチに固くなった。

添削が済むと、講評用の教材作りである。手ごろな原稿を三点ほど選び出し、間違いの箇所はそのままにして、パソコンで打つ。それを学生の数だけコピーする。毎度こんなふうである。根競べのような作業をよくあきもせず繰り返してきたものだが、これも文章を読んだり書いたりするのが下手の横好き、という私の性分のせいであろう。

大学の作文教育の意味

日本の大学では、長いこと作文教育が軽視ないしは無視されてきた。その理由など古いことはここでは問わないことにして、今、ニーズがどこから来るのかを言っておきたい。

平成十五年夏、『麗澤大学紀要 第七六巻』に発表し

た私の「大学の論作文教育」という小論にも書いたことだが、一つは現代の若者の作文能力の衰弱である。圧倒的な視聴覚メディアに押されて、活字離れがひどい。「とにかく高校生にふさわしい文章表現能力を身につけさせなくては」というリメディアル（補習）教育の要請である。

もう一つは、大学で学生に書かせるレポートや論文の書き方の指導ということである。そんなものは普通の作文能力があればわざわざ教える必要はない、というのが古くからの日本の大学の考え方だったのではないか。しかしこれは間違っていると私は思う。

大学で書く論文やレポートは、欧米流に言えばアカデミック・ライティングということになる。これは大学教育の基本に据えてしかるべきものだとは私は思う。大学の教師は、研究をし、論文を書くことを仕事にしている。研究とは未知なるものの探究である。疑問から出発して、探究し、事実、真実を突きとめて、その結果を論文に書く。本来の大学教育はこの研究という土台の上に行われるものであろう。学生も大学に入っ

たからには、学問研究の手ほどきを受ける資格がある。最初はたとえ稚拙でも、疑問に思うことを自発的に調べ、考えて、自分なりに得た結論をまとめて書く。このような書くトレーニングを通じて、学問研究の意味をいささかでも感得することが期待される。こう考えれば、大学の作文教育の持つ意味は非常に大きいと言わなくてはならない。

何を書かせるか

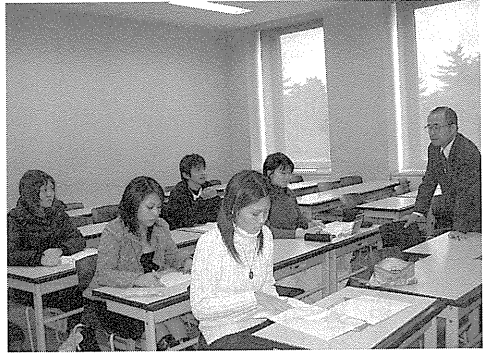
学生たちは私の授業に何を求めているのか。毎年学期始めにアンケートを実施したところ、一位は「レポートや論文の書き方」であった。これに続いて「作文能力の向上」や「就職試験の小論文・作文」「ビジネス文章」「手紙」などの書き方、という順序であった（くわしくは前記『麗澤大学紀要』をご覧ください）。

これでわかるように、アカデミック・ライティングに対するニーズはきわめて高い。これに比べてやらなくてはならない。私は授業の一本目の柱をアカデミックな論文やレポートの書き方とすることにした。

しかし学生たちはそれだけでなく、就職試験とか卒業後に職場で書く文章、手紙などの書き方にも関心を示している。これらは研究志向のアカデミックな文章と違い、いわばノン・アカデミックな、社会の文章である。学部卒業生の大半が、学究コースに進まず、実社会に出ていくことを考えれば、これもうなずける。そこで二本目の柱はノン・アカデミックな文章ということにした。これにはリメディアル教育の意味もあるし、学生が書かされる論文やレポートには研究志向でないものも含まれているのが現実だからである。

文章二分法―私の方法論

新聞社から転じてきた私にとって、大学の作文の授業は暗中模索で始まった。ただ記者としての経験から、新聞記事と研究論文には共通するものがあるように感じていた。それは事実の尊重ということである。こまねずみのように動き回る記者と、研究に沈潜する学者と。外見は違っても、事実、真実を追い求めるという点では同じではないか。そんな考えから私は「主観的



文章と客観的文章」(ワ
ンセンテンスなら主観文
と客観文)という文章の
二分法を思いつき、学生
にも説いてきた。

主観的文章とは「自分
の立場で物事を主観的に
述べた文章」と定義する。
主観的とは、自分の感性
や感情、想像などに依拠
しているということ、

さらに自分なりの判断、認識、意見、提案など知的な
面も含める。一方、客観的文章とは「第三者の立場で、
事実あるいは真実について客観的に述べた文章」であ
る。客観的とは、みんなが認めるだけの根拠、裏付け
を伴うということである。

私がこの二分法で強調しなかったのは、研究志向の
論文やレポートは、事実・真実を調べ、突きとめて書
くもので、客観的な裏付けが必要であり、それを書く

には客観的文章が要求される、ということであった。
そこでは実証が重んじられる。その点、客観的事実の
報道に徹するニュース記事も同じことだ。

そこへいくと一方の主観的文章はずっと自由である。
小説や随筆は主としてこの世界のものである。また、論文
でも評論とか時事問題に関する論評などは、主観的文
章の入り込む余地が広くなる。それは客観的事実に対
する自分自身の見解や見通し、提言などを主張するも
のだからである。研究論文が事実・真実を追い求める
ものなら、評論・論評の類(私は意見論文と呼ぶ)は
説得・賛同を目的とする。一口に論文といっても性質
が違う。レポートも同じことだ。しかし大学ではそう
いうことには無頓着に論文やレポートを課しているき
らいはないであろうか。

話が細かくなってしまうが、大きく言えば研究志
向の文章と、評論志向の文章は分けて指導すべきだと
いうのが、私の考えである。こうして表現論の授業は
客観性の強いアカデミックな文章の習練から、次第に
主観性を盛り込んだ文章へと移っていくパターンをと

ることになった。

振り返って

大学に入った以上、アカデミックな文章というものを少しでも理解してほしいという私の願いは、ある程度学生にわかってもらえたかと思う。しかし実践となると、文献、資料の捜し方、扱い方などなかなか徹底できないうらみが残った。文章とはすべて自己表現であると思いきや、いる学生の頭を、客観的事実、真実の探求に奉仕する研究志向の文章へと向かわせるのは簡単ではないことを痛感させられた。それだけにまた、大学の論文教育の意義は大きいとも言えるだろう。

つたない実践だったが、おしまいに私がこれからの大学の論文教育に希望することを申し上げておきたい。

第一。なるべく一年生のうちに、必修科目として課すこと。そしてレポートや論文書きは、学問の基本だということを自覚させる。

第二。研究志向のレポートや論文の書き方を優先し

て教えること。資料の取り扱いなどを通じて、実証の精神をたたき込むこと。

その上で余力があれば、主観的な文章、ノン・アカデミックな、社会の文章にも歩を進めてよいのではないか。

表現論を学んで



中国語学科三年 小川みずき

私が表現論という授業を取ろうと思ったのにはいくつかの理由があったが、主なものを挙げるとすれば次の二つになるだろう。一つには、レ

ポートや卒業論文の正しい書き方を学びたかったからである。特に卒業論文は、大学を卒業する際には必ず書かなければならないものであるにもかかわらず、私はそれを一体どのように書いたらよいのかさっぱりわからなかった。だからぜひここで、それらの正しい書き方をマスターしようと思ったのである。二つ目に、私は中国語を専門として学んでいるが、中国語から日

本語に訳すときに、かなり苦しめられたという経験があったのだ。もちろんこれは語学力の問題もあるだろう。しかし、意味は大体分かっているのにそれが上手い日本語に訳せないということがよくあり、この授業を受けることで、言葉の使い方という点で何か参考になることがあるかもしれないと思ったのである。

以上の理由でこの授業を取って見たのだが、実際に受けてみるとレポートや卒論の書き方、日本語の言い回しといったことだけでなく、文章についても学ぶことが多かったように思える。これは新しい発見だった。普段、新聞や小説などの何気なく読んでいる文の中には主観的文章と客観的文章があり、そしてまたレポートも書く内容によって色々な種類に分類される――。言われてみれば当たり前のことなのかもしれないが、今までただ漠然と文章を読みレポートを書いてきた私にとっては、こういった知識が得られたのも大きな収穫だった。そして、そういったことを踏まえた上でレポートや卒論の書き方を学んでいくのだ。

この授業は先生が講義するだけでなく、実際に自分

で文章を書いてみるが多い。また、各自が書いた文章を皆で読み、良い点や改善すべき点を指摘し合うことも頻繁に行われるが、これは私にとってすごく面白く、意義のあることだった。文章というのは本当に人それぞれで、他の人が書いたものを読んで気付けられることが実に多いのだ。一つの同じ物事に対してでも、人によっては自分と全く違う視点から書いていたりする。前期は、主観文と客観文に始まり、長文の要約や感想文、後期に入ってから小論文、と様々な文を書き、その都度他の人の文章を読んできたが、いつも何かしらの発見があり、驚いたり感心させられたりした。そしてそれは、これから自分が書いていく文章の書き方の幅を広げることもなるだろう。

文章による表現というのは、ただ話すよりもずっと難しい。語彙力だけでなく、日本語の正確さも要求される。表現論の授業を通して、そして今回この文を書くにあたってそのことを痛感した。この授業から得たものを土台にして、これからさらに自分の「ものを書く力」を磨いていきたいと思っている。

多文化共存・共動を学ぶ愉しさ

— 学生がもつ力を引き出すために —

外国語学部講師 正宗 鈴香



新たな「教養科目」の試みへ

私が担当している多文化共存・共動は、その科目名と日本人学生と留学生と一緒に活動するということからいろいろな履修動機を持った学生が集まってきておもしろい。「共存や共動ということばに興味をもった」「留学生と深く話し合ってみたい」「いろんな意見を聞いてみたい」「留学するので外国の人と話すとはどういうことか体験しておきたい」「留学から帰って自分がどう変わったか試してみたい」「引っ込み思案の自分を变えたい」「いろんな国の人や文化について知りたい」「幼少時代外国で育った自分のアイデンティティを探し

にきた」「自分の考えがどれだけ他人（外国人）に通じるか知りたい」「自分を試したい」「日本語が上手になりたい」「日本人と話してみたい」などなど。こういった一人一人の思いがあつてクラスは活気を帯び、また積極的に活動する学生は自らの力によつて学ぶ力を深めていくのが分かる。私は、これら一人一人の学習動機を大切にしている。その理由は、教師が設定する授業の教育目標と個々の学習目標が結びついたときに、より深い自己発見、自己発展をしていくのではないかと考えるからである。

麗澤大学は、国際色豊かなキャンパスというイメージ

ジが強い。これは、私の授業を履修する学生もよく言うことである。しかし一方で、日本人学生からは「留学生と話がしてみたい」、留学生からは「日本人と話す機会を得たい」という声が後を絶たない。つまり、いくら同じ場所に様々な国からの学生がいたとしても、それは場所を共有しているにすぎず、共生していることにはならないということである。キャンパスに限らず社会の中でも同じことであろう。人間の共生というのはいろいろな解釈があるが、私はお互いが意識して共に活動を行うことで、時には困惑や誤解、面倒な思い、不愉快な思いをしながらも、その先にある協調性、協働性を見出していくことではないかと考えている。

多文化共存・共働の授業は、まさしくそのような日本人学生と留学生が混在している環境を利用し、グローバル社会で通用する力を実践的につけてもらおうと開講した科目である。また日本人学生と留学生が共に活動する授業スタイルという新しい試みでもある。授業の目標を一言でいうと、思考し、さまざまなモノサシで判断できる力を身につけ、協力的態度でもって活

動し、新しいものを創造する力をつけるということになる。さきほど実践的と書いたが、ここでいう実践とは地域に出てフィールドワークをするということではない。教室の中での活動を通して周りの人たちの反応を感じ、より納得できるコミュニケーション方法を自分で見つけていく力をつける場という意味である。そういった意味では、先にも触れたが、学生たちはいつも楽しい思いをしているわけではない。日本人、留学生ともに混乱、困惑、苛立ち、不愉快な思いをしながらも活動をし、それを乗り越えて課題を達成すべく、新しいものを作り出していくのである。

自己の「気づき」をねらいとした授業展開

京都大学の大島清先生は「脳のハードウェアに閉じ込められた知識が正常に利用されなければ、その知識を人間の『知能』と呼ぶことはできない。知能は教養に通じる。教養とは丸暗記していることではない。何かのヒントを手がかりに、みずから能動的に資料を探し求めて未知に挑戦する姿勢である」（引用・大島清

『子供の脳力は9歳までの育て方で決まる』海竜社、一九九九）と言っておられる。

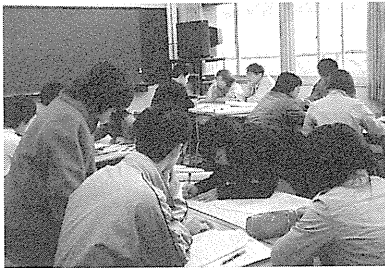
この授業では、人間の活動には必ず感性が伴うことを重要視している。感性を磨きそれを自分の言葉にしていくことで活動内での自分のあり方を考えることと、新しい発想を自分（達）で工夫し考え出していくことを兼ね備えた活動を模索してきた。その結果、問題解決型ディスカッション活動を行うなかでの「気付き」のある活動にたどりついた。

また、この時間は知識を与えられる時間ではなく、自分がそれまでに身につけた知識をいかに活用するか、その方法を見つけ出す時間としている。したがって、課題を解決するために調べてくることはあえてさせない。あくまでも自分が持つ知識、経験、考えなどをフルに駆使させ、どのくらい活動が進めていけるのかを実感させるようにしている。このように、自己の気付きを通して自分が持つ知識をいかに活用し新しい考えを生み出せるかに挑戦する姿勢を養う授業展開を目指している。

学生中心のクラス活動

九十分の授業は、最初に授業の説明、最後に活動中に感じたこと、考えたこと、自分の課題などを静かにふりかえり書きとめておく時間（十分程度）以外は、学生たちが自由に活動する時間にあてられる。授業風景は、日本人学生と留学生が四人のグループになって額を寄せ合ってディスカッションを行っている。最初は自分の意見を言うだけなので和気藹々としているが、そのうちに話が進まず顔をしかめる学生、必死に言葉を捜す学生、わかってもらえていないか相手の反応を気にしながら説明する学生、雄弁に話を進めて満足そうな学生、控えめながらもしっかりと自分の意見を言う学生、考え込んでだまってしまう学生、と様々な表情が表れる。授業が終ると「疲れた」「今日は頭使った」「日本語は難しい」という声があちこちから上がる。

学生とは、ディスカッション活動に入る前に次のような約束をする。一人一人が積極的にディスカッションを引っ張っていくこと、グループでそれぞれが多角的な意見を出すこと、お互いの意見を認め合えるため



授業の一幕

にその根拠を明確にすること、課題解決に向けてグループの様々な意見を収束して一つの結論を出すこと、他のグループのメンバーに理解してもらうために論理的展開のある発表をすること、発表後の質疑に答えられるようグループでの意見を深めておくこと、である。

この約束をしたあとは、進行の仕方、グループ内での問題発生時の解決方法などは学生たちに完全に委ねる。これら一つ一つを自分たちで考え、やり遂げることに意味があるからである。教師が口を出すのは簡単である。しかし、自分の力で自信を持って活動させる

ために時間を与え見守ること
も大切である。しかしもちろん、私の出番もある。それは、ディスカッション過程で、さらに考えを深める段階である。そこでは私独特の「どうして?」「これらの(抽象的な)語彙は具体的に何を指しているのか説明して」「これ

らの関係は?」といった質問がとぶ。この質問攻めに対しては、ある学生の学期末の授業評価表に「先生のツッコミは世界一でした!」と書かれてしまった。

授業を通じて学んだもの

授業を通じて、学生たちはさまざまな興味深い反応を示す。例えば、「意見を自由に言う」ということに対する意見。ある学生は、「意見は自由に言うもので、お互いその意見を尊重することに意味があると思う。文化が違うから当然意見も違う。それはそれでいいではないか、一つにする必要はない、それは尊重にならない」といったもの。しかし、活動を進めるに従って、意見の尊重とは「そうですか」と意見をそのままにしておくのではなく、それをきっかけにして、何かを作り出すことでもあることを学んでくれたのではないかと思う。これを書いた学生と今でも話す機会があるのだが、言葉の節々にそういった「気付き」があったことが想像される。

また他に、日本人の特有の癖として「笑い」がある

ことは専門家からも指摘されることであるが、ある日本人学生が発表の準備不足を笑いと冗談で逃げようとした結果、発表を聞いていた一人の中国の学生から猛烈な反撃を受けた。発表の場合なのにどうして不真面目な態度をとるのか、そんないい加減な発表なのにどうして笑えるのか、真剣に聞いている人がいるのだからどうしてきちんと説明する努力をしないのか、といったことを皆の前ではつきり言葉にして言われた。この日本人学生も周りの日本人学生も日本人の間では許される行為でも外国ではそうではないのだと感じるところがあつたようである。

また、ある留学生がグループを替えてほしいと言ってきたことがある。理由は、一人の日本人学生が横柄な態度で話をする、私は謙虚な日本人が好きだからそのような日本人と話したいのだというものだった。しかし、あえて私はその学生に留学している意味を考え、るように言い、そのグループで活動させた。留学とは、知識を得るのはもちろんだが、これからグローバル社会で活躍していくための力をつける貴重な機会でもある。

る。グローバル社会では自分の考えや価値観や感覚とほど遠い様々なタイプの人間と接していかなければならないわけで、そんな人とも共に活動をして結果を出さなければならぬ。この学生は、学期の最後に「今まで留学の目的は日本語が上手になることだと思っていたが、嫌な人とも一緒に活動できる力をつけることが留学の持つ意味なのかもしれない」と言ってくれてほっとした記憶がある。

これらの例は、まさしく「多文化社会」での活動体験したものであり、国際感覚を感じた瞬間と言えるのではないかと思う。こういったことが学べる場所は、今や外国に行かなくても日本にでも結構あるものである。しかし同時に、「このクラスで学んだことは、外国人との活動に限ったことではない。日本人でもそれぞれが違うし、その違いを分かった上で活動するという意味では同じだと思う」といった意見が非常に多い。そういった意味では、これは人間として生きていく上で必要な「教養」といつてもいいのかもしれない。ほとんどの学生は授業の最後には「おもしろかった」「今

後役に立ちそうだ」「頭を使うということがわかったよ
うな気がする」と肯定的な評価をしてくれている。「考
える」ことを麗澤大学の学生は嫌がらずにでき、それ
を楽しむ余裕も生まれてくるようだ。

最後に、留学生と日本人といった価値観や言動が違
った学生たちが切磋琢磨して活動する姿を私はすばら
しいと思う。真剣に取り組む学生たちの姿を見せても
らって、刺激をうけながら共に学ぶ場を得られること
に感謝したい。

多文化共存・共動の授業を受けて

英語学科四年 猪股来未



「多文化共存・共動」の授業を受
けたのは今から二年前のことです。
この授業で、今まで全然気づかなか
ったことに気づくことができました。

その一つが常識についてです。今まで、自分は最低
限、常識をもっていると思っていました。常識という
のは国によって多少違うものの、基本はどこへ行つて

も通用すると無意識に感じていました。しかし、文化
によって、私たちが常識だと思っていた行為が他では
非常識だったり、非常識だと思いう行為が逆によいとさ
れている例がたくさん存在し、しかも両方の言い分が
共に理にかなっていることに気づかされました。

この常識の考え方の違いは、実際に、その一年後に
留学した際に頻繁に経験しました。寮の掃除のことな
ど何気ない日常のことでしたが、もし、自分の最低限
の常識が世界共通だと考えたままだったら、ただ、相
手を非常識な人だと勝手に思い、対立したまままで終わ
ってしまったかもしれないかもしれません。でも一歩退いて、
その違いを考えてみると、今まで相手の、そして自分
の見えなかった部分が見えてくるようになりました。

毎回九十分間の授業の中で、文化の接し方を考え、
自分の文化を見つめ直すきっかけが作れたことは、一
番大きな事でした。私たちの周りには色々な文化が存
在しています。この事は、既に多文化社会の中で生活
している私たちにとって、今も、そしてこれからも大
切に考えなければならぬものだと思強く感じました。

芸術文化論を学ぶ愉しさ

外国語学部非常勤講師 金光陽子



イギリスの文化批評家レイモンド・ウィリアムズによれば、もともと農作物の成長過程を意味していた「文化 (culture)」という言葉は、十六世紀以降、次第に人間の成長過程を意味するものへと広がり、さらに十九世紀には、「教養」という意味が付与されるようになったという。たとえば、『教養と無秩序 (Culture and Anarchy)』(一八六九)を書いた十九世紀ヴィクトリア朝の文芸批評家マシュー・アーンホルドは、「文化」を「教養」としてとらえ、「これまで考えられ、語られてきた最高のもの」と定義している。

では、ここで、「芸術文化論 (Art and Culture)」につ

いて考えてみよう。十九世紀のアーンホルド流の定義のつとれば、「芸術文化論」は、「芸術『教養』論」ということになるのかもしれない。あるいは、「これまで考えられ、語られてきた最高のもの『論』」というふうに訳すこともできるのかもしれない。

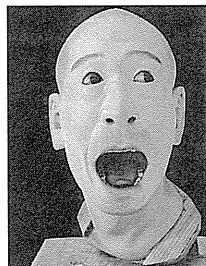
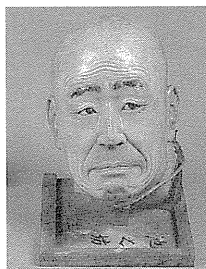
しかしながら、ここで、あるギャップに頭を抱えてしまう。私は昨年から、最初の授業の時に、「文化」と聞いて何をイメージするのか、学生に簡単なアンケートを行っている。「あなたにとって『文化』とは何ですか? 具体的な例を挙げて、あなたなりに自由に説明してください」と書かれた用紙を学生に配り、自由に

記述してもらおうといったものだ。すると、文化を何かの「芸術作品」と結びつけて考えたり、「最高のもの」「偉大なもの」「高尚なもの」としてイメージしたりする学生はほとんどいないことに気づく。「漫画・アニメ」「ギャルのルーズ・ソックス」「ヒップ・ホップ」といったものから、「お祭り」「おせち」といった昔から受け継がれてきたものまで、そのイメージはさまざまであることがわかる。これらの回答からわかることは、学生にとって文化とは、身のまわりのものや、日常生活に結びついたものであるということだ。

現在、私は「芸術文化論」では、ヴィクトリア朝時代の読み物を英語で読んだり、西洋絵画の歴史全般について講義したりしている。しかしながら、学生が日々接しているイメージ情報（画像）は、テレビ、アニメ、ゲーム、カメラつきケータイなどによる最新の複製イメージが圧倒的に占めるわけであり、そうした複製イメージ情報を日々物凄い速さで処理しながら生きていく彼らに、「これまで考えられ、語られてきた最高のもの」とは何かを十九世紀的に論じたり、「西洋絵

画の殿堂」を力説したりしても、縁遠い昔の話で、心に響くわけがない。しかしながら、古典的なものも知ってもらいたいし、オリジナルのよさも知ってもらいたい。では、どうするか？

美術史学は、古い歴史的資料と向きあう以上、ある種のアナクロニズムでもある。しかしながら、歴史的素材を用いながらも、それが、学生たちが置かれている「いま・ここ」にどのようにかかわりあっているかを自らが考え、彼らの知的好奇心に火がつけられるように、日々、私は教材探しや授業のデザインをめぐって模索している。以下は、今年度開講中の「芸術文化論」の試行錯誤の断片的スケッチである。先月の授業風景なのだが、記憶がうすれる前に、日記風に二つばかり書きとめておくことにしたい。



上：松本喜三郎作、1871年
大阪歴史博物館蔵

下：江島栄次郎作、1935年
熊本市立熊本博物館蔵

二〇〇四年・十月八日（金）

先週、大阪歴史博物館で大々的に開催している「生人形（いきにんぎょう）」と松本喜三郎展」を観るために、大阪まで足を運んだのだが、あまりの展示内容の凄さに、麗澤大学の学生たちにもその内容を伝えたく思い、今日は、ルネサンスのことを話す予定を変更して、「生人形」をテーマに扱うことにした。生人形とは、幕末から明治の大転換期に、民衆の間で爆発的な人気を博した、本物そっくりにつくられた細工物のことである。しかしながら、それが見世物興行での展示を目的につくられたゆえに、現代まで受け継がれることなく衰退し、日本美術史の記述からは消されてしまっている。

今日は、できるだけ多くの生人形の写真スライドを用意し、大阪での展覧会を実際に観た感想を交えながら、スライド一枚一枚をスクリーンに投影して解説を加えていった。スライドが入れかわるごとに、「えー！」「わー！」と驚きの声やどよめきが沸きあがる。皮肉なことに、彼らには、これまでの芸術文化論で扱ってき

たどの西洋絵画よりも、今回の授業で見せた映像の方が何倍も何十倍もインパクトがあったようだ。スライド解説後に書いてもらった感想を読むと、なかには、生人形の技術を、現在、若者に人気のある「フィギュア」などの食玩や「レストランにディスプレイされているメニューの実物大の見本（レプリカ）」に受け継がれていることを見いだすものもいくつかあり、学生の自由な着眼点はやはり面白い。どうやら大阪まで足を運んだ甲斐があったようだ。

二〇〇四年・十月十五日（金）

今日は、ルネサンスに誕生した遠近法と鏡の話をしたあと、北方ルネサンスの画家デューラーの自画像を何点か比較する作業に取り組んでもらった。デューラーが青年期に鏡を用いて描いた四枚の自画像（十三歳、二十二歳、二十六歳、二十八歳の自画像）をスクリーンに投影し、学生はじっくり観察しながら、相違点と類似点を含め、気づいた点をその場で文章にするというものだ。

鏡を見ながら自分を描くということは、自己を客体

化することであり、自己を他者であるかのように提示することでもある（自画像≡自己の他者化）。鏡のなかの私を見ることは、他人にどう見られているのかという評価（つまり他人の視線）や、その評価に対する自分自身の反応を映し出していることでもある。現在、三鷹市民ギャラリーで展覧会が開催されている写真家・牛腸茂雄のポートレイト写真の紹介も織り交ぜながら、「まなざし」の話をした。たんに図版を比較するだけでなく、学生にはデジカメやカメラつきケータイでセルフ・ポートレイトを撮影してもらい、「見る自分」「見られる自分」について省察し、発表してもらおう課題を出しても面白かったかもしれない。



上：デューラー作、1484年
《13歳の自画像》
下：デューラー作、1498年
《26歳の自画像》

「芸術っていうから、高校までやっていた美術のよ
うなクラスだと思ったら、ものすごく幅の広いものだ
った。広い目で見れるようになったかな」。「芸術を理
論づけて見ることはなかったが、とても興味深く取り
組めました。取り上げている内容も、面白く、実際に
自分で調べた物もあります」。これらの感想は、学期末
に学生に記入してもらっているアンケートから抜粋し
た、生の声である。アンケートをとると、「楽しかった」
「興味深かった」というものが多いが、なかには、「実
習など実際に体験する機会があれば、おもしろいと思
う」という意見もある。これは今後の課題にしたい。

私自身、一年に一回、十九世紀関係の資料収集にロ
ンドンにかけている。その際、できるだけ多くの埋
もれた資料や珍しい情報を集め、授業に反映させてい
るし、日本で開催中のユニークな展覧会の情報なども、
できるだけ授業中に紹介しようと努めてきた。しかし
ながら、教室という空間で、PowerPointやDVDなどの
視聴覚教材をどんなに駆使しても、それはシミュレー
ションでしかなく、実際に美術館に行つてオリジナル

*
*
*

を見て、現場のスタッフ（アーティストやキュレーター）と対話するという経験とは明らかに違う。教室での講義内容と「実際に体験する機会」をどう関連づけるか——それが、今、私の課題になっている。

今、学生たちは二十一世紀を生きている。十九世紀のアーノルドは文化を「これまで考えられ、語られてきた最高のもの」と考えたが、学生たちがイメージする文化とは、そんな固定的なものではなく、多種多様で、つねに変化している。その意味で、私は「芸術文化論」という授業科目名をとっても気に入っている。たんなる「西洋絵画の歴史」という直線的な枠組みではなく、学生たちが置かれている「いま・ここ」の文化状況を考えながら、芸術とは何かを考え、アプローチできるからだ。私は授業を通して、できるだけ学生たちには知的好奇心を広げてもらい、面白いことを考えてほしいと思っている。でも、実は、知的好奇心にまします火がついているのは、二十一世紀の真つ只中を生きる彼らから刺激を受けている私自身なのかもしれない。そんなことを考えながら、私は毎週、授業をし

ている。

美術との触れ方が変わった

英語学科二年 青木郁予



私は今年の春から、金光先生の芸術文化論を履修している。金曜の五限で週末の楽しみを目前にしたこの週の終わりの最後の時間でも、私にとって待ち遠しい授業になっている。この授業を受ける前の私にとって、美術（アート）とは普段感じるものの中で自分では表現できないモノを、他の人（アーティスト）によって表現されたものに触れて、共感をもったり、または自分では全く想像も出来ないようなモノが表現されたものに触れ、刺激を受けたりする、もはや自己満足的なものであった。それに、美術作品に対して知識をもつと、作品を見たときに素直に感じるものが薄れるのではないかと心配だった。けれど、反対にこの授業で沢山のヴィジュアルを観る事を通して、多くの事を学んだし、私の美術作品への見方もかなり

変わったと思う。

まず授業では、毎回必ず何かしら美術作品、もしくはあるアーティストや作品について特集された映像を見る。先生は、実際に絵などを観ながら、その作品が何を表していたのかを説明するために、そのアーティストの事を紹介したり、その時代の事を他のヴィジュアルを使って説明したり、その作品やアーティストはその時代にはこう思われていて、今はこう観られているとか、先生はこう観ているとか、私たちはどう思う？とか、そのような事を口頭で投げかけてくる。このような授業は楽しいし、実際にヴィジュアルを観てその時に入る情報と自分のインスピレーションがその作品やアーティストへの関心を与え、期末レポートの時にはさらに調べ、自分のその作品に対する見方を文章にする助けとなったことは間違いない。

次に、そのような作業（作品を観て、その背景にあるものを調べて作品への理解を高めたり、自分なりの見方を発見したりすること）から、私が学んだことがある。それは、作品の中にあるキーワードに耳を傾け、

そこから色々調べてみる⇨開拓していくことの重要性だ。私は、前期の期末レポートで、『ふしぎの国のアリス』の作者であるルイス・キャロルが撮った少女がこじきの格好をした写真について、当時の世間の声とは違う印象を受け、彼とその時代について調べてみた。なぜ、こじきの格好だったのか。その写真を見て、彼が少女に対し偏愛を抱いていたと言う人が少なくなかったが、私は違うと思った。調べると、当時のイギリスは産業などが著しく発展する一方、街には貧困によるストリートチルドレンも多くなったというのがわかった。私はその事実から、ルイス・キャロルがそのような社会の哀れさを訴えていたと解釈した。それが正しいかどうかは定かではないが、私は自分なりにその道筋を辿ったのが楽しかったし、美術以外でもこのような作業は大事だと感じた。

もつとここには書ききれない程の楽しい発見を、この授業で私は得てきたが、何よりも美術との触れ方が変わったことで、私は以前よりも物事を観て考えることが面白くなった。

麗澤大での四十五年間

外国語学部教授 多田 舜保



はじめに

現代は人類の歴史の中でも、科学技術が最も急速に
進歩していて、私たち人間の生活にも大きな恩恵や影
響をもたらしている。したがって日々の生活を科学的
に暮らすように努めることはたいへん重要である。私
自身、麗澤大学に勤めはじめてから早四十五年間余が
過ぎた。ちょうど、本学が四年制としてスタートした
一九五九年度（昭和三十四年度）からである。そのう
ち教員としてはちょうど四十年となる。主として自然
科学に関係した科目を担当してきた。

本学の歴史、変遷等については、幾つかの本学周年

記念誌（『麗澤大学の三十年』、『資料・寮生活二十五年』、
『課外活動二十年誌』）の編集副委員長として携わった
関係でよく理解しているつもりである。

この度、『麗澤教育』編集委員会から教養、基礎科目
を担当している者として麗澤教育に関して自由に執筆
をするよう依頼され、思い付くままに四十五年間、私
が関係してきたことがらに基づき所感を書いてみたい。

授業へのとりくみ

授業は、私の場合、先輩教授の恩師、故岡田晃先生
の後をうけて専門の化学に関連した自然科学分野の科

目をずっと担当してきた。現在は「生活科学」、「教養ゼミナール」、「現代日本事情」等を担当している。外国語、国際経済とは直接関係ない科目であり、いわゆる一般教養科目である。私が学生時代、学生紛争の原因の一つとして一般教養科目の内容や開設の是非が取り上げられた関係で、私なりにどのような内容が良いか真剣に考えながら対処してきた。本学に日本語学科ができた一九八八年まで、二号棟二〇七教室は学生化学実験室であって、学生に年間十数回、化学実験を課した。自然科学にとって実験は極めて大切であり、他の文科系大学で学生化学実験は殆ど行われてなく、従ってその成果を日本化学会の化学教育部門で報告したこともある。全国の文科系大学の化学教育担当者から羨ましがられたものである。当時、研究室には最新鋭のX線回折装置があり、他の理工系大学や大企業の実験室から測定を依頼されたことも時々あった。

研究は主として繊維に関連したことがらを行い、ほぼ毎年日本化学会等で成果を報告したりした。特許も二件承認され公告された。学生化学実験室が無くなっ

ても、その後数年間はパソコンで当時最新のソフトを使用して実験を模擬体験して授業をすすめたものである。

専門の学会等を通じて、国内外の学者とも接することができた。その中で私の一生のうち、特に大きな出会いは、世界で過去唯一ノーベル賞を単独二度受賞（化学賞、平和賞）したライナス・ポーリング博士との出会いである。彼が道徳科学の重要性を化学のテキストに著していることに注目したのがきっかけである。ポーリング博士とは何度か親しく会談、接することができて、彼の伝記をわが国で初めて出版したり、彼に関係した調査、研究をして結果を日本科学史学会等で報告することもできた。彼の業績や人間性は本当に素晴らしく、その内容については本学の紀要にも十数回報告してきた。授業でも常に彼の人間性を紹介し、人の参考にするよう呼びかけてきた。ポーリング博士は十年前に逝去されたが、その後、彼の生涯や業績等に関して「二十世紀とライナス・ポーリング展」が世界各地でオレゴン州立大学、ポーリング家、SGI



ボーリング科学医学研究所創立20周年記念パーティーでの
ボーリング博士と筆者（1993・5・29）

（創価学会インターナショナル）の共催で開催され、約
百二十万人もの見学者に多大な感銘を与えた。

自然界に生きる生物の一種である人間が、自然科学
的な考えをもつことはたいへん重要であるとの理念と
使命のもとに、さまざまな視野から考察して授業を展
開してきた。その成果がどの程度、学生、卒業生諸君
に役立ってきたかよく分からない点もあるが、現在の

著しい科学の進歩の時代に自然科学的な考えはそれな
りに効果があったであろうと自己満足しているしだい
である。

学生部での経験

授業以外に私が関係してきたことがらに、約二十三
年間の学生部業務の兼務があった。年数が進むととも
にたいへんやり甲斐のある仕事と思うようになった。
教室や授業では見られない学生の本性と身近に接する
ことができ、こちらにもたいへん勉強になることが多
かった。学業成績の優秀な学生と接することも多いが、
そうでなくて個性の著しい学生とも接することが多い。
時には事件を起こした学生の事後処理のため警察に行
ったり、交通事故や急性アルコール中毒で救急車で運
ばれた病院に深夜赴いたことも何度かある。中には死
亡した学生もあった。学生部での経験が深まるにつれ、
私なりに事故、事件が起きた場合のその緊急対処とし
て、先ず第一にこの学生の親だつたらどう対処される
かを考え、第二に大学、教員としてどうすべきかを考

え、第三に一般社会の見地から見た場合どう対処すべきかを考え、これらを総合して物事に当たるようにした。さらに、これらの考えをもとに予防にもいろいろと努力した結果、学生部で責任ある立場になつての十数年間は、学生の死亡者は無く、新聞に載るような事故、事件も皆無で過ごすことができた。対処が良く学生の生命を救い親から深謝されたこともあつた。学生部の基本的な考えとして大切なことであり、今後も受け継いでもらえたらと思う。

十数年前は、千葉県に約三十ある私立大学の中で、留学生の数は本学が最も多く、千葉県学生部連絡協議会で本学の留学生への対処は注目されたものである。したがつてその内容を県内で報告後、一九九四年七月には、全国私立大学の学生部関係の集まりである「全国学生生活指導部課長担当者研修会」で留学生の対処について講演したこともあつた。

学生部兼務時代の改革として、反対意見もあつたが、寮担当の頃に相部屋を個室とユニットルームへ、学生主事の頃に全寮制度を変え通学生も受け入れる制度の

導入や学生相談室の新設、学生部長の頃に学生部就職課を独立して就職部の設置、学生食堂の運営を学外の食産業大手会社に委託等が行われたが、今になつては良かつたと思う。

麗澤大学が一九五九年に短期大学から四年制になつてから今年は四十六年目になる。その間、卒業した学生は八六八九名となる（二〇〇四年九月現在）。卒業生の中には、各種有名企業の重役やリーダー、国や地方の公務員、本学園や他大学、高校、中学等の教員、およびその他いろいろな職業を活かして国内外で活躍し社会に貢献している方が多数おられる。具体的に多くの方の事例をあげることができ、紙面の関係で省略することとする。また、卒業生同士で結婚して幸せな家族生活をしている方も多数ある。そのうち何組かは頼まれて媒酌人をさせていただいたカップルもある。

学外組織での経験

本学での業務以外に次のようなことにも携わつてきて、それらの中で本学に参考になることはできるだけ

取り入れるようにしてきた。

公務員試験協会の非常勤講師として、公務員試験のための教養講座を約三十年間、関東の大学約二十大学で講義をしてきた。それらの大学のキャンパス、雰囲気や大学生の一部も垣間見てきた。また、ラジオの文化放送の講座も数年間担当して放送業界の一端を見ることもできた。

近くの流山にある東洋女子短期大学で数年間非常勤講師として「環境と人間」という科目を講義してきた。大学生活を二年間ということ而努力している女子学生も見て、ある意味では感心したものである。

一九九四年から、法人からの推薦で約十年間、国際的ボランティア団体であるライオンズクラブに在籍して奉仕活動等に貢献する機会もいただいた。二〇〇一年四月には、本学キャンパスで千葉県全域のライオンズクラブメンバー約二千人が集まる年次大会や、海外十数カ国から来日した若者のサマーキャンプを二泊三日で行うこともできた。関係者から、麗澤のキャンパスの素晴らしさ、教育理念にはたいへん関心と良い評

価をいただいた。その後、お子さんやお孫さんが麗澤に入学されたとの話もいくつか聞いた。二〇〇二年七月に大阪で国際大会が、日本のライオンズクラブ五十年を記念して盛大に行われたが、世界各国クラブのパワーの凄さを感じた。世界にはライオンズクラブのほか、ロータリークラブのように熱心な奉仕活動をしている人々が多数おられることに心強さを感じた。本学学生も社会人になって、このような組織で活躍するのも意義深いと考え期待したい。

ここ十数年間、財団法人清和国际留学生奨学会の役員も担当していて、いくつかの大学の留学生の動向もある程度知ることができている。この団体は、ニューロング株式会社近藤清吉会長が留学生のための奨学金をということで設置されたもので、本学の留学生も毎年二名が奨学生に選ばれている。関係役員の中にはわが国の教育界で大活躍されておられる先生方も何名かおられ、いろいろと勉強になった。

この他、柏市の二、三の審議会の会長や委員等も十数年間つとめたり、PTA役員も数年間担当して、つ

いにて雑談で地域の麗澤への感想や評価もいろいろと聞いてきた。全般的には評価はたいへん高く、嬉しく感じたものである。時には厳しい批判等も聞いた。内容によつては、直ぐに学園の関係当局に知らせるようにもした。多数の学生が、地域社会でいろいろなかわりをもつていて、貢献したりお世話になつているところをあらためて知らされた。

おわりに

以上、麗澤大での四十五年間を思いつくままに書かせていただいた。編集委員会が求められたテーマからは外れた部分も多いかと思うが、お許しいただきたい。私も間もなく定年退職となる。私自身の未熟さで充分お役に立てなかつたり、ご迷惑をおかけしたことも多々あつたかと思うが、ともかくこの素晴らしい麗澤の園の中で、ずっと病氣知らずで健康に過ごせたことに感謝の気持ちでいっぱいである。

お世話になつた歴代理事長はじめ先輩、同輩、後輩の皆様から御礼を申し上げる。いろいろと支援し

てくれた親戚や家族にも感謝したい。

最近、入学式の日にはキャンパス内で本学の卒業生が新入生と一緒にいて、『先生、私の子供です。この度、〇〇学科に入りました。』と紹介を受けることが時々ある。教員として本当に嬉しい。今の学生がいずれ親になられ、このように子供さんを母校におくつてくれるようなさらに立派な麗澤大学となることを念じている。私の子供も三名とも麗澤高校で学ばせていただき、そして次男は本学国際経済学部二期生としても学ばせていただき、麗澤との繋がりをあらためて喜び深く感謝しているしだいである。

麗澤大学は、高い教育理念と緑木多いキャンパス、教育スタッフも研究教育業務の秀でた先生や若い優秀な先生もさらに増え、また、職員の方も真面目で徳性高い人が多く、今後の飛躍的な発展が期待できたいへん楽しみである。在校生、卒業生、教職員の皆様の一層のご活躍とご多幸と、麗澤大学の益々のご発展および世界平和をお祈りしながらペンを置かせていただくこととする。

厳なれども威ならず

名誉教授 池田裕



昭和十七年三月十八日付の「朝日新聞」の広告欄に「東亜専門学校」の生徒募集の件が掲載されていたのを見つけたAさんは、さっそく志願すべく募集要項を取り寄せた。それによると、学科は「支那科」と「南洋科」で定員はそれぞれ二百名ということであった。

Aさんは「支那科」を志願した。入学試験は、東京大学内の教室を借りて実施された。試験問題はさして難しくはなかったが、時局柄、「わが日本はなぜ大東亜戦争を始めたのか」とかいうような問題であった。いわゆる「小論文」であった。

Aさんは合格し、入学するべく四月初旬に常磐線北

小金駅に降り立った。すると見知らぬ学生服を着たのが近寄ってきて、「東亜専門学校へお出でですか」と尋ねた。Aさんは「はい、そうです」と答えた。すると、その見知らぬ学生服が「それではお荷物をお預りしましょう」と言うや否やAさんの手から取り上げてリヤカーに積み込んでしまった。やや心配な気がしないでもなかったが大したものも入っていない荷物だったので、まあいいやと言ったような気持で、その駅頭から約三キロの道のりをぶらぶらと歩いて校門前に到着したら、その受付にはもう荷物が先に届いていた。それを受け取って案内された寮（当時は、「号舎」と言っ

ていた)の部屋に落ち着いた。

東亜専門学校は、全寮制を施していた。Aさんは、きつと軍隊生活まがいの厳しい日常生活を強制されるのではなからうか?と、ある種の不安にかられていた。

ということは、具体的に言うくと、朝の起床時にはラッパかなんかで、たたき起こされ、「起床!!」と怒鳴られて、あわてふためいて布団をたたんで、点呼、一、二、三……ということになるのではなからうか、という不安である。Aさんは、もちろんそんなことを覚悟してその夜は床に就いた。

さて、翌朝、目を覚ましたが起床ラッパもなければ、「起きろ!!」の怒声もない。Aさんはそれをいいことにしてもう一眠りしようと思ひ布団の中にもぐり込んだ。初めての朝の緊張感もあつて深い眠りの淵に落ち込むことはなかったが、何となくウツラウツラしていると、同室の先輩たちがそろりそろりと起き出ししている気配がした。決して「起床!!」を促すようなムードではない。むしろゆつくりしていなさい、という感じさえする。

これはおかしいぞ。とAさんは思ったが、尋ねるわけにもいかなないので、みの虫のように布団の中に首をつっこんでいた。先輩たちは各自の布団を片づけ終わるとどこかへ行ってしまった。散歩にでも行ったんだろう、くらしいの気持ちでAさんは、なおも布団のぬくもりを貪^{むさぼ}っていた。

三十分ほどたった頃、一人の先輩が、「朝食です。どうぞ食べてください」と言つて枕許に御飯、みそ汁、目玉やき、香の物などのモーニングセットをおいていた。「いやに親切な先輩だなあ」と思いながら丼飯をパクつき、みそ汁をすすり、目玉やきをつつき、たくあんを嚙^かつた。

これがAさんの東亜専門学校の初日であった。

入学式があつた。大講堂(現在の廣池千九郎記念講堂)にぞろぞろ入つて行つた。国歌斉唱に始まり、やがて校長・廣池千英先生の告辞になつた。小柄ながら、ある種の威厳をそなえておられる。真つ黒な眼鏡が印象的であつた。断片的にAさんが覚えている告辞は、次のようなものである。

「私の父、廣池千九郎は万巻の書を読破し、あらゆる難行、苦行を積み重ね、聖者のような途を踏破して、この道徳科学（モラロジー）を樹立した」「教育とは、仁愛の精神を植えつけることだ」などなどである。

廣池校長先生は、新入生の顔と姓名をきちんと記憶しておられた。キャンパス内では常に和服（袴も着ける）を召しておられた。このお姿がまたある種の風格を醸し出していった。そして新入生に出会うと「君は○君だね」と声をかけられることがよくあった。

Aさんは、それから寮内である不思議を発見した。それは、便所、洗面所、玄関などがいつもキレイに掃除されていることである。当番らしいものもないし、外から業者が来て掃除している様子もない。この不思議なことが一か月ほどたつてやっとわかった。それはこういうこと。

ある朝、Aさんは、いつもより三十分ほど早く目がさめて起床した。便所へ行った。するとそこに一人の先輩が黙々として掃除しておられる姿を目撃した。これは失礼、と思ったAさんは、そこでは用をたさずに

別の便所へまわった。と、そこにも誰かが掃除している姿があった。

ここに至ってやっとAさんの疑問は氷解した。便所を始め、公共の場は、誰かがいつのまにか掃除をしているということがわかった。

考えてみたら、教室もいつもキレイになっていた。いつのまにか、誰かが掃除していたのであった。

それから先輩たちがいやに優しい。寮内でああしろ、こうしろと言われたことがない。寮生活面では先輩たちは常に率先垂範をモットーにしておられるようだ。と、これに気づくのにずいぶん日数がかかったが、Aさんは今さらながら恐縮した。「これは申し訳ない」とさっそく先輩を見習うようになっていった。

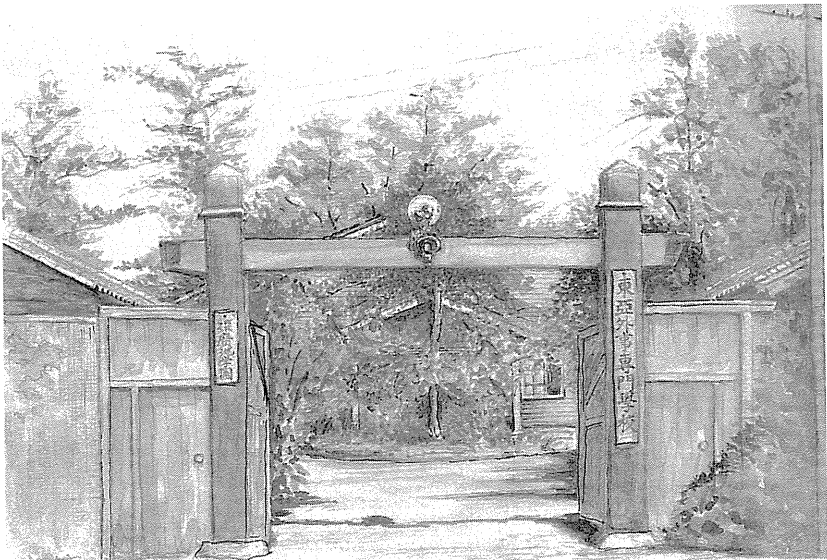
教室では、専門の中国語の授業が多かった。中でも西田先生の授業ぶりは、群を抜いていた。五十数名の一人一人に指名して、何か一言でも必ず中国語で応答させるという授業であった。そして既習の所は次の時間までに暗誦を課せられた。授業中、先生は机の間をく

るぐると廻りながら指名しては暗誦を命じ応答させるという工合であった。

したがって、昨今の大学でよく物議を醸す、授業中の私語がどうの、居眠りがどうの、ケイタイがどうのというようなトラブルは全く考えられない雰囲気がいっぱいの教室であった。

西田先生は、一言で言うならば「厳なれども威ならず」。当時、陸軍大学校の教授も兼ねておられた。

東亜専門学校の発足は、かくの如くまさに「知徳一体の教育」を具現化していったのである。



昭和17年頃の正門と大講堂の面影、今は門柱も取り壊され、付近の景観はすっかり変貌している。わずかに大講堂が往時の面影を残している

パラリンピックへの挑戦

国際経済学科三年

国枝 慎 吾



パラリンピックまでの一年間

二〇〇三年の六月にポーランドで行われた国別対抗戦（チーム戦）で優勝し、十月になると、各国の強豪が本気になって大会に臨んできた。パラリンピックでのシード権を獲得するためである。パラリンピックでは車椅子テニス男子は計六十四人の選手で争われ、シード権が上位十六人に与えられる。シード順が上位であるほど、さらに上位の選手とは勝ち進まなければ当たらなくなるため、パラリンピックまでにどれだけ世界ランキングを上げられるかが勝負となる。パラリンピックが翌年の九月に行われる

ため、〇三年十月より〇四年九月までの一年間の大会がランキング対象となる。当時世界ランキング二十位前後だった私も当然、シード権を狙っていた。〇四年四月までに何回もの海外遠征の結果、私のランキングは世界八位になった。私の目標は、「パラリンピックで第八シードを獲得すること」だったため、世界八位というのは大きな目標の一つだった。

しかし、五月からは怪我との戦いとなった。練習中に手首を故障してしまい、フォアハンドを打つ度に痛みが走った。五月に福岡で行われた世界四大会の一つであるジャパンオープンでも、痛みが残る

中、試合に出場することにしたが、結果が出なかった。「故障している間に、ライバル達は試合に出てランキングを上げてくる」と思うと、焦らずにはいられなかった。トレーナーとも相談して、練習しながら治す方向で、一ヶ月経つとフォアハンドを打つてもほとんど痛みがなくなり、七月からの欧州遠征に出場することにした。しかし、痛みは、「完全に」なくなつた訳ではなかった。

欧州遠征は、フランス、オランダ、ベルギー、イギリスの四つの大会を回る予定でいた。フランスの大会一回戦で、試合中に再び手首が痛くなり敗戦。日本にいるトレーナーと電話で相談した結果、「帰つて来い」と言われた。私は「ここで帰つたらランキングが落ちてしまう」と反論したが、「慎吾の目標はなんだ？ シード権を取るのか？ パラリンピックで、早い段階で強い相手と戦つても勝てばいいじゃないか」と説得され、その時に私は「シード権というものに執着しすぎていた」ということに初めて気づいた。帰国後は「焦らずじっくり」を念頭に三週

間テニスをやらず治療に専念した。そして九月……。

パラリンピック

幸運にも、ランキングは八位をキープでき、私は第八シードを獲得できた。世界六位の斎田選手と組むダブルスでは第一シードである。目標である「シングルスでメダル、ダブルスでは金メダル」を掲げ、遂にアテネ入り。アテネ滞在期間は、試合までの準備に一週間、大会を一週間、大会後の一週間はオフで、計三週間である。私達パラリンピック選手も、オリンピック選手が使つたものと同じ選手村で生活する。選手村にはレストランはもちろん、インターネットブースやヘアースalonなどの設備が整っている。宿舎は四階建てのアパートに、競技団体ごとに部屋が割り当てられる。オリンピックから一ヶ月経ち、私達が到着したときには工事状態で道路のタイルははがれかかつていた。

到着した翌日から、練習のためテニスコートへ移動した。オリンピックのために建設されただけあつ

て、テニスコートは新しく、真つ青な綺麗な色をしていた。とくに、セクターコートは、私が今まで体験した中でも最も大きく、「ここで決勝を戦えたら最高だろうな」と思った。肝心のテニスの方も、手首の怪我は完全に癒えていて、なおかつ調子も上がっており、まさに「絶好調」という表現が最適だった。そのせいか、試合までの一週間が長く感じられ、大会が始まるのが待ち遠しかった。

試合が始まると、そこには想像以上の緊張感があった。シングルスー、二回戦は格下の相手で、ストレートで勝利することができたが、三回戦は世界九位のウィクストロム（スウェーデン）との対戦だった。私は過去二度対戦して二敗していたため、ここがトーナメントの山場の一つと思っていた。予想通りフルセットまでもつれこむと、プレッシャーから試合中に何度も吐くほどだった。しかし、苦しみながらも勝利することができた。

シングルス準々決勝は、世界二位で前回のシドニアパラリンピックの金メダリストであるホール（オ

ーストラリア）との対戦だった。この試合に勝てばメダルが見えてくる。しかしフルセットまで粘ったが、ホールの精神力とプライドのこもったショットに負かされた。ただ、ホールからセットを奪ったことで、私のテニスが好調であるという確信が持てた。シングルスで負けたショックを引きずることなく、ダブルスで全力を尽くすことを心に誓った。

ダブルスパートナーの齋田選手とは日頃から共に練習をし、お互いの特徴を知り尽くしている。一年半前にダブルスを組み始めたときから、コンビネーションはかみ合っていた。数々のトーナメントで成績を収めた甲斐あって、パラリンピックでは第一シードで、金メダルの最有力候補であった。

しかし、「金メダルの最有力」というプレッシャーが、苦しい場面では重くのしかかる。準決勝のオーストラリア戦では、マッチポイントを握られ、後がない状態だった。「絶対勝たなきゃ」という気持ちがない空回りし、ミスを恐れ、思い切ったプレーができなかった私の支えとなったのは齋田選手だった。「大丈

夫、まだいけるぞ」と冷静な表情で勇気づけてくれる。あのとき、斎田選手が普段以上に大きく見え、「俺の後ろには斎田さんがいる」と自信が持てた。タイブレークまでもつれ込んだ試合を勝利した瞬間、「斎田さんと組めて良かった」と心の底から思った。

決勝は、準決勝での反省もあり、思い切り楽しもうと思った。センターコート、大勢の観衆…全てを楽しんでいたので最高のプレーができた。そして念願の優勝。「優勝できたら気持ちが爆発するだろう」と始まる前に思っていたが、そんなことはなかった。「やっと終わった」という安心感が胸が一杯になった。表彰台で君が代が流れているときは、手首の怪我で苦しかったときのことを思い出し、今まで支えてくれた方々への感謝の気持ちで溢れていた。

◆アテネが終わって

あれ程のプレッシャーを感じることは、これから的人生でもおそらく数える程しかないでしょう。金メダルを取ったことよりも、そんな体験ができたこ

とが自分にとって一番大きな「価値」だった、と今は思います。

多くの方々の支えによって、アテネでの結果を残すことができました。心より感謝申し上げます。すでに次の目標が明確になっていきます。それを掴むためには、また多くの方々の応援が必要になることと思います。これからもご声援宜しくお願い致します。

◆パラリンピックでの戦績

◆シングルス

一回戦 対オンアシエ（インドネシア） 6―0 6―0
二回戦 対マッセイ（イタリア） 6―0 6―2
三回戦 対ウィクストロム（スウェーデン）
6―3 4―6 6―3
準々決勝 対ホール（オーストラリア） 2―6 6―0 4―6

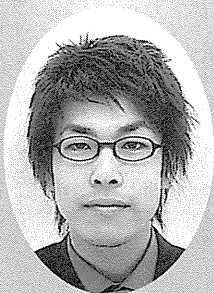
◆ダブルス

二回戦 対ポーランド 6―0 6―0
準々決勝 対イギリス 6―1 6―1
準決勝 対オーストラリア 4―6 6―4 7―6
決勝 対フランス 6―1 6―2

第四十一回麗陵祭という

新しい第一歩

麗澤大学学友会麗陵祭実行委員会委員長 水長 顕仁



私が第四十一回麗陵祭の実行委員長に決定したのは、昨年の十二月ごろでした。この時から今現在に至るまで、言葉では表現できないほど様々な経験をさせて頂きました。

まず麗陵祭をつくっていくにあたって、私は二つの目標を掲げました。一つ目は、「有言実行」です。私は委員長の一言が麗陵祭をつくっていく柱になっていくと考えました。リーダーの一言で組織は動いていくのです。私は麗陵祭実行委員長として、言動に気をつけていこうと決心しました。主観的な意見を抑え、できるだけ客観的意見を取り入れ、冷静か

つすばやい正確な判断をしていこうと目標を掲げました。

二つ目は、「意識改革」です。私が委員長になるにあたって、昨年度の反省点をまとめた資料を前麗陵祭実行委員長である中澤正幸氏から頂きました。その資料を見て私が考えたことは、麗陵祭実行委員の意思疎通が足りないのではないかとということでした。つまり、実行委員同士の意思疎通がしっかりと行なわれれば、トラブルや反省につながることはかなり減少するのではないかと考えたのです。実行委員から変わらなければ、麗陵祭は変わりません。学生の中に

は、近年麗陵祭がマンネリ化しているという声もありました。以上を踏まえて、私は麗陵祭実行委員会という組織の見直しとともに、新しく、全員が楽しめるような麗陵祭実行委員会をつくっていかうと思いい、その土台となる足場を固めることから始めようと思いました。私の仕事は麗陵祭を変えていけるリーダーにならなければならぬと決心しました。

私はこの二つの目標を達成するため、麗陵祭をつくっていききました。中澤氏からは「自分が麗陵祭の実行委員長になろうと決心した理由を忘れずにやっていけ！」と言葉を頂きました。そして私は委員長という責任ある役職を受け継ぎました。

しかし、麗陵祭までの準備は思うようにいきませんでした。毎週の会議では徐々に進行速度が落ちていき、議題があまり進みませんでした。さらに団体とのいざこざが何度かあり、実行委員長の言動として好ましくない態度をとってしまったこともありました。

そんな私を変えたのが大学祭交流会でした。昨年



学生食堂「柎」に実行委員会が集合

度までの交流会は、学友会と学園祭実行委員会は合同で交流会を行ってきました。しかし、毎年問題となるのが学友会の話したいことと学園祭実行委員会の話したいことが食い違つて時間が過ぎていくという意見が多数見られました。そこで私は新たに学園祭実行委員会だけで「大学祭交流会」を開催しようと考え、企画・運営をしました。この交流会を通じ、自分たちが「当たり前」にしていたことが実は「当たり前」ではないことが浮き彫りになり、様々な視点から物事をみることができるようになったと感じています。またひとつの会を運営していくことの難しさを同時に感じました。

夏休みには手賀沼ジャズフェスティバルのスタッフとして参加しました。このイベントを開催するにあたって、五月中旬あたりから隔週日曜日に会議が開かれていました。私は麗澤大学の代表としてその会議に臨みました。会議では、私たちと倍以上年が離れている人々とたくさん話すことができ、それぞれのリーダーとしてのあり方を学びました。そして

当日は百人近い麗澤大学生をシフト制にして、様々なブースの手伝いをし、全員を動かしました。ここでは麗澤祭のもととなる人を動かすことの難しさを学びました。またこのジャズフェスティバルでは、全員がボランティアであり、ボランティア精神の大切さも学ぶことができました。

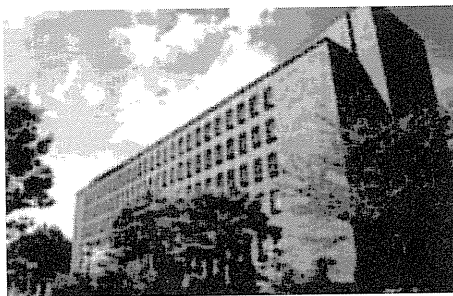
そしてついに麗澤祭がやってきました。今までやってきたことに手ごたえや満足は感じていました。それでも前日までたくさんの不安を抱えていました。しかし、私にとってこの不安は期待に比べると、それほど大きいものではありませんでした。それは今年度のテーマである「Fun Fun ファンファーレ」第一四十一章開幕!!」という言葉からでした。このテーマには「四十回目の区切りを終え、新しく踏み出す第一歩を大切にしたい。また個人的にもその第一歩を大切にしてもらいたいという願いを込めて、第四十一回目の麗澤祭をわくわくしながら楽しんで欲しい」という意味が含まれています。だから不安ではなく、私もわくわくしながら待つことができました

のです。このテーマだったからこそ、私は第四十一回麗陵祭開催まで辿り着いたと感じております。

そしてこの第四十一回麗陵祭を迎えました。天候は三日間通じてあまり思わしいものではありませんでしたが、結局一日目の午前中以外は、晴天時のタイムテーブルでできました。これも支援して下さいました皆様方のお力添えと麗陵祭実行委員会の熱い気持ちがあつたからだと思っております。私がこの麗陵祭で感じたことは、実行委員というたくさん仲間が協力してくれたことです。何かをつくっていくには自分一人じゃ何もできないことに気付きました。何事も人々と助け合いながらではないと人間は生きていけないことを実感しました。そして、仲間がいることの大切さや幸せを感じる事ができました。

これらの様々な経験によって、第四十一回麗陵祭の成功につながったと感じております。麗陵祭はまた「新しい第一歩」を踏み出したばかりです。私は微力ですが、麗陵祭を変えていく土台となる「新しい第一歩」はつくったつもりです。そしてこれを後

輩に受け継ぎ、伝統を守りつつ、また新たな麗陵祭がつくられると信じております。これからも麗陵祭を末永く見守っていて下さい。まだまだ麗陵祭は終わりません。これを読んで頂いた方々にも、そして私の中でも。



テニス部の活動を通じて学んだこと

テニス部女子主将

国際産業情報学科三年 三浦 友子



麗澤大学テニス部では、授業期間中は毎週木曜日と土曜日を全体練習とし、その他の日は自主練習となっています。大学と高校の大きな違いは、皆それぞれ授業の時間が違うということです。高校時代は皆一緒に時間に授業が終了し、毎日一緒に部活を行っていました。しかし、大学では、それぞれ授業の時間が異なっているため、授業の合間で空き時間を探し、テニスコートに行き、誰かいたらその人に頼んで打つ…という感じです。そのため、自分でテニスのための時間を作らなければならない事と、自分がうまくならない、強くなりたい、と思って自主的

に練習していかないと、個人差がだんだん生まれてきてしまう、という現状があります。つまり全て強制ではなく自己責任であると言えます。逆に言えば高校時代の方が楽だったかも知れませんが、今日はやりたくないと思っても毎日部活にでるのは当たり前であるためやらなければなりません。しかし、大学はやりたくないからとか遊びたいからなど言っていては下手になる一方です。しかもそれは自分の責任となってきました。大学に入って、まず初めに時間の使い方をうまくしていかないと、後でそのつけが自分にまわってくるのだ、逆にうまく使っていけば有意

義な大学生活になるなど思いました。

私は大学に入学して約三年になりますが、テニス部で活動をしてきて本当に様々な事を学んできたと思います。それは高校とは違い練習の時に先生がいないため、自分達で何もかもやらなければいけないため学ぶ事が多いのです。テニス部の仲間とは、喧嘩や話し合いを重ねていくに当たって、自分を知ることにも出来るようになってきたし、考え方の違う仲間と一緒に活動していくに当たってどのようなやっていくべきかなどを学びました。前の私は周りの人の意見をあまり聞く事が出来ず、自分との考え方が違う人を理解しようとしませんでした。だから自分の意見を押し付けようとする事も多々ありました。しかし、それでは皆もやる気にはならないし、誰も動いてはくれません。部活をやるにあたって、色々な考えをもっている人がいる事を学びました。私はテニスが大好きでテニス部に入って頑張っているけれども、他の人は勉強が本当に頑張りたいとテニスはほどほどでいいやという人もいれば、バイトと勉

強で手がいっぱいだとテニスに費やす時間が少ない人、色々な人がいます。そんな中で、この人はこれを重要としているのだ、と理解し、その中でいかにテニスの時間を作る事が出来、練習にどれだけ集中してやれるかなどを話し合ってその人が何を考えているのかを理解する事の大切さ、コミュニケーションの大事さというものを学んだと思います。話し合ってお互いを理解する事で同じ目標に向かって頑張る事が出来るのです。

テニス部では、四年生の九月から行われる関東大学テニス夏季テニスリーグという大会が大学生活最後の試合となります。その夏リーグで、女子は一部から五部、男子は一部から七部あるうち、昨年度は男子七部ベスト十六、女子五部ベスト十六という結果でした。男子は七部から六部への昇格、女子は五部から四部への昇格を目指して毎年頑張っています。しかし、まだ歴代でその記録はありません。ベスト十六の壁も破った事ありません。しかし今年の夏リーグでは最後の負け試合が3-4という本当に競

った試合でした。もう少しでこの壁を破る事が可能
なところまできました。

今年の夏リーグで感じた事は、選手でない人も選
手である人も本気で勝ちたいと思わなければ、勝て
ない、という事です。夏リーグには魔物がすんでい
ると思います。他の大学の人もこの日のために
みんな一所懸命に練習してきてその力を発揮しよう
とするため、何が起こるかわかりません。でも、努
力した人にはそれなりの結果はついてくるというの
は確かです。つまりごまかしはききません。その、
勝ちたいという気持ちを部員全員が持つのは本当に
簡単な事ではないのです。

夏リーグ前にやる気になってきて練習する人もた
くさんいますが、それでは遅いのです。もう一年前
の今のうちから夏リーグに向けて練習し、トレーニ
ングを積み重ねていかなければなりません。現状を
いえば、その事を自覚できているのは上の立場にい
る人ぐらいだと思います。しかし、それをみんなに
伝えて今から部員全員をやる気にさせるのは主将で



テニス部のメンバー

ある私の役目であると強く感じています。それは簡
単な事ではありません。みんなの気持ちを動かすと

いう事は、私が実際頑張らないとみんなもわかってくれないと思います。

大学に入ってまで部活をやる人は減ってきています。大学に入ったたら勉強をしたいとか、バイトをしてお金をためて遊びたいという人が多いです。勉強とバイトと同時に部活をやっていて大変な部分はありますが、やりがいはあると感じます。忙しい中でも時間をうまく使ってテニスの練習をしたり、そこまでして何で部活をやるの：とよく聞かれる事がありません。それでも私達が部活をやり続けるのは、大変な事以上に得るものが大きいからです。最後の夏の大会は本当に一戦一戦が緊張感あふれるもので部全体が一致団結するのです。みんなが一つの目標に向かって頑張るのです。その力というものはすごいです。その中で試合をして勝っていくのは楽しいです。もちろんプレッシャーはものすごくかかります。相手が強かろうが弱かろうが、夏リーグは何が起きるかかわらないので油断は出来ません。でも負けても勝っても、みんな持っている力の全てを出し尽く

して終わるので、一人一人何かを学んで終わっていきます。それまでに喧嘩もするし、楽しい事もあるし、色々な人間同士の関わり合いで色々な経験をする事が出来ます。これは勉強やバイトでは味わえないものであると思います。この人間同士のやりとりを通してみんな成長していきます。

私は主将になって初めて感じた事があります。それは色々な人に助けられ、支えられながら私たちは部活動を行っているという事です。テニスコートをいつでも使用できる事は本当に有難い事です。そして、学生課の方々にも書類関係をまとめて頂いたり、テニス部の先生、OB・OGさん方とは、どのようなしたらテニス部がもっと活性化するかなどを考えて頂いています。麗澤後援会からは交通費を援助して頂いています。私達はみなさんのおかげで自分達の負担が少なくなつて部活に集中出来るのです。感謝の気持ちでいっぱいです。私一人では出来ない事をみんなの助けをもらつてやっていける事を忘れずにこれからも日々努力していきたいと思っています。

昨今の就職状況と麗大生の実態

就職部 副部長 三浦 有三



平成十年四月、それまで勤務していた法人の管理部門から就職部に移動になった。昭和四十五年三月に卒業してから実に二十八年ぶりに母校へ戻ったというわけである。以来就職部三年、学生部二年、そして再び就職部で二年弱と都合七年足らずではあるが、日々学生の皆さんと接する毎日を送っている。

この二十八年の間に本学は大きく発展してきた。学生数はかつての全学生数三百六十名から二千九百名を越え、昔の九十倍もの数である。また、学生たちの出身地も大きく変わり、近年では地元千葉を筆頭に、茨城、埼玉、東京、栃木、群馬等の関東出

身者が大半を占めている。そして何より大きな変化は、女子学生が多くなり、いつの間にか過半数を超えるようになったことである。さらに、学生たちを取り巻く環境や社会の激変に伴い、学生たちにも大きな変化が生じていることは言うまでもない。

そこで今回は、最近の学生たちの状況について、彼ら彼女らの就職を支援している中で感じていることを幾つかご報告したい。

一、就職の現状

平成十六年三月卒業生の就職内定率は、三月十四

日時点で八五・七%であった。ところが約一ヶ月後に集まった報告では、それからさらに三十一名が就職しており、九一%になった。全国の統計によれば文系学生にとつて昨年が過去最悪の就職環境であったことは事実であり、本学の学生たちは大いに健闘したと言つても過言ではないであらう。

しかし、実は大きな問題が根底に横たわっている。就職内定率とは就職希望者数を分母に就職内定者数を分子として割つた数であり、卒業生全体を分母にした就職率で見ると実際は五六・二%である。これは近年の全国的傾向であり、文部科学省学校基本調査によれば、平成三年の八一・三%を境に低下の一途を辿つており、全国平均は五五・八%となつている。これに進学一一・八%を加えても、全体の約三四%が正規の社員、職員として就職していないことになる。まさしく「フリーター」と呼ばれる存在である。この言葉は、求人情報をビジネスの柱として大きく成長したリクルート社の人間が、「フリーアルバイター」を体裁よく省略して使い始め、平成三年

ごろから瞬く間に広く一般に使われるようになったと言われている。しかし、この言葉のもたらす何となく気楽さを感じさせるイメージも相俟つてか、若者たちの間に何が何でも就職するとか、就職するのが当然という風潮が急速に薄れてきたように思う。

最近ではさらに「ニート (NEET = Not in Education Employment or Training)」と呼ばれ、学校にも、雇用にも、職業訓練にも参加していない人々が増加して社会問題化している。要するに意欲を喪失した若者が増えているのである。本学においても、本人が登録せず就職部から接触できないために進路を確認できない人が九・三%となつている。ただし本学の場合、外国人留学生が相当数含まれており、彼らの大部分は卒業後帰国して就職するが、その結果が当方では把握できないため、実態以上に本学の就職率が低くなつてしまふのも事実である。

大学は就職のための予備校ではない。しかし、世の中の役に立つ有為な人材を送り出す公共教育機関としての義務があることは言うまでもない。当然、

社会に出るための準備教育は必要であり、最近では各大学がこぞって「キャリア教育」という視点で会社の仕組みを教えたり、カリキュラムの中に正課としてインターンシップを位置づけたりしている。

二、本学学生の特徴と問題点

本学学生の一般的な特徴として企業の人事担当者などからよく耳にするのは、真面目、誠実、大人しい、慎重で控えめなどの言葉である。これらの言葉は三十五年も前の私の学生時代から、一貫して言われている。しかし今は激動して止まない世の中である。社会全体が平穏で順風の時代であればともかくも、逆風や荒波の逆巻く中では、瞬時の判断や行動力が求められる場合も多い。競争が厳しくなっている現在、従来に比べてより積極性を表に出したアグレッシブな性格が高評価を得ている時代なのである。前述の企業人事担当者たちの言葉は、裏を返せば本学の学生たちは、素直だがややひ弱であったり消極的と見られる場合もあるということに他ならない。

昨今企業が採用に当たって求める人物像は、第一に人柄である。明るく元気で積極性があり、かつリーダーシップを持つ人ということは、概ねいつの時代も変わらないと言えるが、以前よりもっと具体的にコミュニケーション能力を重視している。しかし、コミュニケーション能力といっても何も特別な能力を求めているわけではない。人の話をしっかりと受け止めて正しい日本語で話すことができ、きちんと書けることが求められているのである。ところが今の若者たちの中にはこれが難しいと思える人が結構多く目に付く。満員電車から降りるときに周囲の方にちよつと声をかけて通してもらおうようお願いするなど、かつてはお互い当たり前だったことなのに、無言で強引に人を押し退けようとする無作法な人がいつの間にか次第に増えているようだ。

四六時中ヘッドフォンを耳にあてて、音楽を大音量で聞きながら自分だけの世界に籠もりたがる若者や、用事があっても単語を途切れ途切れに並べるだけの会話。上辺だけで中身の乏しい携帯電話の会話

やメールなど、ホンモノのコミュニケーション能力を伸ばすことへの阻害要因は増える一方である。

確かに見知らぬ同士はお互いに声をかけにくい。しかし、最近目立つのは灰皿から三〜四メートルしか離れていないところに、地面にタバコの吸殻を置いていくことである。よく見ると、火はきちんと消してある。決してポイ捨て、投げ捨てではない。少し離れた所から彼らの様子を観察していると、灰皿の周りを他の人々が囲んでいる場合、一声掛けて断りを言い、彼らの間へ割って入って吸殻を灰皿に捨てることのできないのである。大したことではないのだから遠慮なく声を掛ければいいのにと思うが、彼らの感覚では我々が思う以上に大変なのであろう。

その彼ら彼女らが、就職活動を経験すると、別人のごとく急激に大きく成長する場合が多い。我々就職部のメンバーはいつの頃からかははっきりしないが、部に顔を出さず就職活動中の学生が部員の誰にでも話しかけ、スムーズに用件を処理できるようになれば、間違いなく内定が得られることが予測できる

ようになった。

もちろん、せっかく優れた素質、潜在能力を持ちながら、準備不足の故にSPIや一般常識テストで足切りに遭う学生も多い。また、十分な情報を入手せず、偏った判断や思い込みの結果、簡単に就職を諦める人も存在する。あるいは就職活動への取り組みが立ち遅れたために、希望していた企業にエントリーできず、勿体ない結果に終わる場合もある。普段は学校とアルバイト先とアパートの三箇所を回るだけで一日が過ぎてしまい、新聞を読まず、社会の動きに疎遠になっていく人も少なくない。当然、社会意識が欠けたり将来設計を先送りするなど現実から逃避する人もいる。

そんな彼ら彼女らに、我々就職部のメンバーができることは、とにかく声を掛け続けることである。いつも我々が見守っているよというメッセージを伝えるつもりで、我々の方から積極的に学生たちに声を掛けようという心がけている毎日である。

情報処理支援ハブ(ISSH)について

外国語学部助教授 千葉 庄寿



麗澤大学は文科系大学でも屈指の充実した情報設備を誇っている。情報システムセンターが陰になり日なたになりその管理運用にあたっており、パソコンルームにはティーチング・アシスタントが常駐し、学生は快適にパソコンを利用することができる。入学時のガイダンスで新入生に説明しているように、「パソコンを買わなくとも四年間みっちり情報処理を学び、パソコンやネットワークを利用できる」環境が整っているのである。

外国語学部で開講している情報系の科目も、語学系の学部としては非常に充実している。全員履修の

「コンピュータ・リテラシー」に加え、マルチメディアの理解を深める「情報科学」、さらにプレゼンテーション、ウェブページ作成、統計分析、プログラミング、多言語処理といった応用科目が「情報処理演習」として開講されており、四年間を通して、大学の情報設備の利点をフルに活用した勉強ができるのだ。

一方で、情報処理関連の授業を担当する私のもとには、学生から授業以外の質問や相談のメールも毎日のように届く。「ノートパソコンを留学先に持つていくのですが、大丈夫でしょうか?」「情報処理の資

格試験にはどんなものがあるのですか?」「韓国人にメールを送りたいのですが、ハンゲルはパソコンでどう入力するのですか?」「パソコンを買いたいのですが:」「PDFって、何ですか?」「もっとExcelの勉強がしたいんですけど:」等々、相談の多くは「パソコンやソフトウェアの利用法について、もっと知りたい、もっと勉強したい」というものである(中には「先生!ウイルスに感染しちゃった!」とノートパソコンをかかえて真っ青になって研究室に飛び込んでくる学生もいるが)。

授業で学べる内容にとどまらず、情報処理をもっと知りたい、もっと学びたいという学生がいる。外国語学部で四年間学ぶ学生に、もっと多面的で柔軟な情報処理学習の機会を作れないか—このような動機のもと、情報処理に関する情報交換の中軸(ハブ)となる機能を作りたい、という思いを込めた「情報処理支援ハブ[Information Science Support Hub]」、略してISSH(イッシュ)の試みが始まった。

現在、ISSHでは「スキルUP講座」と「資格

試験対策講座」という名称のイベントを実施している。前者はパソコンの便利な使い方やソフトウェアの利用方法を講習するもので、大学院の留学生によるITハンゲル講座をはじめ、情報検索のコツ、PDF(Portable Document Format)、Webブラウザ活用術などをテーマに十二月末現在で五回実施した。後者では、パソコン検定(P検)三級とNTTコミユニケーションズが主催する.com Master★(シングルスター)をとりあげ、五回のP検三級対策講座、六回.com Master対策講座(十二月末現在)を開講した。また、六月末には、国際経済学部の先生方の協力を得てP検の団体受験を学内で実施することができた。

ISSHでは、大学の情報環境では触れる機会が少ないパソコンの運用・管理の知識を学ぶ機会も提供したいと考えており、現在、自分でパソコンを運用・管理するためのヒントをデータベース化してウェブページ上に公開する準備を行っている。また来年度には、パソコンを持ちよって運用・管理につい

ISSH 第二回情報スキルUP講座

？  ？

なんとなく使ったりはしたことはあるけど…私にも作れるの？

PDFって何？ 

—大学PCでPDF (Portable Document Format) 文書を読む、作る—

日時: 2004年6月25日 (金) 14:50-15:50 (1時間)
 場所: 図書館4階パソコン教室 (予定)
 講師: 千葉庄寿 (外国語学部)

麗澤大学の学生・教員であれば学部など問わず誰でも参加できます。

参加ご希望の方は以下のURLよりお申し込みください(先着順)。
<http://www.FL.reitaku-u.ac.jp/ISSH/learnmore.html>
 学内からのみアクセス可

>> 情報スキルUP講座について

情報スキルUP講座では、授業とは別に、麗澤大学の情報機器の使い方、互より情報、ちょっとカンクイ情報処理の知識など、知っておいて損はない便利な知識を毎回提供します。

情報スキルUP講座は、学部中ほど2週間(1回)のペースで開催します。

>> 情報講座: ISSH ホームページ (学内からのみアクセス可)
<http://www.FL.reitaku-u.ac.jp/ISSH/>

ISSH お問い合わせ先: 千葉庄寿 (Chiba Shouji)
 E-mail: schiba@reitaku-u.ac.jp

ISSH イベントポスター(第2回スキルUP講座「PDFって何?」)

また、講座への参加者が思ったように伸びないのにも頭を痛めている。情報処理に興味のある学生の日を引くため、アルバイトの大学院生に奔走してもらい、学内のあちこちに二十枚近いポスターを貼ったり、ホームページを立ち上げ、情報システムセンターのホームページにリンクを張ってもらったりしても、学生はなかなか気づいてくれないのである。授業とは切り離して考えてきたISSHのイベントであるが、やはり情報処理関連の授業などで積極

的に広報したほうがよさそうだ。

麗澤大学の情報設備の維持にあたっている情報システムセンターが、大学の情報教育の「ハード」面を受け持つとすれば、情報関連の授業や、学生に対する情報処理学習の支援、個人が所有するパソコンの管理・活用方法の教授は、大学の情報教育の「ソフト」面の活動ということになる。後者には、まさにISSHのような活動が担うべきところが多くある。

その意味でも、学生の皆さんにはISSHの活動をより身近に感じ、自己のステップアップに積極的に利用してもらいたい。また、国際経済学部の皆さんにも積極的参加を期待し、情報処理に関心のある人同士の学部の垣根を超えた交流を育んでいきたい(実際のところ、後期の資格試験対策講座には、国際経済の学生が積極的に参加してくれている。嬉しい限りである)。将来的には、大学教員の情報機器活用の機運とあわせ、教員と学生が肩を並べて学ぶ、というような風景が見られるようになるかもしれない。

編集後記

◆平成十六年は様々な災害に世界中が翻弄され、悩まされた年でした。このようなとき、私たちが寄り添い所はどこにあるでしょうか。本号では、麗澤大学の教養教育がその答えを見つかる場をいかに多く私たちに提供してくれているかが、よくわかります。できるだけ貪欲に、できるだけ多くの講義から、自ら答えを探究する力を育て、世界人の一人としての個を確立していきたいものだと考えました。(Y・O)

◆本号も〈特別寄稿〉・〈オピニオン〉・〈特集〉・〈コラム〉・〈麗大の今〉という五つの柱で編集しました。ご執筆くださいましたすべての皆さまに心より御礼申し上げます。

◆〈特集〉「麗澤大学の教養教育」では、両学部から合計十二科目(両学部共通科目も含む)を取り上げ、担当教員・現役学生・卒業生の皆さまからご寄稿いただきました。

◆本誌の編集委員会は左記のとおりです。金丸良子委員に代わって小口叔枝委員が、堀内一史委員に代わって竹内啓二委員が、松下駿広報課長に代わって田島正幸広報課長が、新たに加わりました。

◆ご感想・ご意見・ご提言などございましたら、麗澤大学広報課までお寄せください。(C・N)

麗澤教育編集委員会(平成十六年度)

委員長・中野千秋(国際経済学部)

委員(外国語学部)・小口叔枝、朴 勇俊

委員(国際経済学部)・竹内啓二、土井 正

事務局(広報課) 田島正幸、鳥潟貞幸、鈴木麻衣子

『麗澤教育』第十一号

二〇〇五年四月一日

編集 麗澤教育編集委員会

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 〇四―七一七三―三〇三〇

印刷所 株式会社毎日新聞東京センター

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー